

天壇の山に挑む

ミニヤ・コンカ東面

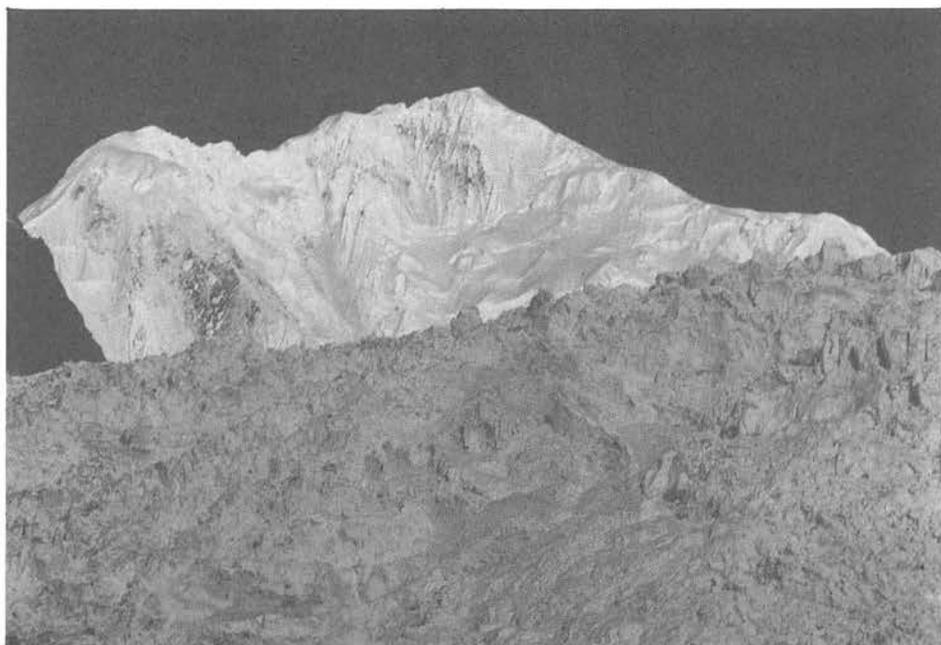
日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

天壇の山に挑む

日本ヒマラヤ協会(HAJ)

1991年ミニヤ・コンカ登山隊



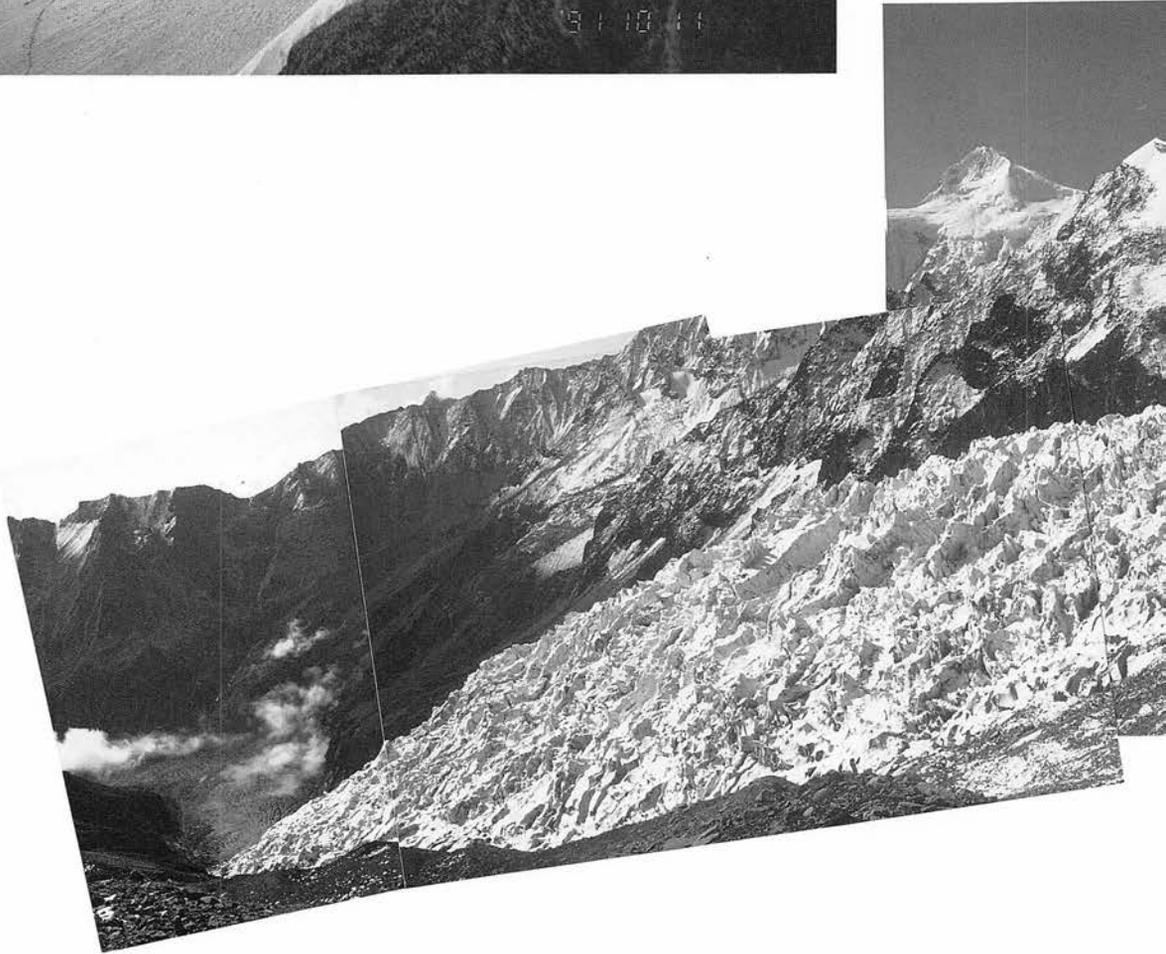


▲C 2'からのミニヤ・コンカ





左上 / ハイローコー氷河の巨大なアイスフォール
上 / イグアナ（アイスフォール右壁）の登攀
左下 / C1からの荷上げ
左 / 建設されたC2



左上 / エイメールンゼから見たハイローコー氷河

中 / C1~C2間のパノラマ (右端がミニヤ・コンカ)

右下 / ハイローコー氷河最奥部 (左上にエイメールンゼと北東稜の科尔)





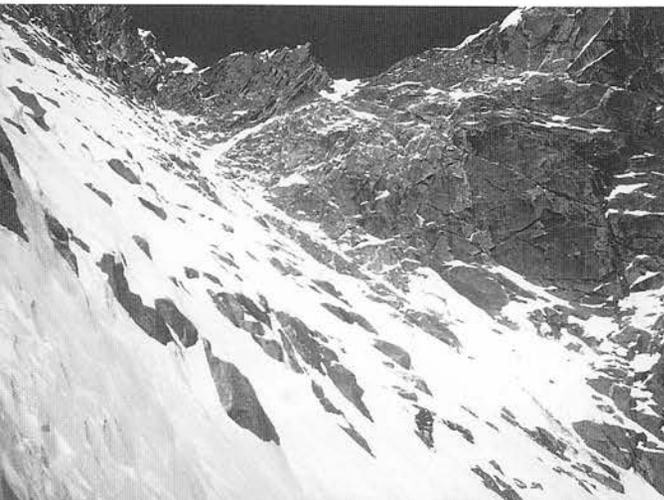


▲C 2 から見たミニヤ・コンカ東壁





左 / エイメールンゼ上部の登攀
上 / 北東稜のコルから見下ろしたエイメールンゼ
下 / エイメールンゼ最上部
右 / エイメールンゼ上部を登る森谷隊員





上 / 北東稜 6,400m (最高到達点) 付近
右 / C 3 から見た 7,060m ピーク
下 / C 3 とヤンズコー氷河側の山々







02.01.15.

▲北東稜上からの孫免仙山（ソイヤツツェン 6,886m）とC3

目 次

ごあいさつ			
日本ヒマラヤ協会ミニヤ・コンカ登山隊		天壇の頂を断念し、 北東稜を下る	伊藤 清晴 34
隊長 山森 欣一	1	エイメールンゼよ！ サヨウナラ	千葉 真嗣 37
		ハイローコーの霧に 別れを告げて	松田 靖彦 38
• 第 I 部			
登山報告		隊員の横顔	39
登山隊の概要	山森 欣一	5	
行動概要	〃	5	
ベースキャンプへの道	森谷 雅春	7	
イグアナ・ルートを発見	松館 正義	10	
楽園へのルート偵察	伊藤 清春	11	
イグアナを越えて荷上げ	林 雅樹	12	
雷鳥の鳴く大ガレに行く	川上 豪	13	
大氷瀑を越えて雪原へ	中川 裕	15	
長いガレ場の途上に			
オッパイ山はあった	松田 靖彦	15	
ヒマラヤン・ブルーに			
聳えるコンカ	高見 清十	17	
北東稜のコルへ始動	中川 裕	19	
希望のコルに王手を	河内 正樹	20	
C2'を建設し希望のコルへ	林 雅樹	22	
登山は佳境へ入った	伊藤 清春	24	
岩と氷に別れを告げて	松館 正義	26	
苦闘ノ頂は遠く	中川 裕	28	
登頂断念前後	山森 欣一	30	
極地法の厳しさを知る	森谷 雅春	31	
		随想	
		以心伝心を越えて	伊藤 清春 46
		高所順応初体験記	森谷 雅春 47
		謝々了！	松田 靖彦 48
		'91中国日誌	中川 裕 49
		お預けされた頂上の一人言	河内 正樹 51
		登山を振り返って	林 雅樹 51
		勉強になった出会い	千葉 真嗣 53
		初心を忘れず	高見 清十 54
		初めてのヒマラヤ登山	川上 豪 54
		参加を断念する	須藤 圭一 55
		びっくりしたなぁ～	松館 正義 56
		最高到達点に残した	
		スノーバー	居川 康祐 57
		ミニヤ・コンカあれこれ	山森 欣一 58
		ミニヤ・コンカ	
		氷河上で考えたこと	陶 法義 60
		中国の旅	
		一人歩きの20,000キロ	居川 康祐 63

ご あ い さ つ

隊長 山森 欣一

1991年ミニヤ・コンカ登山隊の派遣にあたりましては、皆様に大変お世話になりまして誠にありがとうございました。

ミニヤ・コンカ峰は、中国西南部に位置する、四川省の西部を走る「横断山脈」の主峰として、古くから知られた山であります。そのピラミダルの山姿の故に、中国のマッターホルンとも呼ばれております。

日本でミニヤ・コンカ峰が一躍有名になったのは、1981年北海道隊の大量遭難と、翌82年の市川山岳会隊の松田宏也氏の奇跡の生還など、岳人にとっては不名誉な出来事のためによってでりました。

ミニヤ・コンカ峰は、その位置関係から複雑な気象条件下にあり、多くの水分を受け氷河の発達も著しいものがあります。これまでに登頂されたルートは西面からアプローチしたものばかりであります。私達は東面のハイローコー氷河にルートを求め、北東稜からの登頂を目指しました。

結果は核心部であります北東稜上部へ肉薄したにとどまりました。全隊員12人が全力を出し切って敗れた訳ではありませんでした。従いまして或るメンバーにとっては、撤退の指示に不満が残ったかも知れません。

出発前に目標として掲げました「テイクイン・テイクアウト」の現場における実施はほぼ徹底され、上部の固定ロープを除きほとんどを処理することができました。純白に輝くミニヤ・コンカを少しでも汚染したくないとの気持ちがそうさせたのだらうと思っております。

最後にお世話になりました各位に改めて感謝申し上げます。ごあいさつといたします。

第 I 部

登山報告 隊員の横顔 随 想



登山隊の概要

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会ミニヤ・コンカ登山隊 (H A J Minya Konka Expedition 1991)

2. 派遣母体

日本ヒマラヤ協会 (The Himalayan Association of Japan 略称H A J)

3. 隊の構成

山森欣一隊長以下12名 中国側スタッフ3名

4. 登山期間

1991年9月10日～11月11日 (63日間)

5. 目標の山

ミニヤ・コンカ (Minya Konka, 貢嘎山, 7,556 m) 中華人民共和国・四川省甘孜藏族自治州康定県 & 瀘定県 北緯29度37分 東経101度53分 東面ハイローコー氷河から北東稜

6. 結 果

1991年10月20日と22日に6名が北東稜標高6,400 mに到達。

7. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会ミニヤ・コンカ登山実行委員会

会 長	稲 田 定 重	(日本ヒマラヤ協会理事長)
実行委員長	山 森 欣 一	(" 専務理事・隊長)
事務局 長	尾 形 好 雄	(" 常務理事)
委 員	八木原 罔 明	(")
"	鈴 木 雄 一	(" 理事)
"	登山隊隊員	

8. 事務局

〒169 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル506号

日本ヒマラヤ協会 ☎03-3367-8521 FAX 03-3367-4509

行 動 概 要

9月10日 成田発10時23分発 JAL 781 便、北京着14時30分。北京空港で国内線に乗換え、北京発18時30分。成都着20時40分

11日～12日 成都にて出発準備。四川省登山協会主催歓迎宴。

13日 成都→雅安→二郎山→瀘定→磨西着。(ジープ2台、マイクロバス1台、トラック1台)

14日 磨西(モーシ1,500 m)からポーター94人によるキャラバン。第三営地(2,940 m)

15日 第三営地を出発し、ハイローコー氷河上のBC到着(約3,400 m)

17日 チーム編成決定(Aチーム、L中川、居川、林 Bチーム、L伊藤、松田、河内、千葉)

Cチーム、L松館、森谷、高見、川上)

- 9月22日 C 1 (4,200 m) を左岸支稜上に建設(以下各キャンプの建設はメンバーが初めて宿泊した日)。
29日 C 2 (5,000 m) を上部氷河上に建設。
- 10月5日 北東稜へ抜けるエイマイルンゼ内に固定ロープ16本を張り終える。
9日 C 2' (5,200 m) をエイマイルンゼ取付きに建設。
13日 北東稜コルを越えヤンズーコー氷河寄りにC 3 (5,800 m) を建設
14日 北東稜側壁に7 P ルートを延す。
20日 更に7 P ルートを延し合計14Pで標高約6,400 mに到達する。
21日 登頂断念。
22日 上部荷上げ物資の撤収とC 3撤収。
25日 全員BCへ下山。
28日 C 1撤収。
31日 BCを撤収し、ポーター40名で第一営地(1,920 m)へ下山。
- 11月1日 第一営地→磨西→康定。
2日 康定観光→瀘定橋見学→二郎山→雅安。
3日 雅安→成都帰着(錦江賓館)
4日～5日 成都滞在隊荷整理。
6日 宝光寺と成都市内観光。
7日 樂山大仏見学。
8日 武侯祠など見学と買物。夜は四川省登山協会関係者を招いて答礼宴。費用精算。
9日 森谷、居川、林は離隊。本隊は北京へ。中国登山協会の招宴。
10日 万里長城見学。費用精算。
11日 北京発大阪行JAL 786便にて大阪へ。松田と別れ残りは国内便JL 130で羽田着。20時40分解散。



ミニヤ・コンカ位置図

ベースキャンプへの道

— ハイローコー氷河を目ざして —

9月10日 東京→成都

暗闇の成都空港に降り立った。タラップを降りて自分の足でエアポートターミナルまで歩く事に感動し、やっと中国に来たんだと何回も飛行機を振り返りながら歩いた。

東京のHAJ事務所で5:00に起床し、5:40に出発した。朝方まで酒のいきおいで皆冗談を言いあって、眠った連中を起こしていたので完全に不眠状態であった。早く日本を飛び出したかったがなかなか時間ばかり進み、落ち着かなかった。

須藤さんが空港まで見送りに来てくれ、そのうえお守りまでいただいて皆感激してしまった。見送りで唯一ガールフレンドが来たのは、K隊員のみであった。

いよいよ成田空港を10:00に飛び立ち機内の人となったが、なかなか遠征の実感が出てこなかった。

14:30北京空港に着いた。成都行き飛行機の出発時間の表示が予定時間になってもなかなか出てこないで、遅れているらしいということが分かったが、時間が分からなかった。中国語会話の本を見ていた私に「何時に出発するか聞いてみる」との隊長命令で、ピクピクしながら本の文章を指で示し、日本語でしゃべっていたら紙に時刻を書いてくれた。

高見がトイレに行きたいがどこかわからないと言っているので「ツォソー」と言ったらいいよと教えたが、全く通じなくて事務の女性が笑っていた。帰国する頃になって正しい発音が分かった。それは、「ツェソー」と言えば通じたのである。

最初に中国人に教えてもらった中国語は、北京空港国内線でお茶売りをしていたおばさんに、成都是「チョンドゥー」と言うんだよ、と何回も笑顔で優しく教えてくれた。

次に印象に残っているのが成都行きの飛行機の

中の事である。大きな荷物を持って入った男性が、自分の席の横の通路に置き通行の妨げとなった。当然スチュワーデスが注意するが、その男性は頑として指示に従わなかった。スチュワーデスも激しく感情を出し言い合っていた。ああ～中国なんだなあ～ということが少し感じられ、帰国する頃になってこの時の印象は強くなっていた。

今夜は、三星の錦江賓館に宿泊。

9月11日～12日 成都滞在

10:00から倉庫にて装備類の梱包整理を行った。自分達が梱包した荷物がどのような状態になっているか不安であった。プラパールが雨で濡れていたり、つぶれていたりしていたが中味はだいじょうぶであった。全員忙しく汗とホコりにまみれて動きまわった。

昼食は、麻婆豆腐発祥の店へ行き、辛い料理とカエルのフライを堪能した。居川は、カエルと知らずにかみついた瞬間、隊長に「それは、カエルだぞ」と言われ、渋面黙してカエルが皿にもどっていた。素早い反応に全隊員が笑ってしまった。

食事でカルチャーショックを受けてしまった事があった。それは、食べかすをテーブルの上に吐き出し山のように積んでいたり、床になんでもかんでも捨てたり、女性がペー、ペーと吐き出しているのである。（帰る頃には、私も同じ事を無意識にしていた。）又、料理の皿の上に次の皿を次から次に重ねて置いていくことであった。

17:00に梱包が終了し、夕食後、隊長の部屋にて四川省登山協会スタッフ3名（四川省登山協会の高敏氏、通訳の四川大学出版社陶氏、管理員の陣氏）と全隊員が集合し、自己紹介と今後の展開について交渉が持たれた。そこで、隊長の交渉している姿は輝いて見えた。

今日も倉庫へ行き梱包と食料の買い出し（林、

松田、川上)をして、トラックに全荷物を積み明日からのベースキャンプに向けての準備が終了した。午後は、フリータイムとなり各隊員成都の町を散歩したり、絵ハガキを買ったりしていた。

テレビで見たように、大通りは川の流れるように自転車が走っていた。そして、自転車に様々な大きな荷物を上手に積んで走っていた。自動車は庶民にはまだまだ手の届かない様子であった。

通りを歩いていて気がついた事は、タバコ屋がいたる所にあることであった。ベースキャンプ以外どこへ行っても、目に入ってきた。

午後6:00より、四川省登山協会主席の趙國英氏に夕食を招待していただき、何回もアルコール度52%の強い酒でカンベイし、胃が焼けるようであった。

今晚は、ほとんどの隊員が夜中の1時~2時頃まで絵ハガキ書きに専念していた。いよいよ明日は、ベースキャンプに向けて出発だ。

9月13日 成都→磨西

7:20、2台のジープと1台のマイクロバスとトラックにて朝霧の中を出発した。延々と並木道が続く道路をひたすら走り続けた。道路の横は、どこまでも続く広い田畑で、朝早くから農民が働いていた。道端には自転車の数が多いだけあって、いたる所にタイヤのゴムチューブを木の枝にぶらさげ、修理道具を地面に広げていた。また、自動車の故障車が多く、いたる所で修理している光景が見られた。

午後になって、二郎山峠(約3,000m)越えとなる。激しい振動と、崖淵を猛スピードで運転する運転手の為に、身も心もボロボロ。中でも1台はダントツで、その車に不幸にも乗り合わせた4名の隊員は、絶対帰りはあのスピード狂の運転する車には乗らないぞと、磨西に着いてから、2ヶ月後の帰りにも固い決意を述べていた。

疲れきった状態で、もうすぐ磨西に着きベッドで横になれるかと思った矢先、木材を積んだトラックが路肩から落ち、3時間余り通行止めとなってしまう。融通がきけば簡単に問題は解決するのであったが、責任というとても重大な言葉が彼等の脳裏をかすめるのみで、目の前の解決方法が

▼3時間の足止めの元凶(磨西手前)



見えてこないようであった。隊長が現場に行き、具体的解決方法を示したが受け入れてもらえなかった。結局、3時間近くたって自動車が通れた方法は、隊長が示した方法であった。

暗闇の中、22:00に磨西の氷川旅館に到着した。23:00夕食。23:45トラックから荷物を全部おろす。

宿泊したこの宿に、鍵女という美少女がいて、ベースキャンプではよくこの鍵女と居川の話が話題の種にされた。遠征の帰りに居川はすっかり鍵女と2枚も写真を撮っていたのである。

9月14日 磨西→第三营地

9時過ぎからポーターが集まり、荷物が重いとかなにやら登山協会の人と交渉していた。1時間程かかり荷が決まると各自出発していた。彼等は、細ひも一本で大ブラパールを軽々と背中にかつぎ歩いていた。天気も良く道も途中までは自動車が通れる程の広さで整備されており、ハイキング気分でのんびりと歩いた。道路整備にかなり力を入れている様子である。あちこちで働いている労働者(老若男女)を見かけた。道路工事区間では、1時間の待機があり足止めされてしまった。

ハイローコー氷河から流れてくる川に沿って樹林帯を登って行く。風景が日本に似ているせいか、中国に来た意識が歩く程に薄れていくのを感じた。第一営地に15:10着。昼食を済ませ、16:20出発。途中何回となく観光客とすれ違い、ここハイローコー氷河の人気の程を知る事ができた。ここ第一、第二営地には温泉があり、遠征の帰りには入っていかうと、中川が詳しく状況調査をしていた。

今日一日樹林帯の中を歩き、第三営地に着いた

のが20時過ぎであった。夕食後、隊長の部屋にて連絡官と話し合いがあり、ポーターが荷物を上げてくれる場所の決定を行った。ポーターは、「黒松平」までと言っているので、ベースキャンプまで行くよう、先行隊員（伊藤、中川、居川、林、河内）が早朝に出発して、ベースキャンプ地を決定し、そこまで誘導することとなった。日が沈むとやはり2,940 mは寒く、早々に私はベッドに入って眠ってしまった。

9月15日 第三营地→BC

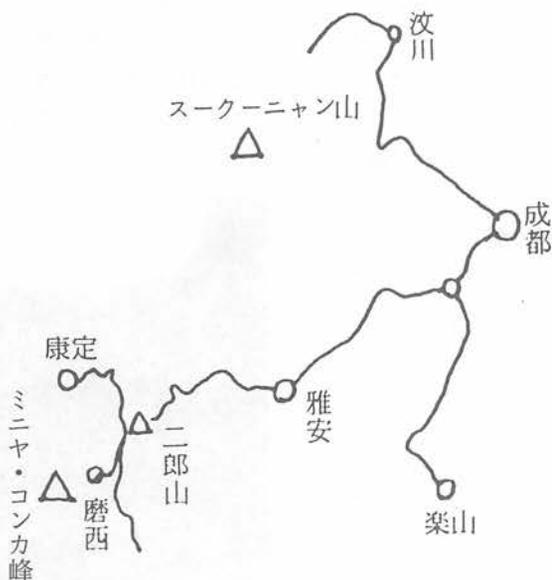
8時朝食だとのことで急いで食堂へ行くと、連絡官が「今日から冬時間になるので時計を1時間遅らせて下さい」との指示があった。当然食事も1時間後となってしまった。ポーターは、早朝に出発しているらしく、先行隊員も急いで後を追った。氷河に出るまでは昨日と同様に道が整備されていた。氷河上には、ポールが立ててあったり、ゴミが多くて観光客が多い事が分かった。

先行隊員が3,500 mを目標にベースキャンプ地

▼ハイローコー氷河を荷上するポーター



を探したが、適地がなく3,400mがベースキャンプ地となった。キャンプ地は、大小の岩を整備し3段からなった。一段が炊事用、二段が食堂用、三段が居住用となり、少し上部に水場、その下流にトイレが整備された。18時過ぎに中国側3人を迎えベースキャンプ開きを行った。H A J事務所ではあまり歌も出なかったが、この日ばかりは全員が大きな声を張り上げ、夜遅くまで大盛況でつぶれる者も出た。
(記：森谷 雅春)



ミニヤ・コンカ位置図

イグアナ・ルートを発見

— C1への登路を求めて —

9月17日 晴→ガス

6時に起きると、昨日の昼からの雨は上がっていた。6時30分頃からコンカ山の全容を見ることが出来た。

今日はルート偵察日。朝食後、山森隊長をBCに残し、全員でルート偵察に向う（8時出発）。BCより山に向かって氷河を25分ほど歩いた左岸寄りの木のケルンの有る氷の丘に着く（B隊がコース整備の時に倒木を立ててくれた所）。ここでは2隊に分れてルート偵察に入ることにする。A隊（伊藤、松田、中川、居川、林）は、BCから見た左岸尾根のコルの所を目指して行動に移る。B隊（森谷、河内、千葉、高見、川上）は、氷河左岸沿いにアイスフォールに向かってルートを見つける様に移動する。松館は、木のケルンに残り、A、B隊の連絡を待ちBCの隊長とトランシーバーで連絡を取ることにする。

B隊は木のケルンの所から氷河の左岸沿いに進んで見たが、ルートに取れそうな所は見つけれず左岸沿いから離れ氷河側に入って左岸を見たところ、上部にイグアナルートらしきものを見つけ基部に近づき岩壁にボルトが打って有るのを確認したと河内から報告を受ける。丁度BCとの定時交信時だったので、其の旨隊長に報告する。隊長から市川ルートに転進する様に指示を受け、A隊に連絡、B隊の待つアイスフォール手前左岸基部へ全員移動する。（A隊はBCから双眼鏡で見た限りでは、左岸尾根のコルの所より尾根に抜けて、アイスフォール左岸上部に出れるかもしれないと目をつけていた木のケルンから右側のルンゼに入り、コルの下の凹角状の岩壁に、固定ロープセット用のボルト2本と、他にハーケン1本ボルト1本を打ち1ピッチ延ばしていたところだった）。

氷河左岸沿いの道も、氷の上に岩が「ゴロゴロ」して歩きにくい道だ。岩壁基部に全員揃う。目の前20m位の岩にボルトが1本打ちこまれているの

が見える。全員でルート工作に就いても時間的に無駄なので、A、B隊に分れて、A隊はルート工作、B隊は基部からBCまでの道を整備しながらBCに帰ることにする。

A隊は、正面岩壁の市川隊のボルトまで登り、そこから左側の岩棚を左上し、ハング部を乗り越し草付部に出、左側岩壁のスイス隊のボルト、中川の打ったボルトの2本にロープをセットした。（市川隊は、ボルトから右側の壁を巻いてイグアナルートに入っている。）中川の打ったボルトから1m位右側のクラックにコの字ハーケンのごつのが1本打ってあった。（後日川上が回収した。）

そこから草付きを右上りに15m登ると市川隊のイグアナルートに合流する。手前の岩にボルトを1本セット、そこからイグアナルート（小石まじりの上り道）を20m位登りきった所の、数本の灌木にロープを固定する。ロープを2ピッチセットして、今日のルート偵察は終りにする。ここから上部へは踏み跡が延びているのを確認して、アップザイルで下降し、B隊の整備してくれた道を全員BCに帰った。（記：松館 正義）



▲イグアナ（下部岩壁帯）を登る

楽園へのルート偵察

— 高所順応を兼ねて —

9月18日 晴後キリション

この2日間は夜に雪が降り、朝には晴れるという天候パターンだ。この辺の地形がそうさせるのか？我々の行動が軌道に乗るまでこのパターンが続いてくれると助かるのだが。

本日は隊長と副隊長、装備チーフの中川、食糧チーフの林の4人はBCに残り、今後の荷上げに備えて荷物の整理をし、他の8人は昨日フィックスしたルートに若干の修正をし、ルート工作と高所順応を兼ねた行動をする予定である。

個装とフィックスロープだけなのでハイキング気分で出発。岩壁基部までの氷河も、昨日のケルンに導かれて難なく通過する。岩壁の基部で登攀の準備をしながらルートを目で追うのは楽しい。テラスにジッヘルポイントと思われるピンが打ってある。そのほぼ真横に同じく古いピンとハーケンが確認できる。以前は氷河の高さがあの辺まであったという事だろうか？抜け口が凹角で悪いが全体としては三級程度だろうか。

昨日フィックスしたルートに居川がトップで取付く。取付きから直上の方がユマーリングが楽ではないか、という判断で途中のテラスのビレーをはずしてルートを左側に取りしたが、カブリ気味で悪そうだ。結局セカンドからは昨日の固定通りに攀る。2P目のビレーはブッシュを支点にしているので他のブッシュから補強する。

ここから先は我々にとって未知のルートだが、草付きには明瞭な踏跡がついている。すぐ下は絶壁になっており、アイスフォールが間近だ。こんな所でコケたら大変だ。氷河までストーンだ。

明瞭だった踏跡もガレ場になると消えてしまった。先がわからないのでこのガレ場の真上はうんざりするほど長く感ずる。赤茶けた大岩ができてガレ場は終了したが、頭上は今にも崩れてきそるなもろそうな岩壁帯である。この壁の下のガレ

たバンドに1P、大事をとってその上にも1Pロープを固定する。適当な支点がなくトップの居川は大岩にメインザイルで直接ビレーをとる。急な草付きを登り、石楠花の尾根を越えると水量の少ない沢である。正面に大滝が望まれ興味をそそる。これが市川隊のいう一ノ沢だろうか？沢を横断してブッシュまじりの岩場を登ると再び石楠花の尾根となり沢である。明瞭な踏跡があり細いバンドをトラバースして右岸に渡る。これが二ノ沢だろう。沢から這い上がる取付きを探しながら登るが絶壁が続く。必ずルンゼが落ちているはずだ、と思いながらつめていくと案の定いい取付点が見つかる。草付きの凹角で易しそうだが、荷上げを考えてロープを固定することにする。実際取付くと意外と悪く固定は正解であった。抜けた所のブッシュには伐り開いたと思われるナタ目がある。踏跡をたどると明るく開けた草原に出た。思わず喊声を上げる。ガスがかかって視界の効かないのが残念だが、これでブッシュから開放される。それにしてもこんな所で沢歩きをするとは……。

高度のせいだろうか？この草原の登りは非常に苦しい。丁度4,200mの高度の尾根に大岩があり、絶好のビバークサイトだ。時計も1時。時間も高度も予定通りだ。大岩の上は整地され天幕の設営跡があり、使用済みのローソクが落ちていた。市川隊の使用したものだだろうか？松田氏の著書を思い出して胸がしめつけられるものがあった。天気も霧雨となってきて下りを急ぐ。河内と居川が先行して二ノ沢のトラバースに1Pロープを固定する。

下部岩壁帯のロープに対する不安が隊員の間からきかれ、BCとの交信で帰りに張り替えるよう指示されていたのだが天候悪化を理由にそのまま使用する。このロープは遂に最後まで取り替えられる事はなかったが、この日に感じた不安は何だ

ったろうか？岩場では11ミリ、あるいは9ミリのWという固定観念にとらわれていたせいだろうか？良い意味の慣れか？悪い意味の慣れか？

BCでは荷物の整理も大分早く終わっていた様子で我々の帰りを待っていた。

夕食後のミーティングで隊長より、チーム編成の発表と今後の行動計画について発表があった。

Aチーム L. 中川、居川、林

Bチーム L. 伊藤、松田、河内、千葉

Cチーム L. 松館、森谷、高見、川上

ポーラーメソッドでこの編成が何を意味するかは皆知っている。重い沈黙がベースを包んだ。

(記：伊藤 清春)

▼大プラパールをC1へ荷上する



イグアナを越えて荷上げ

— C1 荷上げ —

9月19日 朝4時ぐらいまでドシャ降りの雨。

今日は一日中雨かなあと思ったが、明方には止みどころか最悪の天候だけなのがられた様だ。

本日はC1の決定と順応トレーニングで4,700m位の往復の予定である。空荷で快適に登る。昨日のルート工作隊の言う通りイグアナ上部よりずっとトレールがある。十年前のものにしてはあまりにもハッキリし過ぎている。「現地の人がこんな所にまで入ってくるのだろうか？」などと考えながら、大きな沢を2つ越えるとアッという間に4,200mの市川隊の仮C1跡につく。奇麗な草地のテント場で、水場が近くにないというのは欠点だが、晴れるとハイローコー氷河を全望できるすばらしい天望台である。ここで少し休んで更に上へ上へと進んでいく。そのうちに急な草尾根も終わり大きな岩がゴロゴロしている不安定なガラ場につく。

所々にある明らかに人が作ったと思われるケルンに導かれて視界のきかない広いガラ場を進む。

12時、4,580mに到達。予定ではもう少し上なのだが、この辺からはガラ場が平坦で高度がかせげないのと、荷上げを考えるとこれ以上上部へ行くのは無理と判断し、C1を市川隊の仮C1の位置に置くと決め下降する。一日で1,200mの高差の往復、さすがにこの高さではさして問題はなさそ

うである。BC出発(7:10)、市川隊の仮C1着(10:00)、4,580m着(12:00)。BC着(3:30)。

9月20日 初めての荷上げの日。BC着(3:30)イグアナがあるため時間差でA、B、Cパーティーの順番でスタート。Aは大プラパールで荷上げ、最初ということもあり15kgと荷物は軽い。

ところが、このプラパールが曲者で、イグアナでは大きなプラパールがつかえてなかなか越せずにたいへんな苦労をさせられる。

ちなみに、このイグアナは10年前の市川隊では背負って登れずザックの吊り上げをしていたらしいというからそのいやらしさも少しは想像できるだろう。

AパーティーはこのC1への荷上げは1回のみでルート工作のため直ぐにC1に入ってしまう。

このBC-C1間を登山期間の半分近くもの間、荷上げしてくれたCパーティーには本当に頭の下がる思いがする。こうした影の力が無ければ上へと進んでいけない。改ためてCパーティーの皆に感謝。

BC出発(7:50)、C1着(12:15)

C1設営後下山。BC着(3:30)

(記：林 雅樹)

雷鳥の鳴く大ガレを行く

— C 1 荷上げ —

28日・29日の両日C 1へ荷上げ。この2日間はBC入りして以来の最高の天気で、山岳展望をたのしみながらの荷上げとなりました。

快晴のなかひさびさの太陽の下での荷上げで気分は最高。いつもの様にテルモスにお湯をつめ行動食をもち、各自15kgの荷上げ品をもって出発。いつもの様に松館副隊長、森谷さん、高見さんそして川上のCパーティーは、ビスターリ気分で氷河上をあるく。天気がよいのでアイスフォールも上から下まで見わたせる。落差千数百メートルのアイスフォールはやはりスゴイ。

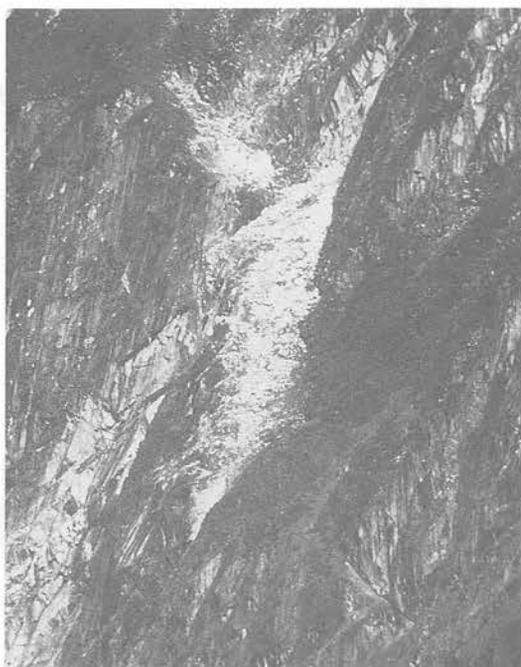
ときどき雷鳴の様な音とともに氷のブロックがくずれて行く。今日はあたたかいせいもあるのかよくくずれる。最初はその音が気にもなったが、今ではほとんど気にならず日常の音となっている。しかし、氷のブロックが落ちて行く様子はいつ見てもスゴイの一言。氷河をあるくこと一時間ちょっとでイグアナ基部。

定時交信、イグアナ基部でハーネスをつけメットをかぶり、身じたくをととのえて1人ずつイグアナをのぼって行く。1人だいたい15分から20分で1Pぬける。ここは階段状の岩でここをぬけると、ボルトとハーケンが打ってある草つきのテラスにでるが、この草つきテラスにでる手前ほんのすこしがスラブ状になっている。いつも岩がぬれている様な感じでのっすのに手間がかかるが、ここはおもいきりよくぬける。

草つきテラスから上にすこし行けば左上バンドにあたる。ここを左上すること10mぐらいで低木のはえている草つきになる。さらにこの急な草つきに1P上にむけて行く。ここから対岸に見えるタイ山は、きれいで快晴ならではのながめである。ここで全員(Cパーティー)がのぼりきるのをまち大ガレにむかって行く。大ガレの中ほどまできたぐらいの時、きまって右の岩と低木のところか

ら大きな雷鳥?の様な、ズングリとした大きな鳥が飛んで行くので、どうも鳥の巣がある様子。あまりの一瞬の出来ごとで、写真機をとり出す間もなく飛んで行ってしまった。

大ガレをのぼりきると左上するバンド(ガレ)にあたる。ここに2Pのフィックスがありここをぬけると一の沢に出る。ガレバンドから一気に一の沢まで行ってここで全員そろったところで昼食。とはいっても行動食で、ここで行動食を全部たべてしまう。ちょうど一の沢右岸が平らに砂のたまった河原になっているのでここがおきまりの大休止場となっている。ここからもタイ山のながめがきれいだ。ここで腹ごしらえをして一の沢右岸をのぼり二の沢左岸にでる。ここからのトラバースに1P。ここは一部せり出した岩のくぼみをとるので、荷物が大きいと岩に荷物がひっかかってバランスをくずすので気をぬかず行く。

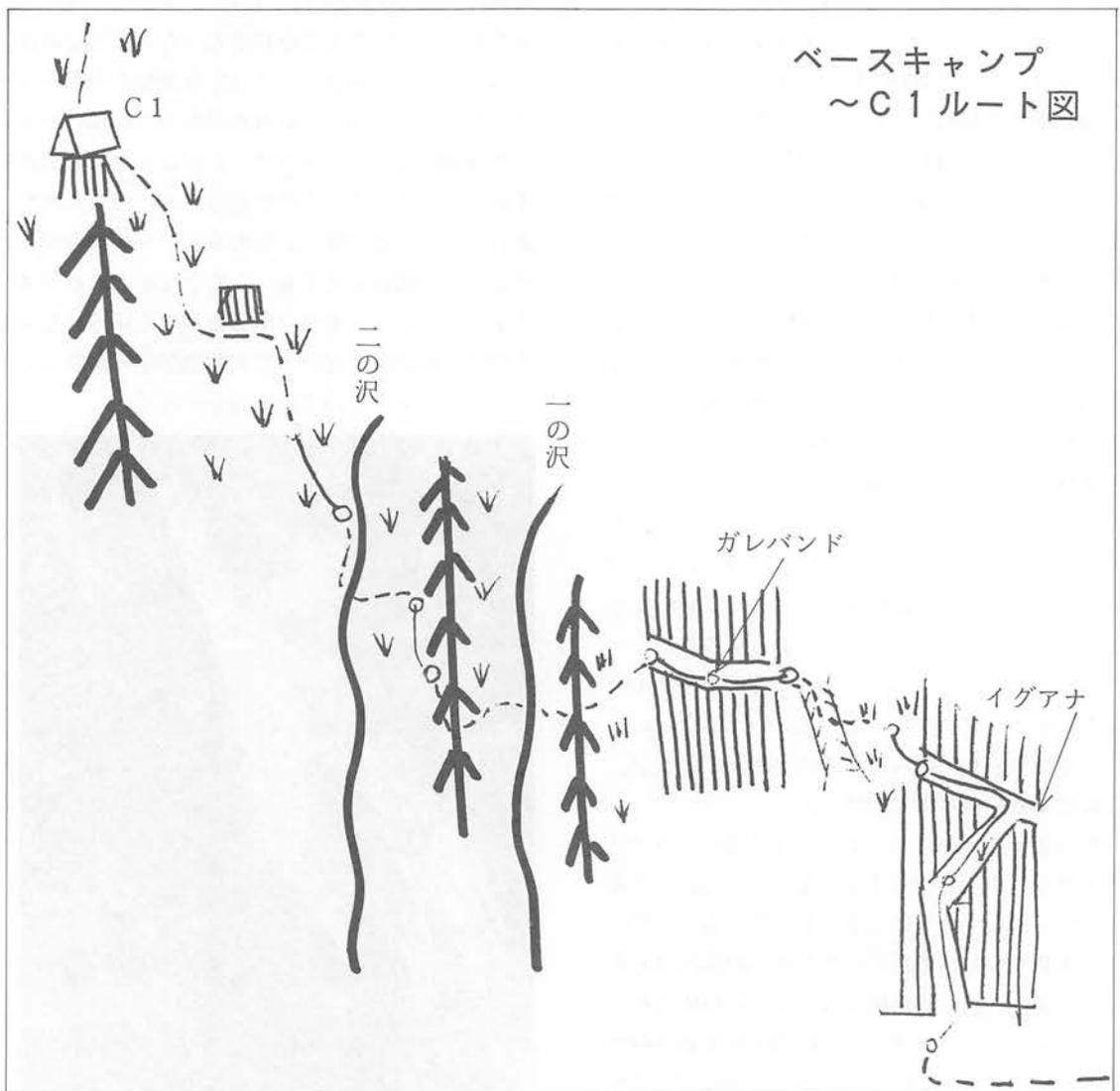


▲ガレバンド(左上)～大ガレ(中)～イグアナ(右)

二の沢をわたって右岸に出る。ここからすこし尾根状になっているところの泥かべを直上すると1Pロープのある所に出る。ここは雨のあと雪のあとなどは泥だらけになる所で、1人ずつぬけるとあとは、はい松の様な低木のしげった所をぬけると草つきの尾根上へ出る。このあたりは、エーデルワイスの咲くのどかな草つき。日本でいうと巻機山の様な所。ここをのぼると尾根上に大きな岩がありこの上がC1になっていて、とてもながめのよい場所である。ミニヤ・コンカのながめがすばらしく、ハイローコー氷河もよく見える。しばし休けい、ながめをたのしみ氷河上のBCにむけて下山。

C1は氷河上のBCにくらべ土の上。さらにBCの天气がわるくてもC1からは天气がよく、まさに楽園の様な所である。BCまでは約2時間。気をぬかず下りて行く。BCに帰りつくと今日も1日終り、またあしたがんばろうと思う。

(記：川上 豪)



大氷瀑を越えて雪原へ

— C 2 決定と荷上げ —

9月23日 ◎-①-◎-⊗

初の上部キャンプでの宿泊も不調を訴える者はなく、C 2の確定を目指して元気にテントを出る。C 1から草を低木に覆われた尾根を登って行くと、やがて巨岩の重なるガレ場に吸収される。しばらく巨岩をぬうように進んでから左に折れ、上部に氷河のあるガレ沢をトラバース、サイドモレーンのガレ尾根を登る。我々が「オッパイ山」と呼んだ場所からハイローコー氷河に降り立つ。ここまで広いガレ場の連続で、ガスに巻かれた時の事を考えて、赤布やケルンをこま目に立ててゆく。氷河に降りるとコンカが眼前にせまってくる。左岸のモレーンカバーされた氷河を進む。しばらく行くと市川隊のC 1跡、中国調査隊のキャンプ跡に出会う。各々残されたゴミを見ればどのものかわかってしまう。さらに進み左岸側より流水のある場所を見つけ、そこをC 2とする。標高5,000 m。C 1との標高差はあまりないが、水平距離、アッ

プダウンを考えると、なかなかのアルバイトだ。

9月24日 ⊗-◎-⊗

朝、テントを開けると雪が積っていた。今日は各自15kgの荷上げである。ガレ場はただでさえ歩きにくいので、この雪でなおさらである。ケルンも悪天の中では見分けにくく苦労する。積雪は10 cm程である。荷上げを終え、何度も尻もちを着きながらC 1へ戻る。B隊C 1入り。C 1は水の確保に苦労したが、この雪でとりあえず解決。

9月25日 ⊗

A・B隊でC 2への荷上げとなる。積雪も前日より増えて歩きやすくなった。荷上げというものはそんなに楽しいものではない、増してや悪天の中、草付きに滑り、岩と岩の間に足をとられながらとなれば何をか言わんや。靴、スパッツの傷みが激しい。高度にも慣れて来たA隊はC 2に早く到着。A隊はそのまま休養の為BCへ下降する。BCは雨。
(記：中川 裕)

長いガレ場の途上にオッパイ山はあった

— C 2 荷上げ —

9月26日 (B隊)

5時30分、コンカのキャンプの中で一番快適なC 1の大岩側のテントで起床。昨日から降り続けている雪がいっこうにやまない。積雪10cm、風は不思議なほど吹かない。2・3日前までエーデルワイスの咲きみだれる楽園がやっと初冬の山のようになりヒマラヤに來ている実感がわいてくる。

8時10分、朝食をすませC 2への荷上げに出発。ザックは15kg、積もりそうもないくらい弱々しい降り方の雪の中をもくもくと登る。時々、雪が降

っているのに薄日がさす。たぶんコンカ山のまわりだけ薄い雲におおわれているのだろう。

15時00分、膝までのラッセルに苦しみながらもやっとC 2に到着。正面にあるはずのコンカはガスの中で見えない。恐ろしいくらい静かなC 2からすぐに下山する。

18時30分、どうにかC 1に到着。本日の予定はBCまで下山だが、時間も遅くかなり疲れているのでC 1に泊ることにする。積雪のあるC 1、C 2間の荷上げは、高所順応が出来ていない私には

少々きびしい。

9月27日 (B隊)

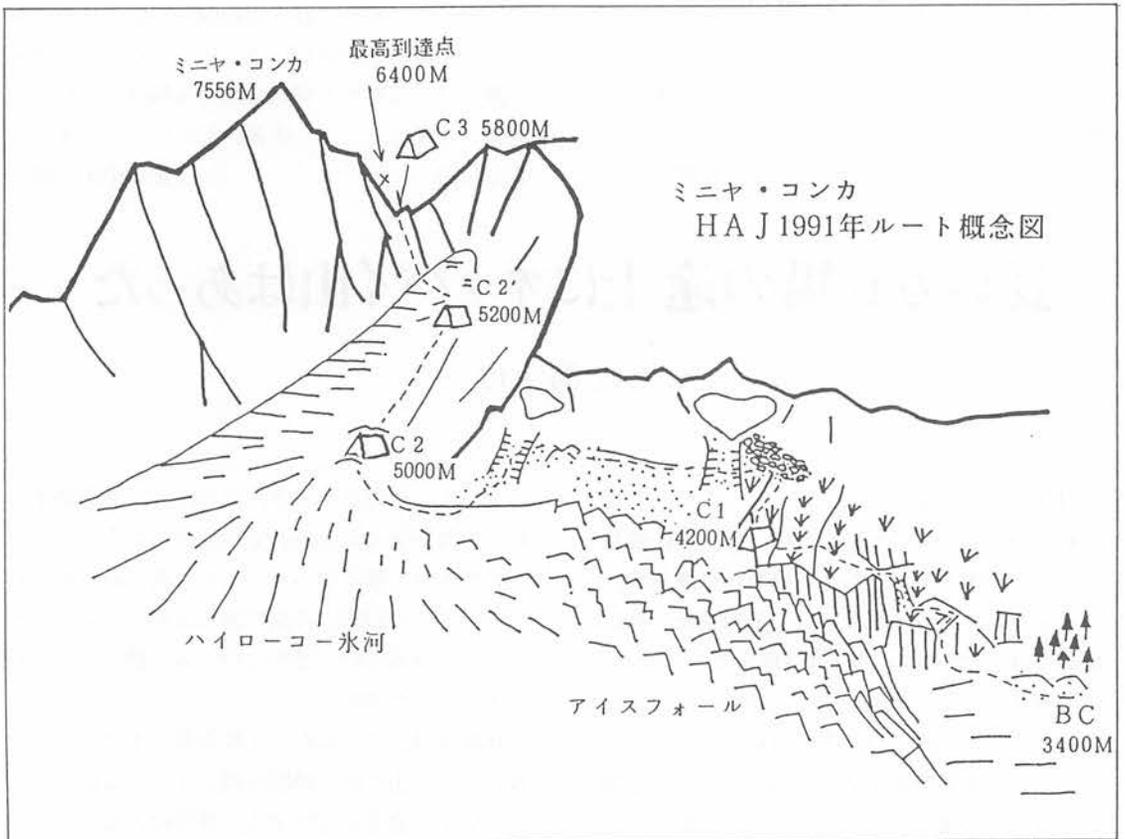
6時00分、起床。今日は休養日だけどBCまで下山してから休養になる。昨夜は月も見え天候もよくなってきているような気もするが、コンカは依然として雲の中である。その寒々とした雲を見ていると、これから先天気がよくなることあるのだろうか心配になる。

9時00分、C1の荷物の整理をしてから下山する。今日、明日休養日だと思うと足どりも軽い。

11時10分、BC着。トランシーバー交信のミスでBCは下山が遅いと心配していたそうだ。ヒマラヤではいいかげんなことはゆるされない。気をつけなければならないと思う。午後から休養。

(記: 松田 靖彦)

▼ハイローコー氷河の雲海 (右は滝の落口)



ヒマラヤン・ブルーに聳えるコンカ

— C 2 荷上げ —

10月2日 晴れ

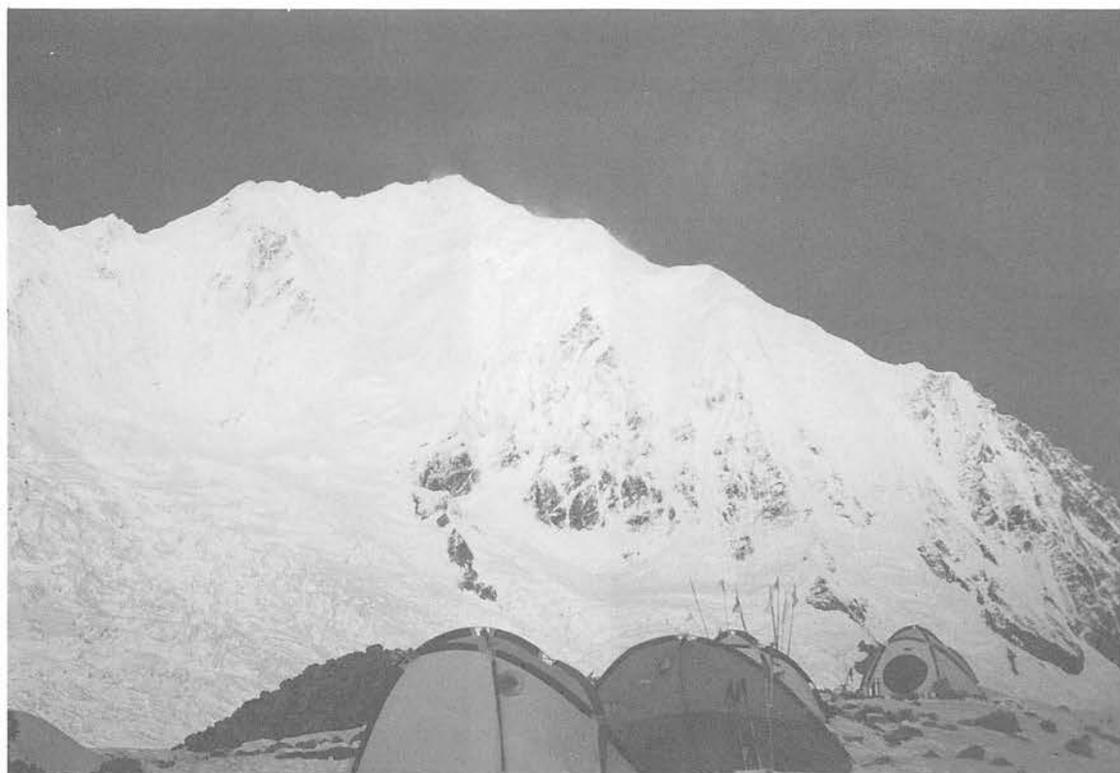
6時起床。辺りはまだ薄暗く月と星がこうこうと輝いている。昨日、エーデルワイスが咲き乱れるアルプスの牧場をほうふつとさせるC 1(4,200 m)に来て泊まった。何といてもキャンプ唯一の土が露出した快適なテント場であった。食事を終え、テント内を整理し各人が出発準備を行う。

7時20分C 1へ向けて出発。昨日準備しておいた約15kgの荷を各自がかつぐ。天候はC 2(5,000 m)への荷上げの開始日を歓迎するかのように穏やかで良い天気だ。当初、草付きの斜面を赤旗を目印にゆっくり登っていく。鹿の足跡、ふんが我々のルート上にたくさん残っていた。鹿の領土に我々が踏みこんでいったのだ。1時間ほど登ると

石がゴロゴロした歩きにくいガレ場になる。A B隊が置いていった赤旗、ケルンを目標に黙々と登る。

埼玉県岩と名づけた岩を過ぎ左へトラバースし、上部の氷河をながめつつ広いガレ沢を渡る。時折、上部でガラガラと音を立てて落石が落ちているが、我々のいる所まで届くことはなかった。また、石の間で上部の氷が溶けて水の流れる音がしている箇所があった。

さらにサイドモレーンを登りスカート山を横目に進み、オッパイ山と呼んだこんもりした山に登る途中、A隊と交差した。A隊はBCに下り休養をとるための下山だ。A隊からルート of 雪の状態、天候等の情報を仕入れる。足取り軽やかに下りて



▲C 2 から見るミニヤ・コンカ東面（北東稜のコルは右端）

いくA隊を見送り、オッパイ山を登りきって長い下りをいくとハイローコー氷河が見えてくる。雪とモレーンに覆われた氷河を左岸づたいに進み、11時大休止を取る。

ぶ厚い雪をかぶった南東稜の美しい山々をながめつつ行動食を口にする。やっとヒマラヤらしい風景に巡り会え、各々で写真をハデに取る。その後、空腹感を若干残して歩きはじめる。途中、日本隊のゴミと中国隊のガソリンを発見。10年前のボンカレーの袋が中味が入ったままの状態が残っていたのには驚いた。

12時20分、やっと銀世界のC2（5,000m）に到着。テントにはだれもいない。残っているのはテントとコルへ向うトレースのみであった。B隊はC3へのルート工作へ出発していた。我々は資材テントに持ってきた荷物を入れ、しばらくたそがれてから来た道に戻っていった。

16時20分、C1に帰幕。昨日、私が発見した水場はテントから50m下った所にある。この水くみ作業も仲々きついアルバイトであった。その水で食事の準備をし、太陽の光を浴びながらテントの

外でディナーをとる。あいもかわらずBCは雲海に覆われていた。

C1がBCだったらどんなにいいだろうと思いつつ早い夕暮れは迫る。食事を終え、副隊長は明日の荷分けをして各自はザックに荷物を梱包していく。その後は、茶水を4人ですすりながら19時の交信を聞き明日の指示を待つ。そして就寝。シュラフにもぐり今日一日のルートを頭に思い浮かべてみる。白と青のコントラスト。その中で高く威厳あるコンカを見た。明日も見たいと思いながら眠りにつく。このような生活が3日間続いた。

10月4日、C2への荷上げを終えたら今日からBCで休養だった。BCに降りたくない気持ちが強い。それくらいC1は太陽の光を浴び快適だった。楽園と呼ばれて当然だ。荷上げの3日間、天候に恵まれ不調者もなく予定の荷を無理なく上げることができた。これはB隊が荷上げを頑張ってくれたおかげでC隊の負担が減少したためだと思う。我々はB隊と太陽の光に感謝し、BCへ向かった。（記：高見 清十）



▲C1上の埼玉県岩



▲C2へのガレ場も一雪来ると大変

北東稜の科尔へ始動

— C3ルート工作 —

9月30日 ①

今日からいよいよ北東稜科尔へのルート工作となる。ロープ、ハーケン類など準備に手間取り、出発は8時となってしまふ。今日も上々の天気である。C2付近より、ハイローコー氷河は右岸側半分が、クレバスの交錯した氷河、左岸側半分はモレーンカバーされたクレバスの少ない氷河となり、左岸側が右岸側より10m程高くなっている。

昨日C2建設後に2時間程偵察をした、左岸側のモレーン上を進む。20分程行った所よりクレバスが開いて来る。それからしばらく行くと、雪に覆われてヒドンクレバスとなり、安全の為にアンザイレンする。以後ここより、エイメイルンゼのフィックス開始地点まで、C2'をのぞいて、常にザイルを結んで行動することになる。

偵察時のトレールも1時間程で終り、そこより膝上のラッセルとなる。天気が良いのも考えもので、雪がくさって、重い湿雪のラッセルである。広い雪原なので、ところどころに赤布の付いた竹を立てて行く。雪原を3人で交替しながらラッセルをくり返すが、気持ちばかりあせて、遅々として進まない。登攀具の入ったザックも肩に食い

こんでくる。クレバスが大きく口を開ける手前で、右岸にルートを取る。左岸から右岸へと氷河を10m程下り、クレバスの右手を取付目指して進む。この辺りは雪が深く腰まで潜る場所もある。

科尔に向けてのルートとなりそうなルンゼの取付に着いたのは、14時を回っていた。出来ればこの辺りに荷をデポして下りたい所だが、雪に埋められてしまう可能性があり、不十分な偵察で、科尔に抜けている様に見えるルンゼに2Pロープを張り、岩が出て来た所に荷をデポして下降する。C2着16時50分。

10月1日 ②

昨日の反省から、6時にまだ暗いC2を出る。今日はトレールもあり、ほど良くしまった雪原を快調に進んで、3時間でフィックスの開始地点に着く。途中、双眼鏡でルートをよく観察する。と、昨日ロープを張ったルンゼが、科尔に直接抜けていない様に見える。1つ上流のルンゼの上部と重なって、科尔へ抜けている様に見えるのだ。上流のルンゼを偵察し、こちらの方が良いと判明。ルートを変便する。

前日張ったロープをデポの回収を行なうが、こ



◀ 上部雪原から北東科尔を見る (右下C2)

れに思わぬ時間を取られてしまう。気持ちを引きしめて新たにロープを張る。ルンゼ下部は上部からの雪が大きく堆積しており、それを雪崩が、U字形の溝をいくつもえぐっている。左手から2番目の溝に取りつく。50M 2 Pで市川隊の残置ロープ・ハーケンを見つけ、これが市川隊のルートのエイメルンゼであることがわかる。そこよりU字溝を離れて左手雪壁にルートを延ばす。傾斜45°前後で、東に面している為に、雪が腐って重い湿雪のラッセルとなる。スノーバーだけでは心もとないが、露岩もあるので、ハーケンと織り混ぜて支点とする。6 P 延ばしたところで時間となり、荷をデポして下降する。C 2 着16時45分。B隊がC 2 入りする。 (記：中川 裕)

▼C 2 でルートを追い越す



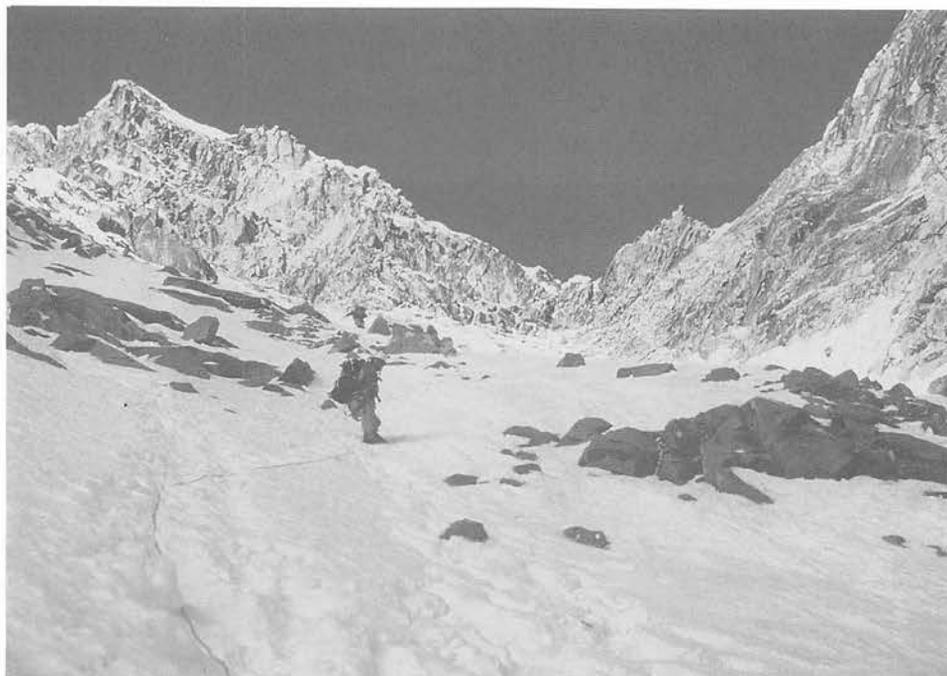
希望のコルに王手

— C 3 ルート工作 —

10月2日

朝3時に起床、快晴。ヘッドランプをつけて5時40分にC 2 出発。クラストした雪上を快調に進

み2時間半程で基部に到着。6ピッチは工作ずみなので、今日は8~9ピッチ伸ばせばコルへ達するだろうという見込みで登りはじめる。



◀エイメルンゼの登攀

雪の状態も良く1時間ほどで昨日の終了点に到着。河内、千葉、伊藤リーダーの順で工作をはじめ。上部を見ると右寄りに登る感じがするがここからはよくわからない。3ピッチ工作すると右手上部に大岩が見える。その岩の裏に一休みできそうな場所がありそうなので、伊藤リーダーと相談し岩の右に向かって進む。11ピッチ目に岩の右に出るが、休める場所などない。固定にはロックハーケンを節約するように心懸けるが、これからのことを考えると岩にとりたくなる。

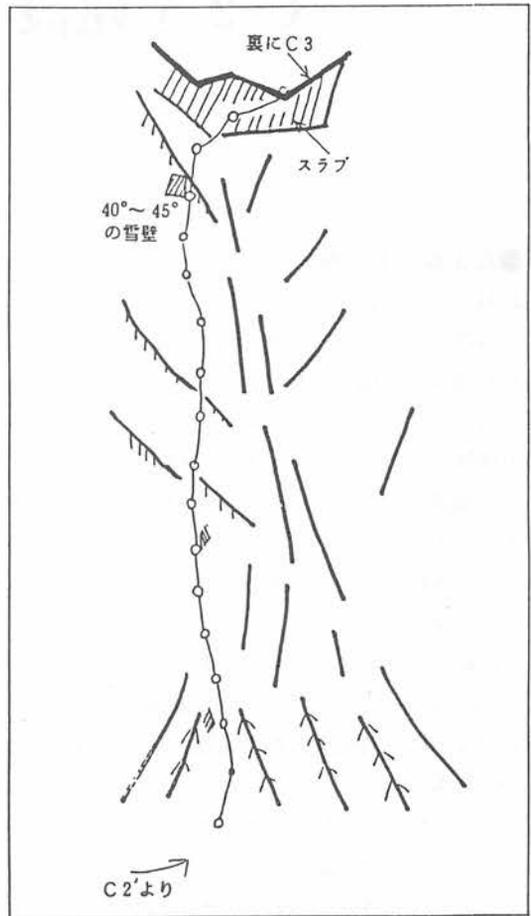
ここで伊藤リーダーの到着を待って、トップの交替を申し出るが、そのままいく。この位置でルートが左にきていることを確認する。雪も不安定で傾斜もきつくなってきた。ヒザまでのラッセルをしながら右上。30mほど上がった時、流れるかもしれないと思う。ピッケルとバイルを杖にして登るが、なかなか上へいかない。10m程前にビレイポイントになりそうな岩がでていたので、そこを目ざす。

岩にたどりつき、リスを探していると、鈍い音とともに、30cm厚で雪面がきれた。一息ついてから右へ2ピッチトラバースする。雪面が安定していないのでいやな所である。13ピッチ目で市川隊のハーケンをみつけるが、かなり高い所に打っている。セカンドが伊藤リーダーに代わり、右へ寄りながら登る。無風快晴で工作はしやすいが、時間が気になる。14ピッチを伸ばしたところで、伊藤リーダーが市川隊のロープが上部に見えるというが、自分には見えない。コル直下岩の露出したところにぶらさがっているという。そちらに向かってさらにロープを伸ばしている途中、ピナとロープを見つける。完全に市川隊のルートと合流したようだ。コル直下の岩の所までいってみるとやっと色あせたシュリングが確認できた。

ひっぱると簡単に抜ける。それにしてもずいぶん高い位置にある。雪のつきかたが九年前とかなり違うようだ。高度計を見ると5,800m。コルまであと1ないし2ピッチというところだろう。時間いっぱいということで下山にかかる。

(記：河内 正樹)

▼エイメイ・ルンゼルート図



▲エイメイルンゼの取付付近

C 2 を建設し希望の科尔へ

— C 3 ルート工作 —

● C 3 ルート工作

10月6日

今日はエイメルンゼの残り1ピッチを抜け科尔に到達し、同時にわずかの荷上げを行なう予定で出発。しかし、昨夜からの雪でホワイトアウトの状態だ。C 2 からルンゼの取付までは広い雪原で、標識が少ないためルートが判かりにくい。膝下から太ももにかけてのラッセルもあり、C 2 へルンゼ取付までに5時間ものアルバイトを強いられる。全くいやになる。

11時、ルンゼに取付くがこれもフィックスを掘り出しながらの登高で、トップが最初の2ピッチを登るのに1時間半もかかるほどに雪が深くラッセルに苦しむ。

結局、13ピッチ目で時間切れとなり、荷上げ品をフィックスに固定して下る。

C 2 にはもう陽が暮れかけた6時半を過ぎて到

着。朝6時に出発したので、12時間以上のアルバイトであった。C 2 に戻ると休養を終えたBパーティーがC 2 に入っていて温かい茶を出してくれた。仲間の温かい思いやりに感謝。

テントに入って一息ついた後、協議した結果、今ある13ピッチのフィックスの内、荷上げの上で問題があると思われるピッチがあり、それを直す事に決定する。

10年前の市川隊はこのルンゼの取付付近にキャンプを1つ出している。私達の計画では彼らよりキャンプを1つ減らして5つのキャンプで頂上へ挑むものであったが、さすがに今日のようなラッセルの事を考えると取付にキャンプがほしい、と実感される。この状況ではC 2 - C 3 間の連絡が維持できなくなる事が予想されるからである。

C 2 出発 (6 : 00)、ルンゼ取付 (11 : 00)

13ピッチ到着 (15 : 00) C 2 帰幕 (18 : 40)



◀エイメルンゼ上部の登攀
(前に一人・下に二人)

10月7日

昨日の教訓から今日は荷上げを少なくして、とにかくまずコルへのルートの完成を目先す。睡眠不足での早朝出発はつらい。

BパーティーはAパーティーがコルへ抜ける予定で荷上げが後続することになっている。

林、居川が先行し、なんとか最終ピッチに到着。Bパーティーよりやさしい岩場と説明されていたコルへの抜け口へ向け、林リードで取付くが、これがなかなかの曲者で、最後の10mが逆層のスラブで悪い。全く予想外の困難に少しとまどってしまう。頭上3mの岩には市川隊のものと思われる残置ハーケンとシュリングがあるが、今の雪の状況ではとてもそこまで行けない。

結局、1時間かかっても抜けられず、無念の下降となる。蓄積疲労のためか全く押しがきかない。

またしても皆の期待に答えられず、情けない気持ちで一杯。Bパーティーの皆はそれぞれの到達点にデポして下っていく。C2へ戻ったのは、またしても夕暮れ時となる。

C2 (6:00出発)、ルンゼ取付 (9:30)

フィックス未端着 (14:30)、下降開始 (15:30)

C2 帰幕 (18:40)

● C2'の建設からコルへ

10月8日

本日、A・Bパーティー共に休養日。ルートが完成していればBパーティーが荷上げのはずなのだが、ここでタクティクスが停滞してしまった。一日のんびり過ごしながら、いかにしてこの先、ルンゼ攻略、その上部へのタクティクスと色々と検討する。結局、ルンゼの取付近くにC2'を作ることになる。

10月9日

今日はC2'を作るためA・B両パーティーでC2'の装備と個装を全て荷上げする。炎天直下の荷上げはたいへんで、距離はわずかだが、荷が重いためなかなかのアルバイトとなる。

C2'はルンゼまで、約40分ほどのクレバス帯の間の雪原に設けられた。

C2 出発 (12:00) C2' 着 (14:15)

午前中、装備・食糧のチェック、整理

▼コルへの最後の岩場



10月10日

今日こそはコルへと思い出発。今日は昨日の隊長の指示で、林、居川でコルへのルート工作、中川、伊藤、河内、千葉でルンゼのルート修正と変則的なパーティーで行動する。

さすがに早く、10時前には最終ピッチに着く。そして、再び林リードで取付く。岩壁部は全く雪をつけていない。スラブの中のほんのわずかにアイゼンのかかる所に全神経を集中して、なんとかこの10mをクリアー。

コルの向う側は広い雪原、無風快晴。眼下には燕子溝氷河が見え、氷河を隔てたかなたには多くの6,000m峰が見渡せる。やっとコルに立てた。

この部分を他の人にゆずらなくて本当によかったと充実した気分一杯である。フィックスを固定し、最終ピッチのデポを回収しコルへ上げて下る。

ルートの修正も無事終わり、随分登高しやすいものになった。これでようやくC3 (5,800m)への目処がついた訳である。

この先、このルート上の核心部といわれるC4までの岩稜帯はあるとは言えるものの、苦戦したC3へのルートの完成は本当に久しぶりの明るい話題となった。

C2' 出発 (5:10) 16P 目終了点着 (9:50)

登攀開始 (10:15)、コルへ抜ける (10:50)

下降開始 (13:30) C2' 帰幕 (15:00)

しかし、全く皮肉な事にこの日を境に、コルでは強風が吹き始め、行動に大きな影響を与えることになったのである。 (記: 林 雅樹)

登山は佳境へ入った

— C3への荷上げ —

●旧ルートの撤収

10月11日 終日快晴

今日はA隊はルート上のデポ品をコルに荷上げ、B隊の伊藤・河内は旧ルートの撤去、松田と千葉はC2への逆ポッカ、C隊はC2よりC2'への荷上げである。

伊藤と河内は5時半にライトをつけて出発する。空には一面の星がまたたいている。クラストした雪面にアイゼンが小気味いいが、すぐ苦しい登りになる。取付きでアンザイレンを解いて登攀の準備をしていると流れ星。“コンカの山頂に立たせてくれ”と3度も祈った。随分と長い流れ星であった。河内はキジをうっていて気づかなかっただけだ。

雪面がクラストしているのでフロントポイントでぐいぐい高度がかせげる。2Pを登る頃より東の空が赤くなりライトを消す。河内はこの朝日の昇る様子をカメラに撮っているらしくなかなか上がってこない。7時の交信は7P地点で行なった。大分速いペースだ。8PよりB隊の開いたルートに別れる。河内が上がってくるとすぐ後にA隊が上がってきた。彼はA隊をカメラに撮りながら上がってくる。8Pからは伊藤はそのままユマールで登り河内を確保し、河内はシュリングとハーケンを回収して、カメラを撮りながら上がる。

A隊は途中のデポ品を回収しながら登っていくが、ザックが大きく脹らんでいく。デポ品はルート上に3ヶ所あるのだが、それらが必ずしも同じ重量でない事をA隊に告げなかったのは伊藤のミスであった。

天気もよく汗ばむくらいだ。河内とのペアもザイル操作がスムーズで非常に楽しい。A隊が何度も通ったせいか旧ルートはしっかり踏み固まり安定している。

A隊の荷物も重そうだが二人のザックも、撤収

したザイルや途中のデポ品でかなりの重量になった。コルへの最終ピッチは高感度がある。ゴボウで強引に登るが荷物の重さが答えた。河内はデポ品を全部回収して上がってきた。すごい馬力だ。

コルは狭くビバークサイトといった感じだが、反対側のすぐ下は予想外の広い雪原だ。ここからはハイローコー氷河もヤンズコー氷河も一望できる。北東稜や北海道隊のルートをじっくり観察したかったが、A隊は既に1時間以上も前に到着して充分ルートを調べたのだろう。せきたてられるように下降する。日差しが強く非常に暑い。雪も腐ってきているが30分ほどで基部に到着する。

C2'にはC隊が到着していた。久し振りの対面であったが荷上げ品の確認をしていて、話をしている余裕がなかった。C隊が帰ると急に寒気がやってきた。

夕刻より松田の調子がおかしい。食事の時も顔が土色で頭痛がするという。風邪だろうか？7時の交信を終え早々とシュラフに入る。

●希望のコルへ荷上

10月12日 終日快晴

今日はA隊はC2'にて休養、B隊はコルへの荷上げ、C隊はC2にて休養。



▲コル上はヒマラヤの青い空だった

本日の行動はB隊だけ。6時頃、隣りの天幕で河内の大声が聞こえた。何事か?と置いていたら千葉が外に出してあった氷についたコッヘルを取ろうとしてピッケルで穴をあけてしまったらしい寝坊してしまいあわててしまったと言う。

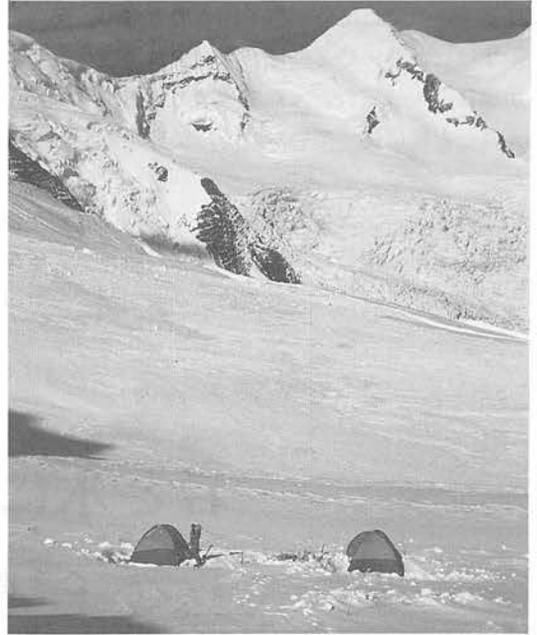
予定では6時半に出発だったが1時間ほど遅れての出発となる。松田の体調が心配であったが大丈夫だという。居川の見送りを受けて出発する。空が白味、朝日がさして今日も天気は良さそうだ。4人でアンザイレンをして基部に向かう。松田も遅れずついてくる。基部より河内、千葉、伊藤、松田の順で登る。荷物が重いせいもあるが今日の河内はあまりピッチが上がらない。千葉も今朝のことが頭にあるのかピッチが遅い。下から見上げているとベフマットを背負ってのユマーリングは、いかにも荷上げらしく格好いい。

カメラを取り出そうとザックをさぐっていると下から松田の声がする。「伊藤さん!ナダレ!ナダレ!」。下を見下ろすと氷河の正面上部より落ちた雪塊が、山腹を雪崩となって落ちてゆき、みりみる大きな雪煙となってC2'に向かって行く。カメラを取り出した時には氷河全体が雪煙で写真の撮りようもない。すぐにトランシーバーを出すと、C2'に居る副隊長も心配してA隊を呼んでいる。しばらく副隊長と状況を話しているとA隊と交信がとれた。C2'は何の被害もなかったという。まずはホッとす。しかし大きな雪煙であった。あれほどの雪煙で被害が全然なかったとは、にわかには信じ難い光景であった。

最終ピッチの岩場で千葉は大分手こずっている。昨日とうって変わりコルでは風がゴウゴウとうなりを上げている。ようやく千葉がコルに抜けた。重荷に苦しみながらコルに立つと、ヤンズコー側からのすさまじい寒気と風が待ち受けていた。ハイローコーとは天国と地獄の差だ。コルで食糧の数量をチェックしようと思っていたが、これでは何もできない。ベフマットや食糧は飛ばされないよう重しをのせる。河内は精力的に動くが、千葉と松田はこの高さに慣れてないせいか動きが緩慢だ。とにかくこんな所で長居は無用だ。すぐ下降を開始する。

登り慣れたせいかこのルンゼも傾斜が感じられ

▼コルからヤンズコー側にあるC3



なくなった。まだ2時少し過ぎというのに、もう陽が陰り雪がクラストしてきた。昨日の下降は雪が腐って嫌らしかったが、今日は快適に下降する。さきほどのコルでの風が嘘のような東面のおだやかさ。空にはカラスが舞っている。基部からは今朝の雪崩でラッセルを覚悟していたが、予想に反してトレールがしっかり残っていた。

●或る日のC2'

10月13日 快晴午後から強風

今日はA隊はC3へ移動。B隊は休養。C隊はC2'に移動。

C2'は昨晚から強風が吹き荒れる。3時頃まで強風が続いた。A隊は6時半に出発の予定であったが7時半に出発していった。

B隊は休養日なのでのんびりしようと思っていたが9時半にC隊が上がってきた。天気がいいのでシュラフを乾かしてみたが風が強く駄目だ。C隊は基部まで往復するといって出かけて行った。

B隊は遅い朝飯を食べる。C隊のために伊藤は隣りの天幕に移る。11時の交信でA隊はコルに着いたという。昨日同様コルは大分寒そうである。C隊もまもなく帰ってきた。

午後から強風が吹き荒れる。2時半頃のんびりお茶を飲んでいるとバリッと音がして天幕が裂け、

る。フレームとフレームの間の張り網の所から裂ける。これでは応急処置も何もできない。河内と千葉はただちにC2に代わりの天幕を取りに行く。伊藤は一人、破れた天幕で彼等の到着を待ったが、天幕ごと風に持っていかれそうで非常に心細かった。

2時間後、二人は天幕を持って戻ってきた。強風の中、C隊全員に手伝ってもらい新たに天幕を設営する。それにしてもこのアクシデントの対処

は素早く、二人の力強さを見せつけられた。

風は夕刻になっても一向に衰える気配もなく、夜通し吹き荒れる。

A隊はヤンズーコー氷河からのすさまじい吹き上げを受けながら、コルより50m程下った雪原にブロックを積んでC3を設営した。

(記：伊藤 清春)

岩と氷に別れを告げて

— C3荷上げと下山 —

●C3荷上げ

10月14日 C3荷上げ くもり(強風)

C隊は、今日から本格的にアイゼンを使う世界に入ることになる。隊の編成変えて松田君が加わり5名になる。川上君が昨日の昼頃より下痢気味なので、今日は留守番をしてもらう。昨夜は風が強く、森谷、高見、川上の入っていたエスバースNo.16のテントは、朝起きたらポールが2本折られて潰れていた。又、私と松田の入っていたエスバースの2人用テントでは、夜中の突風で小氷が飛んで来てテントを擦り、内張りと外張りの間に、静電気が起き青い火花を散らしていたほどだった。

遅く出ると雪が悪くなるので早く出るとつもりが、強風の為出発が遅れる。B隊が8時に出たので、我々は30分遅らせて8時30分出発とする。この時間でも雪は腐り始めてきていた。9時30分にエイメルンゼの基部に着く。ここからは、C隊にとっては未知の世界になる。今日からC隊に入った松田君をトップに登り初める。完全にアイゼンとユマールの世界になる。初めの2ピッチまでのU字溝内は、雪も締め快適だったが、その先は雪も腐り出し足が捗らなくなってしまった。

11時の定時交信の時、13ピッチ目を私がラストで登っていった。ルンゼ内は風も無く暖い位。

ユマールとアイゼンでひたすら登るしかない世界、今までの荷上げは、ほとんど水平移動だったが、この垂直の世界はやはり厳しく結構こたえる。最後の、17ピッチ目の岩場のトラバースは結構悪かった。自分としては、17ピッチのユマール登攀は久しぶりでこたえた。17ピッチ目の岩場からの乗越部は、風が強いからと注意はされていたが、乗越してからのヤンズーコー氷河からの風は強く、あわててオーバーヤッケを取り出して着たほどだった。そこからヤンズーコー氷河側へ1ピッチ下った所にC3が張って有り、荷上品をB隊のテントに入れて、紅茶を一杯貰ってすぐ下山に入る。(14時出発)。C3も風が強く、A隊のテントは、昨夜の風でポールが1本折れて1/3位雪に埋り掘り出し中でした。

腐れ雪の足元を気にしながら、17ピッチを下降しルンゼの基部に着いたのは16時頃、それから、C2'までの腐れ雪を疲れて帰り着いたのは、17時を回っていた。川上君に迎えられる。C2'も風が強くテントのアンカー用のスノーバーが抜けて打ち直しをしたとのことでした。BCとの交信では、天気が悪化方向との連絡が入る。C3のA、B隊との交信を交じて、明朝5時の交信で、今後の行動を決めることにして寝ることにする。外はブリザード模様。

10月15日 BCへ下山 くもり(強風)→ガス

昨夜からの強風がまだ続いている。5時の交信で、7時の天気を見て行動を決めることにする。

7時BC、C3、C2'の交信の結果、天気は悪化の方向なので下山して、全隊とも休養することに決定する。C2'の整理をする。テントはマイクロテックス1張りを残し、他の2張りは畳み、ゴミとエスペースの2人用は下げることにする。

9時の交信後C2へ向う。C2手前のモレーンの上からC2の方向を見てもテントが1張りしか見えない。2張り張っていた筈なのに。9時45分C2に着く。やはり1張りしか見えない。それも床を上に向けて引繰り返っている。やはりC2も風が強かった様だ。付近を捜すと、元の場所から50m離れたクレバスの中に落ちていた。幸いテントの口は締っていて中の物は無事で安心する。(高見のパスポートが中のザックに入ってた。)C2'側からの風が強いので、丘の陰に張り直す。その後、EPIのガスボンベ潰しと、ゴミを燃し銀紙と燃え滓をザックに詰め、一服していると、A隊がC3から下ってきて一緒に休憩する。(EPIガスボンベは潰すと「ガサ」が1/5位、レトルト食品の袋の銀紙は1/3位になる。ただし5,000mの高度で、この作業はユマール登攀よりもきつか



った。)

12時C1に向かう。ガレ場の先のスカート岩の下から、C隊得意のバイパスコースを採り、C1に14時30分に着く。休憩して下げる個装を整理しているとB隊も着く。別天地のC1から下の氷河は、あい変わらずガスが被っている。隊長は、今日も御苦労さんなことに、太陽を見れなかったことだろう。

9日ぶりで氷河に下ってきたけど、イグアナ基部から、BCまでの氷河の道はだいぶ変って、2~3ヶ所迂回しながら、17時20分に隊長の出迎を受けてBCに着く。今日は、久しぶりで全隊員がBCに揃う。酒を飲み、サイコロに興じ、各自の夢の世界に入る。(記:松館 正義)



◀ ミニヤ・コンカ東壁から落ちる雪崩

苦闘./頂は遠く

— C4ルート工作 —

●頂を目指して最後の荷上げ

10月14日 ◎

目覚めると、テントが埋められていた。降雪ではなく、ヤンズーコー氷河より吹き上がって来る風に飛ばされた雪が、雪面をカットして設営したテントの山側にたまってしまふのだ。4時から5時までスコップをふるっての除雪となる。谷側に積んだブロックとの間も埋ってしまい、デボしたロープ類を掘り出すのにも苦労する。おかげで出発は8時を過ぎてしまう。

エイマイルンゼを登って来た北東稜コルの反対側、ヤンズーコー氷河源頭は、ハイローコー側とは対称的な広い氷盆を形成している。コルからの北東稜は、やせた岩稜と雪庇のミックスした尾根となっており、相当に手強そうである。しかしそれも、氷盆をしばらくトラバースしてから、側壁を直上する事によって大半をエスケープ出来る。そのまま行けば、81年に北海道隊が登った尾根まで

トラバースが可能である。20分程トラバースした所から、北東稜にあがる事にし、ロープ固定する。空は曇天、風が強い。ベルクシュルンドを越え、雪壁を直上する。雪はザラメ状で安定していない。5P目くらいからは傾斜も強まり氷と岩が出てくる。風も次第に強くなり、時として動くことすら出来なくなる。下から吹き上げてくるので、なおさら行動を制約する。7P延ばした所で、さらに天候も悪化して来たので、今日はここまでとして下降する。今後は、これ以上の疲労をさける為、オーバーワークにならない様に気を付けなければならない。テントに帰っても又除雪。雪の重みでテントのポールも折れていたので応急修理をする。おかげで、テントに入る頃には全員クタクタであった。それでも、稜線から少し下っている分、C3は風が弱い。

19時の交信で、明日の天候次第では、予定を変更して下降も考える事になる。中国側の情報では、



◀C3
から北東稜をのぞむ

悪天が近づいているという。雲の様子からも、その兆がうかがえる。少なくとも、C4は確定したいのだが、B隊もC3入りする。

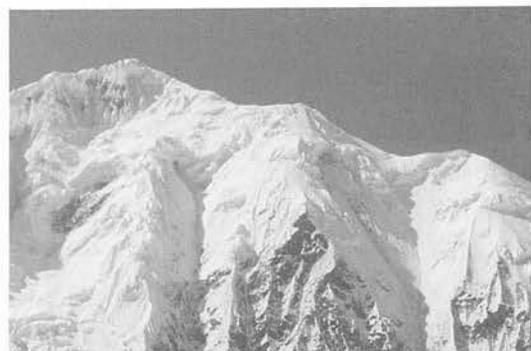
●一担、BCへ下山

10月15日 ◎-◎

5時の交信で、隊長より全隊のBC下降が指示される。風は昨日より若干弱く感じられるが、C3としては明るくなってから判断したいと考え承認される。この強風の中、ルートを延ばしてもあまり延ばせずに、いたずらに体力を消耗するだけに終る可能性大であるが、明るくなってから判断しなかった。しかし、7時の時点でも、天気が好転する気配は見られずに下降と決まる。次回来た時にこの風が止んでいるとは考えにくい。ここはひとまずBCで休養した方が良好だろう。テントをたたみ、荷をツェルトに包んで、雪に埋められない様に注意してデポ、下降する。BCまで標高差2,500m、雲海の中へいっきに駆け下る。

10月16・17日

全員がBCで休養となる。今回の休養は、本来ならC5を確定後にとるべきものの先取りである。したがって、結果はどうあれ、今度降りてくる時は、この登山の終りとなる。隊員は皆おもしろおもしろに過ごす。夜は酒を飲み、博打をする。第3営地に居た中国側スタッフも、新鮮な肉や野菜を持って登って来る。それを使った御馳走に皆大喜びする。ただ残念なことは、ここハイローコー氷河BCには太陽の恵みというものほとんど感じられない。皆、自分(だけ)は品行方正であると考えているのだが。隊長と連絡官は撤収についての打ち合わせをしている。そうした時期がきたんだ。



▲ミニヤ・コンカの頂遠く

▼C3上から予定ルートを見る



●再び頂を目指して

10月18日 ◎-①-⊗

ガスに包まれたBCを後にする。C1を過ぎると時々陽の差す天気となる。本日、A・B・C隊9名がC2入りする。この登山も、いよいよ最終段階を迎えた。あつという間だ。悔いの残らない様に全力を尽す。これしかない。BCを7時に出てC2には14時に着く。夕方より小雪が舞い出す。

10月19日 ⊗-◎-⊗

B隊に少し遅れてA隊も7時にC2を出発する。今日はA・B隊がC3入りする。膝下のラッセルでC2'着、ここからA隊トップで進む。フィックスを掘り出ししながら進むが、なかなかのアルバイトとなる。15時45分、前回より風は幾分弱いコルに着く。デポの半分は1m近く雪に埋っていた。なんとか必要なものを掘り出してテントを張る。前回の教訓から、斜面をあまりけずらず、ブロックも積まない様にする。薄暗くなる頃にテントにもぐり込む。といっても、アイゼンを外しただけの完全装備ではあるが。明日の為に早々にシュラフに入る。

10月20日 ①-⊗

本日はなんとしてもC4を確定するべく、A隊がルート工作、B隊が前日回収出来なかったデポ品を掘り出した後、荷上げとなる。前回のフィックスの終了点よりさらに3P直上して北東稜にあがる。ハイローコー側は切れ落ちており、ヤンズコー側の斜面をトラバース気味にロープを延ば

して行く。支点は全てスノーバーとなる。昨日の疲れが残っているのかペースもいまひとつ。急な雪面をトラバースして行く。C3から見た感じでは、大雪庇の張り出したピークまで行けば、キャンプサイトがあるだろうと思われた。しかし、そこまでは予想以上に長い。今日中にC4を決めなければと、気ばかりあせって、いっこうにピークが近づいて来ない。天候もどんどん悪化して来る。大雪庇のひとつ手前のピークで15時となって、下降を決める。ここまで本日9P、合計16P張った事になる。この頃には風雨模様となっていた。取付きからここまでと、ガスの合間から見える稜線にキャンプサイトを見出す事は出来ず、6,800mピークへの登りは、所々に氷壁が露出した。予想以上に手強いものであることがわかった。Bパーティーも荷をデポして下降する。C3には16時過ぎに到着、又除雪となる。

19時の交信で、上部の状況を伝え、見通しを述べる。明日はA・B隊ともC3でスティとなる。

●登頂を断念

10月21日 ①

昨日よりも風は弱くなる。A・B隊で今後の相談をする。もはや6名アックのタクティクスは放棄せざるをえない。現状はそれ以上に厳しい。1パーティー2名のアタックですら、相当にきびしい。連日風で痛めつけられての行動は、隊員の疲労を深めていた。特に、常にルートの上で立っていたA隊の疲労は激しい。全員の意見を聞き断念と決め、11時、BCに伝える。今日は、昨日に比べ、穏やかな天気となっている。今、こうしているのが歯がゆいばかりだ。自らの力の無さの結果であることに間違いないのだが。午後、BCと撤収についての打ち合せを行なう。夜、シュラフにもぐると、悔しさがこみあげてきた。それをあざ笑うかの様に、夜通し風が吹き荒れる。シュラフカバーを着けたシュラフの中にも、空気が動いているのがわかる。(記：中川 裕)

登頂断念前後

当初計画では、最大登頂者8名を想定した。悪天で第1次アタックが失敗した場合のケースも考慮して、アタックは最大3回を予定した。

しかし、思わぬエイメールンゼの突破に時間がかかり、下部にキャンプを1つ出すことになった。市川隊ではルンゼの取付にキャンプを設けたことは、全員が知っており、ルンゼに直面した時に多分メンバーの胸をこのことはよぎったに違いない。「遠い！」と感じた筈だが、ルンゼそのものの登攀に手こずるとは思ってもいなかったと思う。

しかし、現実には、ルートの変更や固定ロープの張り替えなど、かなりの労力をこのルンゼに費してしまった。コルへ確実に到達しなければ荷上げも不可能であり上部は問題外となる。だがキャンプをルンゼの取付に設けたことで、本命の北東稜が「長く」なったことに気がついただろう。

私は先端の報告をかなりとり入れ、現実と妥協しながら計画を遂行した。北東稜の長さが倍加したように感じていたので、どの段階で最終プランを立てるか、何度も修正を繰り返した。

強風が最大の敵となってきた。全ての面に風の影響が出始めていた。隊員の蓄積疲労は当然あるのだが、それに「強風」の脅威が追い打ちをかけていた。

限られた日数と、ルート開拓と確保に必要な物資が不足していることは、今回の現場が当初考えていたルートの条件でなかったことによるのだが、打つ手は少くとも残されていた。

しかし、アタックの最大の条件が「稜線が長い」ことである以上、トップを引く何名かのメンバーの力量からして、その手を使う訳にはいかなかった。

メンバー間に、チーム分けによる微妙な感情のズレが生じることは日常茶飯事だ。集ってきた「総和」の能力で登山する以上、チーム分けが理想的に行われることは稀れである。

先端のメンバーは苦慮して決断した。ベースキャンプは更にそれ以上の苦悩があることを知っておくことは損ではない。(記：山森 欣一)

極地法の厳しさを知る

— C3 荷上げと荷下し —

●頂を目指して最後の荷上げ

10月20日 C2' ⇨ C3

C隊のメンバーは、10月18日から、松田・高見・森谷の3名となった。

10月20日 今日がC3への最後の荷上げである。18日から雪が降り、19日A隊、B隊はエイメンルンゼで苦しいラッセルを強いられ、かなり時間がかかったようであった。

19日の夕方になると、また雪が降り強風が続いた。C2'は風が強く、B隊のテントが破れたこと、10月14日の朝は、C隊のテントのポールが全部折れてしまい、テントが顔にかぶさり息苦しさが目が覚めてしまった。そして、高見と交替で手でテントを押し上げ、背中で強風に耐えて朝食を作ったことがあった。夜になると、今晚はだいじょうぶかなと皆不安な心境であった。

しかし、楽しみもあった。それは、松田が見た静電気の火花である。強風が硬雪をテントに叩き

つける摩擦によって発生するのかどうか分からないが、幻想的なようである。私も一度は見たいと思ひ、今晚こそはと夜中目を開けテントをにらみつけるのだが、いつのまにか眠ってしまい最後まで見るができなかった。

19日の夜は、雪崩の音が何回もC2'まで響き、明日の雪の状況によっては、荷上を延期した方がいいのではと、松田から意見が出た。高見も私も同感できる意見だと思った。しかし、明日しか荷上の日が無いので、無理してでも行かないとだめだろうと思いつつ、19時の交信となった。

隊長からは、「明日荷上をしてもらわなくては困る」との指示があったので、行く決意をした。

明日のA・B隊の行動時間がかなりかかっていたので、C隊も早出することに決め早々とシュラフにもぐり込んだ。

朝3時起床。相変わらず強風が続いている。ここ数日同じ定食を済ませ、暗闇の強風の中を5時



▲強風吹き荒れるC3へ最後の荷上



▲典型的な荷上スタイルでC2'へ

20分出発した。昨日のトレールも消え去り、高見が先頭を慎重にルートを判断しながら歩いて行った。

エイメイルンゼ基部に着いたのが7時。結構時間がかかってしまった。基部に近づくにつれて、雪が深くなりラッセルが厳しくなった。ルンゼ登攀となるが、フィックスロープが完全に雪の中に埋もれてしまい、膝上までのラッセルとで先行する高見が悪戦苦闘しているのが、後から見てよくわかり「頑張れよ」とつぶやいていた。

中盤では、松田が先頭になり黙々とラッセルを続けた。「今日は、何を考えながら歩こうかな」といつもひょうひょうとし、夢を語る楽しい男であった。

終盤になって私と交替した。1時間に2ピッチの割合でしか進めなかった。2時間おきの交信のたびに、現在地のピッチ数を報告するのが悔しかった。それ以上に、蹴り込んだステップが何回となく崩れていくことに腹が立ってしまった。

交信で隊長に「まだそんな所にいるのか」と言われた時は、疲れ切った身体にかなり厳しい言葉であった。15時20分やっとC3へ着いた。10時間もかかってしまった。コルへ出たとたん、強風の為顔の皮膚が凍り表面が固くなるのがわかった。急いで荷物をツェルトの中にほうり込み、コルまで登り返し下降の準備をし、エイト環をはずそうと安全環を回したが凍ってしまい動かなかった。すぐ松田が自分のエイト環で叩いてくれて動くようになった。急いで下降したが、途中トラバース気味の所で私は落ちてしまい、登り返すのにかなり時間がかかってしまった。ルンゼ基部では、遅れた私を松田と高見が疲れているながらも冗談言っていて迎えてくれて嬉しかった。18時15分C2'着。13時間の長い1日であった。C隊の役割を果たせて満足な気分で夜を過ごすことができると思っていた矢先、19時の交信で今後のルート工作が困難であることを聞き不安な夜を過した。

10月21日 C2'

今日は、A・B隊C3にて休養。C隊C2'にて休養となる。昨日の交信の結果、A・B隊の決断は、11時の交信でアタック断念と伝えられた。力が抜けていくようであった。残念無念、残念無念、こ

▼C2'の撤去（ゴミも降ろす）



の言葉が1日中テントの中を飛び交った。

なぜかあっけない幕切れを感じたのは、これで2度であった。1度目は、C2'建設によるタクティクス変更に伴って、C隊のC3泊とC4への荷上げがC2からオッパイ山を歩いている間に決定してしまった事であった。この時のC隊のショックは、副隊長がよく理解してくれていた。C隊には、アタックは無い。だからC隊のピークはC4 6,400mであった。オッパイ山で、タクティクス変更の交信を聞いた時、川上は肩を落とすうなだれ動こうとしなかった。高見は岩場で横になり悔しさを必死でこらえているようであった。私なんかふてくされ無言のうちに副隊長に不満な態度を見せていた。

そんな3名の初経験の隊員をじっと受け止めてくれた副隊長。つい甘えてしまえる副隊長の存在を素晴らしい人だと思った。また、C隊に「コンカ6,000部隊という夢のある名称をプレゼントしてくれたのも副隊長であった。

1日テントの中で、松田のカセットを聞きながら言いたい放題な事を言って、少しずつ気持ちの整理をしていった。いよいよ、明日から荷下げとなる。夜になると相変わらずの強風となった。

●無念の荷下げ

10月22日 C2' → C3

A隊の林とB隊は、最高到達点へ行き帰りにデポの荷物を荷下する。C隊は、C3へ荷下の為登る。C隊の気持ちとしては、最高到達点へ行きたかった。全体の動きとして無理だと分かりつつあと1日あればと思いつつ、荷下のためC2'を7

時過にのんびりと出発した。

相変わらずのラッセルに悪戦苦闘する。エイメルンゼで、私がトラバース中に落ちた同じ所で、荷下げ中の河内が落ち、登り返しているのが、1ピッチ下から見えた。ここは、落ちた所からの直上の登り返しが無理で、雪がどんどん崩れてしまう。それで左の雪に穩れた岩をほり出し、しがみついで登り返すしかないのである。河内も私と同じように岩にしがみついているのが見えた。

いつまでたっても河内がしがみついたままなので、休憩しているのかと思ったら「早く来て下さいよー」と、笑いながら言っている。急いで登るのが遅々として進まない。いつも元気な河内だからちょっとぐらい待ってもらってもだいじょうぶだろうと、自分を納得させながら必死で登る。

「遅いですよ」と河内が相変わらずの明るい調子で話しかけてくる。フィックスが雪に埋もれ凍っているのと、重荷の為とで動けなくなっていた。河内の話を聞いているとつい引き込まれ、楽しくなってしまう。しばらく雑談し、彼はどんどん下降していった。千葉、伊藤ともすれ違い、「お疲れさーん」と言葉を交わし、元気よく下降していった。

C3に着いたのが14時で、A隊の中川、居川、林がツェルトをかぶりC隊の到着を待っていた。すぐに、ザックにEPIと食糧を入れられるだけ入れてコルへ向かって歩き出したが、あまりの重さにコルまで行けるかなと思ってしまった。

重荷でアップザイレンする時、足場がすぐ崩れバランスを失い疲れ切ってしまう、1ピッチ終わるごとに呼吸を整えなければならなかった。苦しい下降を終え、次のルンゼ基部からC2'までの長かった事。松田と高見と「ゆっくり行こうな」とニンマリ笑って申し合わせし、途中何回となく立ち止ってはザックを肩からずらし、肩の痛みを和らげた。私の前を歩く高見は、いつもザックからあふれんばかりの荷を担いでいる。BCからの荷上の計量の時、ほとんどかなりのキロ数オーバーして荷物をザックにつめ込んでいた。C2'からの荷下の時なんか、個装を全部手下げ袋に入れて手で持ち、ザックに共装を入れているのである。若いのにたいした男だと頭の下る思いであった。

A隊は、相変わらずのパワーでC隊を抜き去り、疲労している身体でありながら、明日の荷下の事を考えてC2'まで行ってしまった。

(記：森谷 雅春)



◀晴れていれば楽しいC2'の憩い

天壇の頂を断念し、北東稜を下る

— 涙をハイローコーに流し —

10月22日 晴

C3は相変わらず風が強い。夜間に月がこうこうと輝き、天幕の中を照らす。一層の事、猛吹雪でこの天幕を吹き飛ばしてくれたらあきらめもつくのだが。

「あー、連隊長に会わせる顔が無いや、！」と河内は溜息まじりに言う。千葉は何も語らないが、悔やしさをじっとこらえている。伊藤は、力のあるこの二人を十分に活かせなかった事に、責任と自己嫌悪を感じている。それにしても8日と15日、21日、いずれもB隊がトップに立ちA隊が休養日というその前の晩にクレームがついて、B隊は休養や下山を余儀なくされた。B隊にとって数少ないトップに立つ機会だっただけに失望も大きかった。そして、それらの日に限って晴天というのも皮肉なものだ。

悔恨と憤りで眠れないまま朝を向かえた。本日はA隊の中川、居川はC3の天幕撤収、B隊の三人と林は最高到達点までの往復とデポ品の荷下げ、C隊はC3まで上がってくる。そして全員でC2まで荷下げを行なう予定だ。

5時前に寝袋から抜け出るが、A隊もすでに起きているらしく話し声が聞える。天気はいいのだがヤンズコー氷河からの吹き上げと寒気がひどく、キジ撃ちも1分としゃがんでいられない。

朝食を済ませて、撤収し易いよう天幕の中を清掃して外に出る。

林、千葉、河内、伊藤の順で取付く。空はうらめしいばかりのピーカンだが、ルートは北東稜の側壁なので日陰となり非常に寒い。取付きの2Pは傾斜のゆるい雪壁だが、その後のピッチはかなりの傾斜で、所々氷壁もでてきてぞくぞくする。こういう所をルート工作したA隊はうらやましい限りだ。

登高中の写真を撮ろうとカメラを構えるのだが、

傾斜が強すぎてすぐに隊員の姿が視界から消えてしまう。途中フィルムを入れ替えようとして、新品のオーバーミトン風を飛ばされてしまった。最高到達点に着いた林と千葉はしばらく下りてこない。河内は1P下でじっと待っている。伊藤はそれより1P下で、同じくじっと待ちながらヤンズコー氷河を俯瞰する。ヤンズコー氷河は、いたる所クレバスだらけで悪絶な様相をしている。北海道隊は一体どのようなルートで上がってきたのだろうか？岳屋の性で登攀ルートを追っていると、ようやく林が下りてくる。彼とすれ違う時にミトンの話をしたら、彼も高所帽を飛ばしてしまったと言う。そして別れ際に意外な事を言う。「絶対に最高到達点より先に行かせないように、という指示を受けていますので、先に行かないで下さい」。彼はB隊の監視役を兼ねて上がってきたのだろうか？

最高到達点で河内が待っていた。最高到達点に着いても何の感情も湧いてこない。この隊でおそらく一番体力があり、エネルギーな彼も今は全く無感情に見える。先程の林の言葉は告げるべくもない。

近すぎて顔だけしか写らないであろう写真を互いに撮り合う。伊藤はこの時カメラを落としてし



▲果しなき登高の涯にて

▼C 3 から北東稜側壁にルートを求めた



まう。

しばらく前方を見上げてルートを探す。ここからはコンカの頂は見えないが、もう急な壁はないようだ。ただクレバスがいたる所にあり、目の前の大きなピークまでは相当悪く感ずる。どうしても大雪庇に気をとられるあまり、ヤンズコー側の悪相に目がいってしまうのだ。しかし大雪庇側にルートをとれば行けない事はない。

市川隊の報告によれば、この辺からノーザイルで登っているらしいが、雪の状態がその時とは全然違う。目の前のピークまではすべてフィックスが必要に思われる。現在地点より少し前方に下った所に、良いテントサイトがありそうだ。あと1P延ばしていれば確認できただろう。しかし後の祭りだ。

河内はもう、とっくに下りてしまって姿が見えない。不思議なほど冷めた頭に、気合いを入れて下降する。デポ品は前に下りた3人がほとんど回収していた。残っているのはコッヘルとベフマットとスノーバー4本だけだ。荷が軽いので、懲りずに替わりのカメラを取り出して写真を撮りなが

ら下降する。何というおだやかさだ。あれほど吹き荒れていたヤンズコーからの風がうそのようだ。

C3に着くと、天幕はすでに撤収されてバックキングをしている。とにかくザックは詰めるだけ詰めて、載せるだけ載せる。重量も関係ない。

C隊が上がってこない。出発時刻からして、もうとっくに到着してもいいのだが。しばらく待ったがB隊から下りる事にする。コルに上がり、エイメルンゼを見下ろすとC隊はまだ大分下にいる。河内、千葉、伊藤の順で下りる。コルからの下りの1Pは重荷では苦しい。後方に引かれて引っ繰り返りそうになる体を、必死でザイルにすがりつくように体を丸めて下降する。

最終ピッチ下で、C隊のトップで上がってくる森谷を待つ。その間、市川隊の固定ロープを記念に回収する。森谷は何回もステップを切って上がってくる。どうしてそんなにステップを切るのか不思議に思っていたが、すぐにその理由がわかる。雪の状態が最悪なのだ。サラサラ雪で全く締まらない。この雪のためC隊は時間を喰って遅れたの

だろう。すれ違う高見も松田も苦しそうだ。

重荷と最悪の雪で、こんなに不快なアップザイレンは初めてだ。ルンゼの取付きより2P目の途中には、雪壁が崩壊し大きなシュルンドができてしまっている。もう登る事もないが、これでエイマイルンゼの登路は断たれた。このエイマイルンゼの確執が、B隊の行動を著しく制限していた。

今回の登山の核心部の始まりともいえるこの基部には、ようようの思いがあり、離れ難い場所であった。記念の写真を撮り、いつものようにアンザイレンをして下る。表面クラストし、中はサラサラの最悪の雪に足をとられ、3人共ヨレヨレになって歩く。C2'までは大した距離ではないが、ただただ早く荷物を下ろしたい一心であった。

C2'に着くと休む間もなく天幕を設営し、A隊とC隊のために紅茶を沸かす。A隊がほどなく到着する。予定ではA隊もC2'であったが、彼等は明日ダブルボッカするよりも、このまま荷物を背負ってC2に下るといふ。

C隊は疲れ切った様子で下りてきた。彼等の疲労感A隊やB隊の比ではないだろう。察するに余りある。

C隊のリーダー森谷は、ザックから荷下げした食糧や装備を出しながら、憤懣やるかたなしのていで、「どうしてB隊は突込まなかったんだ！A隊の代りに当然B隊が行くものと思っていた。俺達はその為に荷を上げたんだ。少しでも上に行くとどうして思わなかったんだ。どうしてもっと上

部で頑張っていようとしなかった。折角上げた荷をまた下げなければならぬじゃないか！」と、いつもの温和な彼とは別人の調子で言ってきた。森谷の怒りは我々にはよく分っていた。本当に分っていたのだ。

しかし、今回の登頂断念をして下山する理由は「現状ではC4～C5間のルートが最悪であると予想され、仮にC4を設営してファイナルから1,000mのアタックはむずかしい。登頂が無理である以上、少しでも上に行くというのは無意味であり、危険なだけだ」というものであったのだ。だが、今こうして森谷にいわれて、やはりB隊は上部に向けて最大限の努力をすべきであった、という後悔の念が再び湧いてきた。まさに返す言葉もなく呆然と立ちつくした。

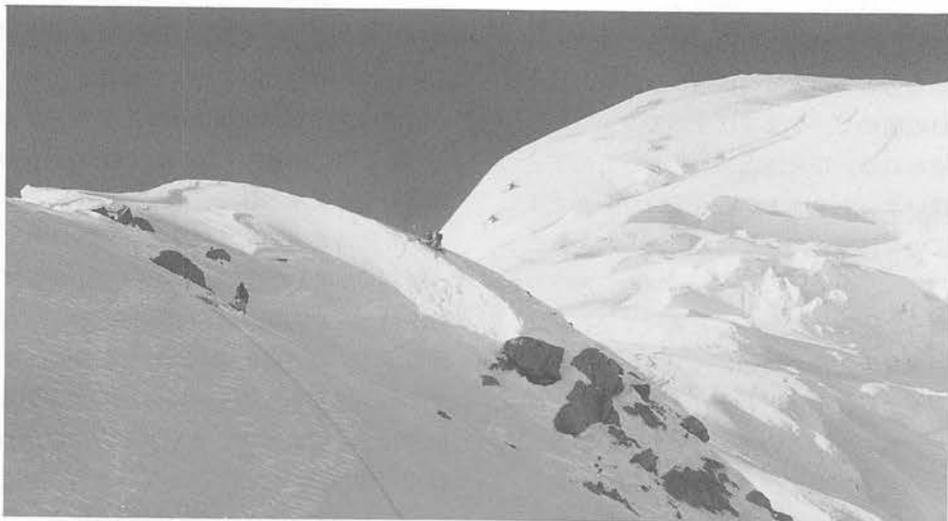
C3の天幕内で我々は「C隊はただ荷上げ専門でコルより上には上がらせてもらえず、早くこの遠征を切り上げたいと思っているだろう」という事を話していたのだが彼等の思いは違っていたのだ。B隊が上に上がる事で、彼等にもコルより上部に上がる機会ができたかもしれない。

ルート工作の確執にこだわり過ぎた。20日と21日の交信は、C隊の意見もきくべきであったのだ。痛恨の極だ。

夕刻、河内は登頂断念の填末を説明するためC隊の天幕に行った。

B隊は食事をするとすぐ眠りについた。まだ8時であった。

(記：伊藤 清春)



◀最高到達点から上部を見る

エイメールゼよ！サヨウナラ

— C1へ荷下げ —

10月24日 ◎ C2～C1～C2

本日の行動はC1までの荷下げを終え、再びC2に上がってくるというハードな行動。今日もBCはガス、BCに下ってもぜんぜんいいことがないとの連絡が交信によって入ってくる。敗退の気落ちか皆気合が入らないらしく、7:30より天幕から出て荷下げの準備を行う。C2入りした時期には雪がなくガレ場だったが、今はガレの上いうっすらと雪が積り非常に歩みにくい。例によってA隊、B隊、C隊の順に出発する。C2入りしたところはこの氷河を息を切らしながら上がってきたのを思い出し、また今回の長いようで短かったミニヤ・コンカ遠征を振り返り、我々B隊は思い思いのペースで歩く。オッパイ山あたりで3人で休憩する。A隊は早いペースでC1への尾根の下降に入り、C隊は我々B隊に気をつかい、少し離れた所でこっちを見ながら休んでいる。BC上空は今日も曇っている。入山当初、赤布やケルンを気にしたが、今は道など関係なくC1へ向けバ

ンパン飛ばす。C1～C2の往復は今回で何度になるのだろうか。滑りやすいガレ上を伊藤、河内隊員に遅れないよう歩き、C1上部の滑りやすい尾根をやっと下りC1に着く。先行したA隊はC1で休養して出発するところであった。A隊の中川リーダーから指示を受け、装備、食糧を分け、残った行動食を食べる。C隊と一緒に30分程度休憩してC2に向け歩き始める。C1からの長い草付きの尾根、そして巨岩の重なるガレ場、サイドモレーン、オッパイ山、C1～C2間は長々としたガレ場の連続であったが、最後の行動と考えると気持ち明るくなる。ハイローコー氷河に降りたところから雪がちらつき気温もぐっと下がった。汗だくでC2に戻り、今日は久し振りにC1に残っていたインスタントラーメンを河内隊員が荷上げをしてくれたのでラーメンの御馳走である。C隊も到着して少し落ち着いたころ、C隊が遊びに来て0:00まで盛り上がった。

(記：千葉 真嗣)



◀北東稜コルからC3〇印とコルを見る

ハイローコーの霧に別れを告げて

— 秋深まる人里へ —

10月31日

6時起床、あれほど寝ごちの悪いと思っていたはずのBCのテントもこれでおわかれかと思うと、氷河がやけに体になじむような気がした一夜が明ける。

朝食が終り、ゆっくりあとかたづけをしようと思っているともうポーターが登って来ている。登山の余音に浸る間もなくあわただしくBCの撤収をする。BCがただの氷河になるころにはどの隊員も元気がなく、それをはげますかのように射撃大会が始まる。飲みほされたばかりの酒ビンを的に撃つが、ことごとく外れ、最後に河内さんが絶対当てますと言って当てたのには感心する。

11時、下山。何ともさみしい下山である。きのうまでの登山がどんどん思い出に変わっていく。またいつか来るぞとふりかえらずに下山する。

12時30分、第三营地着、昼食後日中対抗歌合戦が始まる。中国側の攻勢に山森隊長一人で対抗する。さすがハイローコーの〇〇ジイサンだけある。

17時30分、第一营地着、ひさしぶりのベッドに毛布、手足をおもいきりのばしぐっすり寝る。

11月1日

8時30分、第三营地発。

12時30分、磨西着、また中国料理が始まるのかと思うと先が思いやられるが、BCの海藻料理にあきた隊員たちはおいしそうに昼食を食べる。磨西の教会を見学するが、イ族とキリスト教、どう考えても似合わない。

18時、康定着、ひさしぶりに自動車に乗り、なんて便利な道具だろうと改めて思う。4階建てのホテル、レストラン、テレビ、またこの世界にもどって来たと思うとうれしいやらさみしいやら。

11月2日

9時、康定観光、康定はチベット圏に入るらしく、チベットの民族衣裳を着た人がちらほら目に

入る。チベットを旅してみたくなる。

14時30分、瀘定着、瀘定橋を渡る。橋の両側は中国風の建物が建ちとてもりっぱな橋である。この流れが大渡河らしい。海まで何日かかって流れていくのだろう。

23時、雅安着、長い間ジープにゆられやっとホテルに着く。夜遅いのでどんな宿屋に泊るのかと思っていたら、エレベーターまであるりっぱなホテルなのでびっくりする。壊れそうな音のするエレベーターで部屋に行き45日ぶりの風呂に入る。登山期間というのは山からおりて風呂に入り山のアカを落すまでのことを言うのかと思うほど気分転換してしまう。

11月3日

9時、雅安発、朝からみんなの顔が笑っている。とうとう成都に帰れる日が来たからだろう。出発の日の朝の緊張した顔とは別人のようだ。ジープのスピードがやけに遅く感じる。

15時30分、成都J J H着。もやのかかった成都の街も、チャイナ・ドレスのエレベーターガールも2カ月前と変わっていない。無事帰ってこれた喜びを感じる。 (記：松田 靖彦)



▲秋の濃い磨西の里

隊員の横顔

(年齢は出発時)

- ① 住所 ② 電話番号
- ③ 勤務先 ④ 所属団体
- ⑤ 隊務 ⑥ 高峰登山歴

隊長 山森欣一 Yamamori Kin-ich:

1944年2月 生(47才) B型 別名パサン

① 〒134 東京都

②

③ 日本ヒマラヤ協会 03-3367-8521

④ 山嶺登高会

⑤ 総括、登攀

⑥ 1975 インド、ヌン(7,135m) 副隊長

1978 パキスタン、ハチンダール・キッシュ
(7,163m) 副隊長

1980 ネパール、カンチェンジュンガ偵察隊長

1981 ネパール、カンチェンジュンガ(8,586m)
隊長

1982 インド、クン(7,077m) 隊長

1984 中国、ナムナニ(7,694m) 偵察隊長



1985 中国、ギャラ・ペリ(7,294m) 偵察隊長

1986 中国、ゲニ(6,204m) 偵察隊長

1987 中国、ラブチェ・カン(7,367m) 隊長

1989 中国、シャラリ(6,032m) 隊長

1991 中国、シュエバオ・ディン(5,588m) 秘書長

ヒマラヤを目指す人なら知らない人はいない「HAJ」の専務理事で御座んす。初対面の人には、怖い人と思われがち、しかし旅をして見ると、優しい人と初めてわかる。現地では、情報収集の為に多くの人に声を掛けるので、(女性が多かったかな?)若い隊員には「ハイローコーの好色爺」とも呼ばれていた。

さらにその弁舌の流暢さと豊富な知識で、中国連絡官と通訳の先生方を煙にまき「先生方が品行方正にしないと山の天気が荒れる」と説き伏せた御仁。妻と1男1女あり。
(記:松館)



◀ ベースキャンプでの記念撮影 (9/16)

副隊長 松館正義 Matsudate Masayoshi

1944年4月1日生(47才) A型 別名ペンバ

- ① 〒031 青森県八戸市
- ②
- ③ コープケミカル(株) 0178-44-8821
- ④ 南部山岳会
- ⑤ 総括、生活
- ⑥ 1971 インド、ディオ・ティバ(6,001m) 登頂
1976 アフガニスタン、コーイ・ムンジャン
(5,440m) 登頂
1989 中国、ジャラリ(6,032m)



八面六臂。誰れもがそれを認め納得する。ニックネームは「松ッちゃん」凡である。いつの間にか全ての仕事を引き受けている。それでいて嫌味が感じられない。得である。得がトレーニングでできた訳ではないだろう。この人間性は風土か。

丸々とした体であるが体力はあり、誰かのように水ぶとりではない。しかし、寄る年波には勝てなく、今遠征では後半は流石に疲労していたようである。

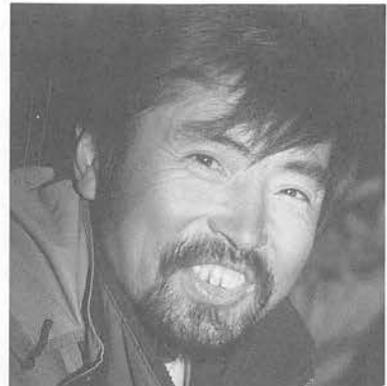
独得の南部弁を流暢に操つるのだが、ほとんどのメンバーはこれを理解できないので、前半は気を遣って慣れない標準語を多用していたが、後半はやぶれかぶれで完全に元に戻っていた。妻あり。

(記：山森)

隊員 伊藤清春 Ito Kiyoharu

1950年12月 生(40才)

- ① 〒018-17 秋田県南秋田郡
- ②
- ③ 五城目木材(株) 0188-52-4135
- ④ 秋田海外登山研究会
- ⑤ 記録
- ⑥ 1989 中国、アルチン(5,798m) 初登頂



現在も出身も秋田であるが、かつては「東京岳人倶楽部」で鍛えられた。なかなか慎重派である。

内面に秘めたるものが多いためか、はたまた東北人特有のものか、なかなかすんなりと自己を表現し難い。そういう面では損をするタイプである。本来なら自己主張をもっと前面に出してリードする立場なのだが、相手の気持ちを考えて譲る面が多かったように思う。勉強家であるが、思考法がどちらかというと剛構造なので、これからは少し柔かさを加味すれば、その持ち合わせた実力がきっと花開らくことだろう。独身。

(記：山森)

隊員 森谷雅春 Moriya Masaharu

1954年8月 生 (37才)

- ① 〒560 大阪府豊中市
- ②
- ③ 若草第二竜間病院 0720-69-0116
- ④ 大阪同窓山岳会
- ⑤ 医療
- ⑥ 無



20代が多い中での数少ない、30代後半の妻帯組の一人。いつでも何かを食べている。甘い物、辛い物、水物なんでもよい。さらに甘いことでは、BCで隊長におねだりして、ポラロイドで写真を撮ってもらって、愛妻に長い手紙と一緒に出していた。隊解散後は、林隊員と中国とネパールを1ヶ月放浪した羨ましい人。'92HA Jヌン隊参加の時は、あの食欲と馬力と革の登山靴で頑張してほしい。なお「国際一級空缶潰士」の資格を有する。妻と2男あり。
(記：松館)

隊員 松田靖彦 Matsuta Yasuhiko

1959年3月 生 (32才)

- ① 〒912 福井県大野市
- ②
- ③ パブ YUMEYA 0779-65-6884
- ④ 福井山岳会
- ⑤ 食糧
- ⑥ 1987 ネパール、ガネッシュ・ヒマールV峰
(6,986m) 登頂



「“夢屋”のだんな」。その風貌に似合わず、シャレた名前の居酒屋「夢屋」を経営している。生活サイクルの違いで普段の山行にも苦労が多い。今遠征は体調不調を押しての参加で、迷いと不安があった。案の定、最後まで高度順化に苦しむが、技術とガネシュヒマールの遠征経験でカバーする。時折り発する「滅茶苦茶じゃけんのうー」は隊員間の流行語になった。絵や写真には非凡な才能がある。秋に独身貴族にピリオドを打つ予定。
(記：伊藤)

隊員 中川裕 Nakagawa Yutaka

1960年8月 生 (31才)

- ① 〒359 埼玉県所沢
- ②
- ③ 東京ルナ・ビルメンテナンス 0429-92-9361
- ④ 明治大学駿台山岳部OB会
- ⑤ 装備
- ⑥ 1981 ネパール、ガンガプルナ (7,454m)
1990 インド、サトパント (7,075m) 登頂



10年の雌伏を経て90年サトパントからヒマラヤに復帰した。博学多識饒舌。この饒舌が長所でもあり、かつまた最大の短所でもあろう。

かつて冬の滝谷で落ち、片耳が不自由なのであるが、そのことをものともせず随所に「力」を発揮する。意固地なところもあり、なかなか自説を曲げようとしない。しかし、結構気分転換の上手な男でもあり、この点は「高所」向きかも知れない。

次のリーダーになるべき立場にあることを自覚して、柔軟な思考法のトレーニングに努めることを期待している。独身。
(記：山森)

隊員 居川康祐 Igawa Kosuke

1962年1月 生 (29才)

- ① 〒261 千葉県千葉市
- ②
- ③ ㈱建築知識 03-3403-1381
- ④ 雲表倶楽部
- ⑤ 庶務
- ⑥ 1983 アンデス、ピラクンカ (5,544m) 登頂
" " エルプラタ (6,300m) 登頂
" アルゼンチン、アコンカグア (6,959m)
登頂



職を辞しての参加。自称“カラオケの貴公子”。記者をやっただけあって、物事に対する判断も冷静で鋭い。ただ今回は、他のメンバーの為にもっぱら聞き役に回り相当に苦勞していた様だ。そのうっぷんを晴らすかの様に、BC撤収の打ち上げ会では“貴公子”ぶりを発揮していた。

ヒマラヤ初見参で体調を崩す事もなく登山期間を終えた事は自信となったはず。1人、中国を旅して翌春に帰国、次は8,000 mへと夢はふくらむ。独身。
(記：中川)

隊員 河内正樹 Kawachi Masaki

1962年2月 生(29才)

- ① 〒412 静岡県御殿場市
- ②
- ③ 自衛隊滝ヶ原
- ④ 自衛隊山岳連盟
- ⑤ 通信
- ⑥ 1987 中国、チョモランマ(8,848m)



「班長」。質実剛健。猪突猛進。いかにも自衛隊の指導者らしく、その行動にも一つ一つけじめがあり親分肌である。チョモランマ遠征の経験もあり、山頂に一番近い隊員の一人であったが撤退時には「みんなに合わせる顔が無いやー」と言いながらも引き際はさっぱりしていた。

天幕の中ではいつも松田隊員や川上隊員とF1レースの話に花を咲かせる。マシンには相当うるさい。職業柄、射撃の名手で露天の射撃ゲーム荒らし。通信機にも詳しく通信係は適任。独身。(記：伊藤)

隊員 林雅樹 Hayashi Masaki

1963年11月 生(27才)

- ① 〒615 京都府京都市西京区
- ②
- ③ シミズ薬品㈱ 075-921-1020
- ④ 京都クライマーズクラブ
- ⑤ 医療、食糧
- ⑥ 1980 ネパール、アイランドピーク(6,180m)
- 1988 アメリカ、マッキンリー(6,194m) 登頂
- ” ネパール、ダウラギリ I (8,167m)
- 1989 パキスタン、ルプガールサル (7,200m)
- 1990 旧ソ連、コムニズム(7,495m) 登頂



- 1990 旧ソ連 レーニン(7,134m) 登頂
- ” ” コルジェネフスカヤ(7,105m) 登頂

27才にして豊富な海外登山経験を有し、所属する山岳会の代表。そして、京都府山岳連盟の海外委員長を務める。

広域チームに参加して、多少戸惑いもあった様だが、ルート工作からBCでの食事作りまで、常に笑顔でこなしていったのは大したものである。次は少人数で気楽にと、'92はインドへ。その次はいよいよ8千米へと、当分ヒマラヤ通いが続く。独身。(記：中川)

隊員 千葉真嗣 Chiba Shinji

1966年2月 生(25才)

- ① 〒123 東京都足立区
- ②
- ③ 共同設計㈱ 03-3851-6104
- ④ 奥多摩山岳会
- ⑤ 気象
- ⑥ 1990 ネパール、ヌンブール(6,957m)登頂



「イエティー」。寡黙を通す。ベースではいつも一人早々とシュラフにもぐり込む。職業柄、難しい土木工学の本を持ち込んでいたが、読んでいる所は見たことがない。前半は高度順化に苦しみ動きも緩慢であったが、後半は見違える程の体力を発揮し、ヌンブール登頂者の面目躍如。

C3での「後悔すると思いますが仕方ありません」の言葉がB隊の撤退を決定した。気象係として、時には悪天についての観測もまめにやる。独身。
(記：伊藤)

隊員 高見清十 Takami Seiju

1966年8月 生(25才)

- ① 〒412 静岡県御殿場市
- ②
- ③ 自衛隊滝ヶ原
- ④ 自衛隊山岳連盟
- ⑤ 環境
- ⑥ 無



「自分が燃やします。」キジ紙から雑誌、レトルト食品の袋まで、あらゆるゴミを燃やしまくった男。その御陰で彼は、この遠征で「国際一級ゴミ焼却士」のライセンスを隊長より頂いたのです。富士山の麓の御殿場に住み、富士山を庭と言うだけあって「ボッカ」も強いが、彼の弱点は「おい高見」と呼び付ける鬼の河内軍曹。今回は、軍曹離れしての海外を期待します。独身。
(記：松館)

隊員 川上豪 Kawakami Suguru

1969年10月 生 (21才)

- ① 〒370 群馬県高崎市
- ②
- ③ 南東山硝子 0273-63-8767
- ④ アルペンクラブ・サテー
- ⑤ 発電
- ⑥ 無



最年少にして、身長は隊で一番。高校時代にチャリンコ部で鍛えた長い足でトップを歩かれると、短足胴長の自分は置いていかれるのみ。飲めない酒を遠征前のトレーニングで鍛え、皆に付き合える様勤めた人。しかしタバコは、努力なしで吸えたという「煙出し3人男」の一人でも有る。'92 HA J ヌンへ参加す為にも「ケム」は止めた方が……。追伸、もう一つあった。さすが国定忠治の出た群馬の出、隊一のサイコロ賭博士、皆で巻き上げられた。別名「コンカ山一級賭博士」。独身。 (記：松館)

連絡官 高 敏

四川省登山協会連絡官

1986年雪宝頂の管理員、1988年ゲニの連絡官としてHA Jとは付き合いが長い。



通 訳 陶法義

四川大学出版社勤務。日本語の訳書を何冊も出している親日派。折目正しく、いつも前向きの姿勢で我々を助けてくれた。



管理員 陳 軍

鋭い感性の持ち主で、成都に新婚ホヤホヤの愛妻を残して随行。朝晩の交信ではいつも「こちらには陳です」と皆を笑わせてくれた。



以心伝心を越えて

伊藤清春

その日は答礼会を主催した夜であった。答礼会は西藏飯店で、四川省登山協会の主席も同席して行なわれた。我々はお世話になった中国側スタッフと「カンペイ」の盃を何度も交わした。隊員の中には、きつい中国の酒にひどく酔う者もいた。

その後ホテルに帰って、私は隊長室におじゃました。隊長と副隊長、それにシャラリの時の通訳であった張さんが楽しくやっていた。ほどなく連絡官の高さん、通訳の陶さん、コックの陳さん、それと今回は行動を共にしなかったが四川省登山協会の王さんが入ってきて、今回の遠征の支払いの話し合いが始まった。

先程までニコニコ顔で酒を飲み交わしていたのが嘘のように、ビジネスの話だ。隊長はおちおち酒も飲んでいられないんだなと妙に感心をしてそのやりとりを見ていた。我々の連絡官の高さんは飲み過ぎて話にならず、ほとんど王さんと隊長の話し合いであった。事前の契約事項を参照しながらチェックしているようであった。

ベースキャンプで隊長は「隊長を孤独にしちゃいけないよ」と口ぐせのように言っていたが、山を降りて、こんな場面でもまた孤独だ。副隊長も私もただ傍観しているだけだ。

話し合いは帰りのポーターの件になると次第に険悪になった。こちらが依頼した人数より、実際に上がってきたポーターが9人ほど多かったのだ。隊長としては連絡官の高さんの顔をたてて無理に9人分の荷物を作ったのであり、ポーター全員の請求をされても納得できない、というものであった。しかし中国側は頑として、ポーター全員に荷を担がさせた事実に基づいて、請求するのだった。隊長1人に中国側は3人だ。今まで楽しくやってきた陶さんも陳さんも、今では王さんと一緒になって反論する。連絡官の高さんはいつの間にか部屋から出て行ってしまった。

隊長は苛立らし気にテーブルを叩いて応酬した

が、それがまた王さんを刺激して一層険悪なムードになった。私はポーターの人数の確認に中川氏を呼びにいったが、彼は答礼会の酒でダウンしていた。二度目に呼びに行き帰ってくると、話し合いは決着がついたらしく何事もなかったかのように談笑しているのだった。

その後、我々は2時まで酒を飲み歌を歌って散会した。— 中国では日本式の妥協は通じない— この夜のやりとりが私には強烈に印象に残った。

日本に帰って私は、山崎豊子の「大地の子」を読んだ。この本を読みながらずっとあの日の夜の事を思い浮かべていた。— 中国人相手に以心伝心は通じない— というさわりでは、思わず赤線を引いていた。

中国の遠征はこれで2度目だ。甘粛省と四川省という全く違った風土の地を観る事ができた。勿論これだけではただ単に表面だけのものであるが、「大地の子」に出てくる自然の背景を想像するには充分であった。そしてあの夜のやりとりは、少し中国の内面にふれたような気がするのだ。

今更ながら、彼の地の研究をしていけばよかったと思う。特に今回の四川省は、中国の歴史上重要な地であっただけに、そして登頂できなかっただけにそう思う。

2度の遠征で感じた事は、目的は山以外にも持っていく事である。目的を山だけに絞ると、非常に落胆する事もある。例え登頂できなくとも、ルート工作のトップに立てれば、それはそれで満足できるだろうが、今回のように登頂はできない、— ルート工作に立てない、7,000 mに及ばない— となるとやはりショックは大きい。

海外に行く事など、我々凡人にはそうそうできる事ではないのだから、目的は山以外にも持っていた方がいい。

高所順応初体験記

森 谷 雅 春

高所登山での高度障害が、実際に自分の体にとどのような反応を現わすかが、一番の不安な事であった。本などを読んで知れば知る程、不安が増すばかりであった。

感想文では、高度障害に対する取り組みと、体調チェック表によって得られた高所反応と、行動パターンとの関連を考察してみた。

まず、高度障害に対する取り組みとして初心者である私は、隊長からできるだけ多く富士山頂で泊る事を勧められた。それで、富士山には5月と、7月と、遠征出発直前の9月と、計3回登山頂で泊った。

1回目の山頂泊では、激しい後頭部痛が出現し、こめかみが脈打ち、胸苦しさとお苦しきさで全く眠れなかった。そして、食欲が低下し夕食はほとんど食べられず、不安な夜を過ごした。しかし、2回目、3回目になるにしたがって、症状は出ているがそれ程苦にならなく、受け止める事ができるようになった。以上のように、遠征前の3回の富士山頂泊が今回の遠征では、精神的にも身体的にも、高所を受け入れる下地作りとなり、高所順応促進の遠因になっていると考える。

次に、体調チェック表によって得られた高所反応と、行動パターンとの関連を考察してみたい。

高所反応のデータ項目は、脈拍、体温、頭痛、倦怠感、咳、咽頭痛、下痢、呼吸苦、等あるが、客観的データとして得られた脈拍と体温を中心に、位置と行動内容との関係から考えてみた。

まず測定方法は、起床時シュラフの中で横になった状態で行った。期間は、9月15日から10月26日の42日間とした。私の平地での平均的な脈拍は1分間50回前後で、体温は35.5℃前後である。

42日の期間のうち、11日が休養で活動日数は31日となり、平均3～4日行動して休養という行動のパターンであった。

データの内容で特徴を示した事があった。そ

れは、脈拍数と体温が平均値よりかなり高くなる時があった。その時の状況はいずれも同じで、高い数値を示した前日に新高度を体験したり、荷上り荷下げでかなり体力を消耗したり、疲労が蓄積してきた頃であった。そして、その高い数値の出現はその日のみで、2日続けて出ることはなかった。

最高脈拍数は、68回/分、最高体温は36.6℃であった。今回の行動パターンで気が付いた事は、高い数値を示した当日が休養日か、移動日、又は行動時間の少ない日であった。これは、隊長が我々C隊（初心者）の行動を正しく分析していた事に気が付き、結果として高度障害の予防になったと考えられる。

次に、C隊である私は、高度障害が最初に出やすい3000mから4000mラインで、BCからC1への高度順化と荷上げで10回往復した。このことが初心者である私の身体にもかなり良い結果となったようである。この間の主観的症狀は、活動後BCで夕食時に後頭部痛が軽度あったり、呼吸苦が数分程度出現したりしたが、早目にシュラフに入って身体を暖め横になっていると楽になり、翌日の行動には影響は出なかった。

次に顕著に出た症状は、下痢であった。BCに入ってから3日目で水様便となり、10日目頃で回復した。全隊員の約70%程が下痢の症状を訴えていたので、これが普通なのだとして自然に受け止めることができ、下痢止めの薬も服用しなかった。以後、上部に上って行くが下痢の症状は出現しなかった。

次に出てきた症状は、咳と咽頭痛であった。C1へ移動し、そこからC2へ荷上げするようになって、1日目から咽頭痛が出現し、2日目から咳が加わり、5日目から黄色の痰が出るようになった。やはり高度になってくると、空気が乾燥しているのがよく分かった。それで、食事時には水分摂取を心掛けるようにした。又、咽頭痛、咳、痰の症状は他の隊員にも同じように出て、行動時の

呼吸がかなり苦しめられた。薬は、メジコンドロブ、総合感冒剤のPLを使用し、1週間程でだいたい回復してきた。ちょうどC2へ移動する頃であり、他の隊員も同じようなパターンを示していた。

C2からC2'間は、200mの高度差しかなかったのと、この高度差の少ないC2-C2'にいた日数が5日間で、その間の行動も負荷が少なくのんびり過ごすことができたことで、特に症状は出現しなかったと考えられる。しかし、問題症状は出なかったが、空気の薄さは敏感に感じ、行動時の呼吸苦はかなりのものであった。

次に、C3への荷上後、先にも述べたように脈拍、体温は高い数値を示したがそのみであった。他に印象に残った反応がBCへ移動中に出現した。それは、C2にて風に飛ばされたテントの整地をするのに、1個の石を持って歩き回ることができなくなり、座ったまま手の届く範囲で石を取り、ほうり投げるしかできなかった。ものすごい倦怠感に包み込まれ、頭がボーとなり思考が停止するような状態になってしまった。前日のC3への荷

上による疲労と、C3の5,800m、私にとっては新高度による反応であったと考える。しかし、この極端な動けなくなった反応も、C1まで降りるとアッというまに身体が軽くなり、動けるようになった。後日、同じ行動パターンがあったが、その時は何も問題はなく行動できた。

以上のように、遠征活動中に体調チェック表を毎日付ける事によって、自分の体調のパロメーターを客観的に知る事ができ、安心してその日を活動できた。この事が長期間の体調保持と、安定した行動につながったのではないかと考える。

今回の遠征で、私自身の高度に対する反応が、データとして得る事ができたことは、自分にとって大きな収穫であった。しかし、このデータは今回の行動パターンによるものであるから、次回の遠征時はどうなるか分からないのであるが、遠征前にしなければならぬ基本的な事は、自分なりにイメージできるようになった。

最後に、この体調チェック表を作ってくれた、林隊員に感謝する。

謝々了！

松田靖彦

ミニヤ・コンカはとても美しい山でした。手のとどくような所に頂上が見えながら全くとどかなかったのが、よりいっそう美しかったと思わせるのかもしれませんが。そんな美しい山にすばらしい仲間と挑めたことはとても幸せなことだと思います。

登頂出来なかったのはとてもくやしきことです。とてもよい勉強になりました。前回遠征のネパールと違い、すべてを隊員でやらなければならないこと、極地法というシステム、混成隊のむづかしさ、これだけでも参加してよかったと思います。この経験と不成功の反省点を次の遠征に生かしたいと思います。

今回の遠征への参加は少々早すぎたのかもしれ

ないと思います。前回の遠征でヒマラヤに惹かれまた次の山に行くためにと自分で仕事を始め、やっと今回の遠征にこぎつけたのですが、まだ余裕のない状態での参加でした。登山が始まるとやはりそれが現れ、他の隊員にめいわくをかけたのはたいへん申しわけないことをしたと思っています。頂上へ登れた登れなかったということよりも、自分のなさけなさでとてもくやしき思いをした遠征でした。次にヒマラヤへ行く時はもっと余裕を持って、頂上をめざせる力をつけてから行きたいと思います。

私のミニヤ・コンカ遠征を応援してくださった人たち、遠征で出会ったすばらしい仲間感謝します。

'91 中国日誌

中 川 裕

9月10日、夜の帳の降りた成都の空港に無事到着した我々は、さっそく、登山協会の迎えのバスに乗り込み市街へと向った。民家の灯が点々とする道を、車は快調に飛ばして行く。四川省、三国志で名高い蜀の国、劉備玄德、諸葛孔明等がこの地によって天下をうかがい、杜甫が漂泊の途中に草堂を営んだ所。そんな場所に、登山という20世紀の道楽で夢と期待をふくらませた僕達はやってきた。僕等の山登りとそんな中国の歴史とが、何の連がりも、関係も無い事は百も承知で、けれども同じ人間の見る夢、時代という制約を受けながら、僕の能力の範囲でしか見る事の出来ないささやかな夢も、単純に歴史の主人公達との距離を縮めてしまう。僕はこの国の遙かな時の流れと人々の営みを感じとろうと、窓の外の暗闇に目を凝らしていた。成都での宿は錦江飯店、明るいロビーのエレベーター前、真赤なチャイナドレスからのぞく美しい足に、僕は早くも中国が気に入ってしまった。

9月13日、成都を後にする。ジープ2台とマイクロバスに分乗して出発。僕の乗ったジープの運転手、眼鏡をかけた中年のおっさん、やたら飛ばすな〜。と思ったら、ニタツと笑って後ろを指さし何か大声でしゃべっている。中国語はわからないが、この手の運転手の万国共通の意識はすぐにわかる。「俺の車に付いてこれる奴はいねえだろう。」平原でも、二郎山への登りのつづら折りの未補装の部分でも、彼はアクセルを踏み込み、クラクションを鳴らし続けた。運悪くこの車に乗り合せた隊員は、ただひたすら磨西まで無事に着ける事を祈っていた。

話しには聞いてはいたけれど、第1營地に着いた時、正直拍子抜けしてしまった。そこには温泉と、とても立派な食堂、宿泊施設が建てられていた。ヒマラヤのキャラバンというイメージとは程遠いものを感じた。第2營地の温泉はプールにな

っていた。そして第3營地、三角屋根のモダンなロッジ、電燈。明日はBCというのにいったいこの状況は何なのだろう。その観光開発のすごさとまどいながら、こりゃ帰りは温泉に入って行かなくては、と、あまりの環境の良さに喜んでしまった9月14日であった。

BC建設。とりあえずはお祝いである。なにしろこの隊には自称1級アルコール管理士が居る。BC撤収までアルコールはきちんと存在していた。夜の宴会では大騒ぎとなった。新妻の写真を公開した陳さんは完全につぶれていた。

初めてC1に宿泊した日、霧雨のBCを後に登って行くと、次第に雲は薄くなり、やがて青空となる。草地の上に張られたテントの脇ではだしになり、エーデルワイスの咲く斜面に寝ころんでいた。ここから眺めるアイスフォールは壮観であり、それが雲海に落ち込んで行く様は、ただ見とれてしまうのみである。

C2から30分程行くと、コルへのルートの全容が見えてくる。赤茶けた岩壁にルンゼが何本か喰い込んでいる。思っていたより雪が少ない。こりゃ苦労しそうだと思いながらC2へ戻る。天気も良い。頂はすぐそこなのに、それを大きく回り込んで行くこのルートの艱に、9月29日の段階では全く気がついていなかった。

10月11日、エイメールンゼのフィックス17Pのユマーリングを終え、北東稜のコルに立った。コルの向う側は雪原となっており、良いキャンプサイトになりそうであった。この日は風もなく、見上げる北東稜は急峻だが、ヤンズコー側の氷盆をトラバースして取り付けば、最悪な部分は回避出来そうであった。僕はこの時、とても楽観的な見通しを持った。天気も連日晴天で、悪い要素など全く無い様に思われた。

「これより下降します。」C3から16P目のフィックス終了点で、風雪の中、C4の場所の確定

はおろか、その見通しすら持てないまま行動終了の時刻を迎えた。トランシーバーに向かって投げた言葉の後に、疲労感が身体を包んだ。ザックに残ったロープ、登攀具をデポして下降に移る。トラバース気味に張られたロープの下降は思いのほか手間をとった。それでも1時間程でC3に帰り、おきまりの雪かきの後テントにもぐり込む。今日見上げたルートを、我々が予定したローテーションで登る事は、とてもかなわぬ事に思えた。BCにトランシーバーでそれを伝える。頂が、とても遠くに感じられた。

10月22日、ミニヤ・コンカ北東稜のコルに置かれたC3からは、その頂を望む事は出来ない。日本を出る時には信じて疑わなかった登頂。夢に描いた山登りと、現実との隔たりはあまりに大きい。C3に集積された荷物をザックに詰め込み、重荷にあえぐ様にしてエイメイルンゼを下降した。

10月25日、C2撤収の日、コンカが姿をあらわした。雪煙を上げるその頂に、また出直して来る事を誓って、雲海の下のBCを目指した。

'90年8月、僕はインドはガンゴトリのサトバントの頂に立ち、ガスの中に消えてゆく頂稜をさらに登って行きたいと考えていた。そして、今回コンカを後にする時思い出されたのは、'81年、ネパールヒマラヤのガンガプルナだった。初遠征の僕は21才になったばかりで、ただ先輩に指示された事をやるだけだった。そして登山は、雪崩によって2名が死亡するという悲しい結末に終わった。あれから11年、国内で致命的なミスを犯して大怪我をし、次には腰を傷めて手術、精神的にもどん底の状態から少しづつではあるが立ち直り、サトバントで頂を踏み、コンカではパーティーリーダーを任された。初めてC2に上がった日、この山はガンガプルナに似ていると感じた。さしづめ、マンンあたりにBCを置いて、ガンガプルナの北西稜を登る様なものだ。同じ敗退ではあっても、あの時とは全く異質な感慨を持った。標高差4,000mの長大なルートをシェルパを使わないで45日間で登る。今回の登山はとても充実していた。残念ながら、力およばずして登れなかったけれども、近い将来、又やってみたい。ハイローコー氷河よ

り仰ぎ見るコンカはとても美しく、山に取り付いてみれば、その懐の深さにおどろかされる。サトバントの頂稜の先を追いかけたつもりが、'81年のガンガプルナの北西稜にたどり着いてしまった様だ。けれども今回、コンカは僕の力の無さを教えてくれたと共に、自信も少し与えてくれた。12人の仲間達との生活は、とても充実していた。敗退はしたが、良い山登りが出来たと思う。その12人の内5人が、今年もまたヒマラヤへ向う。僕もその中のひとりとして、中国は新疆自治区のクラウンへ行く。10名のメンバーの中には、ミニヤ・コンカとサトバントの仲間が1人づついる。

成都に帰ったある日、朝霧の立ち込める平原の中の道路を、僕等を乗せたバスは走っていた。成都に向かって、おそらく市場で売るのである、自転車に様々なものをくくりつけて、人々は走って行く。そして、霧にかすむ畑、見渡す限りの畑に、なんと多くの人々のシルエットが浮かび上がる事か。男も女も、老人も子供も天びん棒かついて、畑にくわを入れ、腰をかがめて草をむしり、作物の苗を植えている。機械などどこにもない。気の遠くなる程の平原のいたる所で、同じ光景が、日々の生活が営まれている。この国の最大の資源は人間なのだ。と、その時思った。政治の世界がどうであれ、人々は日々の生活のリズムを崩すことなど無いのであろう。中国5千年の歴史は、こうした人々の歴史の積み重ねとして、悠久の大地の上で、良い、悪いの判断を超えて、独自の文化、価値感を伝え、更なる時を刻んで行くのだろう。

初のヒマラヤ行から11年をして、又、同じ地点に帰って来た様な、そんな気がする。けれども、そこに立っている自分は以前の自分より少しではあるが成長していた。今回の敗退をバネとして、今後もヒマラヤを登り続けていきたい。新たな仲間達と、又、古い友達と。

お預けされた頂上の一人言

河内正樹

10月22日

明け方、小用に起きると、風もそれ程強くなく、満月から少し欠けた月が、ヤンズコー氷河を照らし出していた。金星が大きくて、すごく明るいまるで、空にあるサーチライトのようだ。たとえ写真にして持って帰ったところで、このすばらしさは1万分の1も伝えることはできないだろう。日本にいる友人や肉親に、この景色を見せたい。これを見たら、遠征に行く人間の気持ちが少しはわかるだろう。少なくとも「なんで山なんか登るの」なんて質問はしなくなるはずだ。まだ少し眠る時間がある、シュラフにもどって、体があたたかくなってくる。なんでこんな事がすばらしく感じられるのだろうか。手があたたかい、お湯が飲める、そんな事に体が震える程の喜びがある、頭の中で火花がはじけるようなうれしさがある、不思議だ。そんな事を考えながら2度目の眠りにつく。

明るくなって目が覚める、今日は撤収の朝だ。昨日荷上げた物を回収し、このキャンプをたたくんで下山する。脈拍54、体温は測らないけど体調はいい。皆は寒いといていたが、自分はよく眠れた。

8時15分、回収に出発。少しむなしい気がするが、今日は本登山の最高到達点6,400mまでいってこようと思い、気をひきしめる。きのう一日、お茶を飲んで休んでいたせいか、動きだすとすぐ用を足したくなる。Fixロープにとりついてからも出るわ出るわ、1ピッチ登るごとに9回連続で用を足す。10分に1回出していることになり、自

分でも信じられない気がする。体の中に水が貯まっていた感じだ。重ね着をして、ミトンをはめた手で用を足すのは非常にもどかしい。

風はあるが天気はいい。ヤンズコーの向こうに茶色の大地が見える。この景色を目に焼きつけようと、ゆっくりまばたきした後、大きく目をひらいてみると一瞬、遠くの山がハッキリ見える。何度も、何度もこんな事をくり返すと最後には目が痛くなって涙が出てきた。

最高到達地点では、伊藤さんを待って写真をとる。精いっぱい笑顔を作って、友から記念に送られたバイルを胸にかまえる。交替をして写真をとり合い、後は下降するだけだ。もう一度ふり返ってみるが、頂上は見えない、遠いなあと感じる。

下りながら色んなことが頭に浮かんできた。C3に初めて上がって来て、強風の中でテントをたてた時、なぜかいいなぁと感じた。こんな人が住めない所へやって来て、皆が真剣に登ろう、生きようと精いっぱいやっている、俺もやっている。すごくいいなぁと思った。

遠征に行くと、本当に人生は1回きりしかないんだと実感する。思わず 頼に力を入れて、自分の人生を思いっきり、確かに生きたいと感じる。(日本へ帰って、しばらくするとまた忘れてしまうけど。)

天壇の山、コンカの頂に立って、神様に聞いてもらいたい一人言があったのに。自分勝手なお願いじゃなくて、本当にあの場所でしか、言えないことを言うつもりだったのになぁ。

登山を振り返って

林 雅 樹

ミニヤ・コンカほど、日本から近くて遠い山は他

にあるだろうか。この登山を終えてなお更に、そ

う実感させられる山だった。

標高7,556m 横断山脈の主峰で、他を圧倒して高く聳え、またひときわ目立つピラミダルな姿は登山家ならば誰もが登りたがる山に違いない。中国の無数にある山々の中でも名峰中の名峰といってもよいのではないだろうか。

ところが、この山は日本人の登頂者ゼロの数少ない7,000m 峰でもあり、私がこの山へ行こうと決めたのはそういうところに魅かれたのに他ならない。

ミニヤ・コンカは、ちょうど10年前北海道岳連隊の悲惨な多量遭難とそれに続く市川隊の遭難と松田隊員の奇跡的な生還によりあまりにも有名で、そのためか魔の山のイメージが強く、それ以降私達のねらっていた北東稜には入隊すらないという状況であった。そういう意味でこのミニヤ・コンカの北東稜は日本人の手で何とか登らねばならない。私はそんな宿命のようなもの、初登攀に対する魅力を感じてこの登山隊への参加を決めた。結局、多かれ少なかれ同じようなところに魅かれて集まった隊員12名、私にとって初めての大所帯に最初は戸惑いもあったが、やはり多勢というのは心強く、また年齢層の若い隊員が多く同志という感じで初めて会った隊員同志にもかわらず、親近感を覚えたものだった。

H A J の隊は常にそうだが、お互いに持つ技術も経験も、育った母体も異なるメンバーが集まって1つの隊をつくる。そしてお互いの不足をおぎないながらチームワークで成果を得る、そんな隊の編成も初めての経験である。隊員の実力を読めない不安はあるものの、これも1つの挑戦である。

7,556m、この高さはネパールやチベットの山ならばBCから2,500m~3,000mの高差という所だが、このコンカの場合は、ハイローコー氷河上に置いたBCより4,000mの高差をもち、他の周辺の山々から抜きん出て高く、独立峰的な要素が強く、また、この横断山脈は南北に伸びグレートヒマラヤや多くの山脈が東西に伸びているのは大きく異なり、またヒマラヤの気候を支配するベンガル湾からのモンスーンの影響は比較的少ないが、その複雑な山脈の地形と四川省という非常に湿度の高い場所にあることから、かなりこの山に特異

な気候をもっている。それはこのミニヤ・コンカ周辺にのみ存在する珍しい植物や昆虫などを見ても想像がつく。そのような事から私達は登山が好天に恵まれる事はないだろう。むしろ何日行動できるかが勝負ではないかなどと考えていた。

登山に関しては、そうした面を考慮し、過去の隊の報告からルートの状況をマークし、だいたいの予想図を描いて挑む事ができた。そういう意味ではこの北東稜は未登とは言え、情報があるという点では再登とさして変わらない。私達は市川隊の遭難と松田隊員の生還の手記を教科書と称し、BCでは何回も繰り返し読んだものである。

しかし、結局私達の隊は10年前の隊の最高到達点にすら到らず、これは全く情けない結果となってしまったが、また考えようによっては教科書があったからこそ、誰ひとりの負傷者もなく元気で帰れたのかもしれない。

隊員13名、途中で1名の不参加となるが、総勢12名という人数で登山をしたのは全く初めての経験だった。そして計画の段階で登頂は最大4名の2回計8名と発表されていた。これは即ち、最初から頂上に立つチャンスが与えられない隊員が存在するという意味で、言わゆるオーソドックスな極地法でやるという事である。

私は今回Aパーティでルートを開く役目を荷い言わば登山の中で一番おもしろいところをやらせてもらった。だから登山そのものは内容もあったし頂上はのがしたものの、それなりの充実感を持ち帰れたと思う。しかし、Cパーティーの隊員達は始めからアタックの機会もなく、隊の成功のために、または自己到達高度への挑戦のために荷上げ中心の行動となり、私達トップに立つ者の判断で登頂断念が決定された時には私達以上にはがゆい思いをしていたのではないだろうか？。

極地法でやる以上は仕方のない事と言い切ってしまうと、それまでかもしれないが、同じ負担を負う隊員同志でいつもこの人達のためにも頑張らねばならないという責任をおったような気持ちになり、とりわけコルヘなかなか抜けられず、下の荷上げ、行動に影響が出ると全くみじめな思いにかられていた。それは山に対するプレッシャーではなく、他の隊員に対して自分の責任が果たせな

いというプレッシャーと言ってよいだろう。各隊員の技術、経験に差がある以上仕方のない事とは百も承知ではあるが、気持ちの上での整理がうまくつかないのである。

12名もの人間が隊組織を作り、1つの山登りをするのだから、誰かがまとめなければならない。身内の小遠征隊ではあまり考える必要のない管理というものが、こうした混成チームには重要な意味をもってくるのである。

私の母体の山岳会では合宿はない。登りたい山、ルートに各自が適当にパートナーを見つけてザイルを組んでいる。だからいつもパートナーは1～2人までの登山である。

このコンカ登山で、管理というものを学び、また逆に管理される側の思いというものも経験できた。常日頃気ままな登山ばかりやっている私には少々胃の痛む事もあったが、いろんな意味でよい勉強ができたと思っている。

ルートの北東稜は10年前の隊が頂上近くまで肉薄しているという事からルートの困難性よりも、BCからの高差が4,000m、そして不安定な天候という2つの要素がこの登山を厳しいものにするだろうと考えていたし、実際その通りと言ってもよいかもしれない。しかし、予想していた程の悪天はC1以上ではさほど無く、積極的な休養日以外の悪天停滞は1日も無くその面では随分めぐまれていたと思うが、ただもう一つ抜けていた問題があった。少なくとも私にとっては予想以上のものであった。それはルートの長さである。C2'を含めて3つの上部キャンプを作ってやっとコンカ山自体の登攀が始まるのである。正直言ってこのルートの長さには負けたという気さえしている。

計画当初は10年前の隊より1つキャンプを減らして全部で5つのキャンプを出すという予定であった。ところが、C2～コルが長過ぎてC2'を作ることになり、この予定外のキャンプ展開が今回の登山の成否を分けたといっても過言ではないだろう。

つまり、これは自分の力の誤算に他ならない。

登山装備、技術は時代を隔てて向上しているかもしれないが、体力、精神力という点ではむしろ衰退しているのではないか。今回の結果はそうした事を内示してくれているような気がする。

そしてまたこの長い北東稜から全くの少人数で頂上に肉薄した市川隊には心から敬意を評したいと思う。

登山を終えて成都に帰り、私は28才の誕生日を迎えた。そしてちょうどその日、私達が成都を後にする最後の日という事で答礼会を催し、その席で私の誕生日を祝う盃があった。常々全くといってよいほど酒を飲まない私にとって52%の酒の乾杯は正に拷問だが、この時ばかりは断れず皆の盃を受ける。10杯目ぐらいでフラフラになり歩けず皆にささえられて部屋にもどる。その時は悲惨な状況だったけれど、多勢の人々に祝ってもらった誕生日というものは本当にうれしいものだ。あと後になってよい思い出になったと飲んでいる。

翌朝、私は森谷さんと2人で離隊しラサへ向った。その機上で朝焼けに輝くひとときわ尖った大きな山を見つけた。

人が生涯に登れる山はたかだかしかれている。その1つにこのような山で登山できた事を本当に光榮に思い、失敗したにもかかわらず「あの山で登山していたんですよ」と自慢したい気持ちになる。ミニヤ・コンカはそれほど美しく、素晴らしい山だったのである。

勉強になった出会い

千葉真嗣

ミニヤ・コンカ峰(7,556m)は、北海道出身の私にとってはよく耳にした山名であった。しかも日本隊はすべて敗退、北東稜から成功した隊はまだない。初登攀を目指すヒマラヤ協会の計画は私

にとっては魅力的な計画だった。一つの不安材料としては全国からの公募登山、ぜんぜん知らない人間どうして2ヶ月間生活する、たしかに私にとっては大きな問題であったが、それ以上にミニヤ

・コンカ峰を見てみたい、この一つの思いで申込書にサインをした。皆全国から集まった違う山岳会者どうし、こんなことは実際BCに入って、12人が7,556mを目指したときに忘れさせ、山森隊長をリーダーとする一つの山岳会の仲間のような気がした。山は登れなかった。10月21日11:00の交信での敗退の悔しさは一生忘れないだろう。でもそれ以上にこの12名に会えたこと、心の底から参加して良かったと思うことができた。BCから見上げたミニヤ・コンカ峰の雄大な山容、順

応前のイグアナの登り、C1～C2の長いガレ場、そしてエイメールンゼ、私にとっては見る物すべてが、魅力的で大変な遠征であった。出発前の日本での準備、中川さんのようにテキパキと行動できない自分が非常に情けなかった。現地に入ってから同パーティの伊藤さん、河内さんのスピードには驚きの一点だった。BCでの山森隊長、松館副隊長、他の隊員の皆さんとの暖かいふれあい、いろんな面で勉強になった遠征であった。また努力してヒマラヤの高峰を目指してみたいと思います。

初心を忘れず

高見清十

1991年9月10日、10時28分、JAL781便は日本を発った。とうとう日本を出た。この次日本の土を踏むのは運がよけりゃ2ヶ月後だ。何ともいえない感動が胸をよぎる。

中国はともかく海外に出たのも初めての私には見るものすべてが新鮮に感じられた。成都の街は私が思い描いていたとうりの自転車が多く活気ある街だった。夜には夜店が立ち並び、商売熱心な中国人が生活用品を主に商いをしている。思っていたより物の流通がよくデパートはあったが、自動販売機などどこに行ってもなく、50m歩けば、自販にぶつかる日本とは違うのだ。日本の物資の豊かさが身にしみる。

準備も終りいよいよキャラバンが始まる。磨西の村は戦前の日本の田舎をほうふつとさせるのどかな風景であった。日本の山を歩いているような錯覚さえおこさせてくれる。ここの人々は生きるために生活しており、生活に追われ時間に追われる日本人とは大きな違いだ。本当にこの先に氷河

なんてあるのだろうかと心配する程、木々は青々としげっている。

1日半でキャラバンを終え、BC(3,400m)を建設。BCは登山期間中、ほとんど雲に覆われておりこれさえなければ快適だったのにとと思う。約40日間のたのしく苦しくもあった登山はアツというまに終わり、登頂こそできなかったが全員が無事に帰れたことは本当によかったと思う。そしてヒマラヤの白い山、青い空、広がる空間、あの風景は私の瞳に焼きついて離れない。又、コンカ遠征を通じて様々な人々との交流によって、自分が見る世界、視野が広がったように思う。そして生きることの喜びとそれを感じることができたことが大きな収穫だった。

そして今、あわただしく時間が過ぎていく日本に戻りコンカ遠征のことを思いおこすと、遠い昔のことのようでありゆっくり過ぎていった時間を思いながら、あの時感じた気持ちを忘れず今回の経験をステップにして次の目標に向っていこうと思う。

初めてのヒマラヤ登山

川上 豪

私がこのミニヤ・コンカへの遠征に参加するこ

とができたのは、私の所属している山岳会の会長

である須藤さんに、遠征に行ってみないか、と言われたのがきっかけで参加することができました。

私にとって高所登山と言うものは、あこがれであり夢でした。ミニヤ・コンカ遠征の話聞いた時、私は丁度つとめていた職場を退職した直後だったのです。この時ばかりは、こうもうまく行っていいのだろうかと思いました。このチャンスをのがしてたまるかと、なにがなんでも遠征に参加したいと思いました。もし仕事をもっていれば、長期の休暇をとって行こうかと頭をなやませる事になると思いますが、仕事の事でなやむ必要がなかったのです、思いきりがあっさりついたのだと思います。遠征行きが決まったあと見つけた仕事は硝子屋でこの社長はじめ社員の人たちは理解があり遠征期間、そして行くまでの間の準備がある時は心よく休みをくれ、自分は本当にめぐまれていると思いました。

今回の遠征ではとにかく初めての遠征なので、高所登山、極地法そして遠征を身をもって体験し、とにかく隊にこうけんでできる様にと思いましたが、ミニヤ・コンカに行って、私は2回ほど調子を崩してしまいました。これもいい経験になったと思います。遠征に行く前から体調をとと

のえ体はどこか悪い所、こわした所などあれば、完全になおしておかなければ高所においては、それがよけいに悪くなると身をもって体験してしまいました。この体験をもとにもし次に遠征に行くことができたならこの経験を生かしてみたいと思います。

今回の遠征では、食糧と照明の担当になりましたが、とにかく初めてのことで、なにかととまどいもありました。食糧に関しては、メニューをどうするか、どのくらいの量を持って行ったらいいかなど、ほとんどは遠征経験のある須藤さんがやってくれました。いろいろな事を考慮に入れてメニューなど決めなければならないという事もわかりました。

照明にかんしても、実さいに遠征に行ってみないとわからない事も多く、行ってみたら、こうすればよかったな、ああすればよかったなと思えばかりでした。完璧にするのはなかなか難しいとは思いますが、一つ一つの経験を生かして行けば、かなりのことができると思いました。このミニヤ・コンカでの経験を、また遠征に行く事ができたら生かしてみたいと思います。

参加を断念する

須藤 圭一

「モシ、モシー、川上一、おいしい話しが有るのでオレの家に来てくれ」

本格的な山登りを始めて、まだ日の浅い自分の所属する会の若きクライマーにヒマラヤに行かないか？ とミニヤ・コンカに誘い掛けた。

彼の今後の成長への期待と、1人でも多くの海外登山の経験者を作り出す事であった。

失業中というよきタイミングもあってか、話しはすぐに決まり2人してHAJルーム通いが始まった。

初めての海外の山、それもヒマラヤに行けるとあって、彼の目は嬉しさと希望で輝いていた。だ

が、私の方は計画が進み日が立つにつれ気持ちが沈む一方であった。

初めての子供が丁度出来る時で、妻は誓約書にサインはしたものの浮かぬ顔の毎日、双方の親達は猛反対で私への不信感が高まって来ていた。チベットのラブチェ・カン登山で大変お世話になった山森さんが又も隊長である。まして、山は場所といい、高さといい、山容といい自分にとって魅力十分な山であった。

何としても行きたい。そして、頂上に立ちたい。自分も7,000m峰以上でトータル21,000m登頂者の仲間入りしたい。チャンスはめったに有る物で

はない。そんな自分の欲望が先走りし、子供が出来る事もある、今回は大丈夫かなと多少不安があったが何とかなるだろう。そんな軽い気持ちと妻や親達への事前の配慮不足、妻の胎教への悪影響等を考えると、残念ながら途中で参加を取り止めるしかなかった。

今回は、結婚してからヒマラヤに出掛ける事のむずかしさを身を持って知った。しかし、これで

あきらめていてはヒマラヤは遠くなるばかりか、自分の成長も有り得ないと思う。又、次のチャンスが来ると思う。その時の為にも気持だけは前を向いていたい。

尚、ミニヤ・コンカへ出発まで準備に付き合わせて頂き自分も勉強になり、多くの新しい仲間と知り合う事が出来ました。山森さんはじめ隊員の皆さん大変お世話になりました。

びっくりしたなー

松 館 正 義

(第3営地で)

ここ何回か、遠征に参加して現地に行って思うことがあります。それは、いつも我々の荷物を運んで呉れるポーターの人達の強さです。けっして、プロレスラーの様ながっちりした身体でなく、痩せ細った人達、20才前の少年、若い女の人等、どの人を見てもそんなに強そうに見えない人が、25kgの荷物を担いで(中には2個も担いで)、我々よりも早く急な山道を歩けるのか、キャラバン中の我々の荷物は、殆ど空みたいな物だが、まごまごしていると置いて行かれてしまう。お負けに、履いている物は布のズック(雪道なのに)。我々の履物は、なんとかメーカーのなんとか品と立派な物が多い。そこで、今回の遠征では、自分なりに少し観察して見て、何がその強さの元か見つけて見たいと思いました。

北京とか、成都とかの町に住んでる人は別として、殆どの方は、歩くか、自転車に乗るかです。長距離の時は、乗合バスが主役です。

そこで荷物を運んでいる様子を見ると、

☆人が担いでる荷物

背負カゴ……キャベツ、白菜などの野菜類
レンガ、草(牛、ヤギのエサ)
をカゴ一杯に(30kg位)

天ビン棒……肥桶2~4ヶ(1ヶ15ℓ入位)
にわとり、アヒルを足を結わ
えて50羽位ぶらさげる。

背負子……生丸太(直径15~20cm、長さ
100~150cm)を5~7本

男女の別なく、又子供も量は少なくとも担いでいる。女の方は、赤子を抱いて背負カゴを背負っている。

☆自転車

- 運転手の外に、ハンドルとサドルの間に横座りに1人と、荷台に1人の3人乗り。
- 竹カゴを、荷台に振分けに2個つけて、その中に、にわとり、アヒルを50羽位押しこめる。キャベツ、白菜など野菜を一杯に付ける。レンガを両方のカゴに入れる。
- 中国の方は(特に漢族)、豚を沢山食べる、その豚を運ぶにも自転車の後の荷台に、30kg位の豚を2匹付け、さらに強い人は、前のハンドルの所にも仕掛けをして3匹を運ぶ人もいる。
- 米、とうもろこしの穀類は、麻袋に入れて30kg位にして、豚と同じ様に荷台に振分けにして運んでいる。
ほとんどは男の人だが、女の人でも竹カゴ1ヶは運んでいる。

☆代八車……これは2人で引いていた。

- 野菜類 …… 背負カゴの5~6倍
- 肥 桶 …… 8~10個
- 石 板 …… 巾60cm×長さ150cm×厚さ10cmを1~2枚

丸太……直径30~40cm、長さ200~
300cmを2~3本

☆農家の人は、畑でも田でもすべて、機械でなく、手でクワとスキで、土を耕していたし、脱穀もくしを使って、抜いていた。

☆第3営地での薪切り、薪割りは、チェーンソーではなくやはり斧を使い、板を挽くには鋸を使っていた。

限られた時間と場所の中で見た私なりに感じたことは、ここに住んでいる人達は、自分の手、足で、耕し、歩き、作り、食べているし、我々は、車、耕運機、機械、ガス、電気等に頼っているという大きな違いが、その差になっているのではと

▼足を縛られて売られるアヒル



思いました。私も、あの人達の様にはなれなくても、少しは近づける様に、これからも努力して行こうと反省しているしだいで。それにしても、あの人達は、よく背負い、よく歩く、ただただ咆驚しながら、運んで呉れることに、感謝、感謝です。

最高到達点に残したスノーバー

居川 康 祐

「イガワ、トップで行くか？」

吹き荒れるブリザードの中でチームリーダーの中川が声をかけてきた。1991年10月20日午後2時過ぎ。ミニヤ・コンカ北東稜上6,380m付近。登山はすでに最終局面に入っている。そして、この瞬間を私は待っていた。ルート仕事を担当するAチームに私は配属された。しかし、ここまで大半をセカンド、サードとして中川と林がルートを切り開いてゆく後姿を私は見つめてきた。それは私にとってヒマラヤの登り方を勉強する期間だった。だが、ついに、この瞬間がやってきた。

数ピッチ下で難しいミックス壁にルートを開いた中川は疲労の色が濃い。下部の手ひどいラッセルを1人でこなした林も黙りこくったままだ。よし、ここからは私がオールトップで頂上まで行ってやる。ロープを結び直し両手にアイスバイルを握ると全身に力があふれてくる。ビレイする中川とルートを打ち合わせ、ゆっくりと雪壁をトラバースする。ザラメ雪の雪壁はやや不安定だ。あいかわらずゴーグルなしでは行動できぬほどのブリ

ザードが吹き荒れている。ヤンズコー氷河の上部プラトーまで600mの高距ですっぱり切れ落ちているが、さして高度感はない。

30mほどロープを伸ばし小ピークにはいあがったが、そこから先は完全にホワイトアウトになっていた。1m先が見えない。一步も動けぬ状態だ。それでも手さぐりで数m登ると傾斜が緩くなった。

「その先はどうだ？」

中川が下から声をかけてくるが、その声も風の音に切れぎれだ。

「まったく見えない。とりあえずここで切る」
かき消されぬよう怒鳴り返す。

スノーバーを2本埋め込んで中川を待つ。ほんの一瞬、ガスの切れ間からルートが見えた。ルートはここから少し下り、大雪庇ピークに向け再び登り返す。しかし大雪庇ピークへの斜面にはところどころクレバスが開いているようだ。ここから先はフィックスなしで行く計画だったが、まだまだかなり張らなければならないだろう。時間がかかりそうだと思ったが、まだ頂上への可能性は十分に

残っていると私は楽観的な見方をしていた。

真白に顔を凍らせた中川がフィックスロープをたどり登ってきた。ルートを観察した中川も同じ結論に達したことは一目で分かった。しかし中川はもっと重大な結論に達したようだった。これから先を打ち合わせる口調が重い。すでに15時を回っているので今日はここまでとし下降することになった。スノーバーのセットを確認して私が先に懸垂で下降を始める。1ピッチ下では林がロープを握りしめ風雪に耐えていた。

「どうですか、上は？」

「まだ、かなり時間がかかりそうだ。先に降りるよ」

とりあえずそう答えてさらに下降を続ける。転げ落ちるような下降だ。途中、登る時に私が落ちたクレバスを大きく回してヤンズーコー氷河の上部プラトーに降り立つ。ここまで下ると風も多少柔らぐ。中川が下降してくるのを待つ間、ふと、あそこが最高到達点になるかもしれない、という思いが心をよぎった。しかし、それをあわてて打ち消す。まだ時間も残っている。装備も食糧も十分に上がっている。隊員の健康状態も良い。ま

だやれるはずだ。そう結論づけて今後のタクティクスを考え直す。とにかく明日もう一日がんばりC4を建設し、そこからセミ・アルパインで頂上を狙うしかないだろうと私は考えていた。上部リッチ上の小さな点にしか見えなかった中川と林がやがて下降してきた。雪原を歩いてC3にもどる。コルはあいかわらずブリザードが吹き抜けテントは半分埋まっていた。

この日を境に私達の登山はあつという間に終局を迎えた。翌日は休養。翌々日にはC3の撤収。それぞれの思いを整理する余裕もなく、強風に追い落とされるようにエイメイルンゼを下降した。

結局、私が最後に埋め込んだ2本のスノーバーが今回の登山の最高到達点になってしまった。日本に帰った今も時々、北東稜の風の音と鈍い光を放ちながら雪面に吸い込まれていった2本のスノーバーのことを思い出す。今は雪に埋もれ、もうどこにあるのかさえ分からないだろう。だが、私の手の中には2本のスノーバーを埋め込んだ時の感触が今も残っている。

(1992年3月15日 自宅にて)

ミニヤ・コンカあれこれ

山 森 欣 一

1984年6月29日午前7時15分、ボーイング707は成都の双流空港を飛び立った。それは夢にまで見たチベット入りの日であった。機が安定飛行に移って間もない7時30分頃、左手に大きな山塊が目に見え込んできた。それが中国の名峰ミニヤ・コンカであることはすぐにわかった。

純白な雪に包まれたピラミダルの山頂を持つこの山は、周囲の衛生峰を睥睨するかのようは一際高く聳え立っており、その美しさと厳しさを兼ね備えた山姿は、一瞬息が止まるような迫力で私を捉えて離さなかった。

その後、85年2回、86年2回、87年1回と計6度チベット入りした私は、その往復の都度ミニヤ・コンカ峰を空から見ることになる。

1986年10月26日私は西田敏行らと四川省の西部の康定にいた。そこから一段と高く登ると広大なチベットの大地があった。チベット本土の高原と違って、この大地は北から南へと大河が何本も流れ下り長江へと注いでいる。新都橋と名づけられた街は、ラサへ向かう南路と北路の分岐点であるが、その手前までくると、南方にミニヤ・コンカが望まれた。北海道隊の8人が次から次へ飲み込まれた北壁が眼前に広がっていた。帰路には高原の上からコンカを見た。

1989年8月25日ジャラリの登山を終えて理塘に出た私は、新都橋が近づくにつれてミニヤ・コンカを見たいと思ったが、夏の四川は雲が多くその望みは適わなかった。しかし、この登山で私は結

果的にミニヤ・コンカを東から時計回りに一周してしまっただけである。

こうしてミニヤ・コンカは、知らず知らずのうちにジワジワと私に近づいてきたのであった。

銀雪の王、山々の王、山中の王、神の山、さまざまな呼称がある中で私はこの山を「天壇の山」と呼びたい。その山姿から想像出来るのは、真に山頂から「天の神」に祈りを捧げるにはうってつけの場所であるように思えるからだ。

不思議なことに、ミニヤ・コンカの西と東では住む人々が違うと云う。西は圧倒的にチベット族の世界である。東に住むのはほとんどが漢族であり、少しのイ族が住むと云う。私達は東の磨西の部落からハイローコー氷河に入ったが、荷を担いでくれたほとんどの人はイ族であった。

ミニヤ・コンカの山麓にある街に「康定」がある。古くは「打箭炉」と呼ばれていた。その由来は、三国志時代に蜀の諸葛亮孔明が南征に際し、職人を派遣してここに炉をもうけ、箭「矢」をつくらせたことにあると云う。谷あいには点在する街であるが活気に溢れている。

康定は又、明治の時代にチベット入りを企てた青年僧「能海寛」が7カ月もここに滞在して、「金剛経」「弥勒菩薩誓願經」「般若心経西蔵文」「無量寿智經」などの仏典を訳したことで知られる。時は1899年、河口慧海がラサ入りする前のことである。

時代が下がるとハイローコー氷河への出発地点である「瀘定」が一躍脚光を浴びることになる。それは中国革命史上「長征」として名高い1万2千キロに及ぶ行軍を成功させた一因となった「瀘定橋の戦い」のためであった。

「だが行軍は意のごとくはかどらなかつた。安順場から瀘定橋に向かう途中に、このコースの咽喉首といわれる猛虎岡の高山があり、そのさきに磨西面という村があった。ここに各一個大隊の四川軍がいて前進をはばまれ、かなり手間どった。しかも磨西面村の東の河にかかっている橋は破壊されており、架橋のためさらに貴重な2時間を失った。」— 中国革命長征史・岡本隆三著 —

ここにはほかにハイローコー氷河、ヤンズーコー氷河から流れ出た河の様子が描かれている。

実際に登山を展開すると、ミニヤ・コンカは難かしい山であることがわかる。標高差4,000mもさることながら、稜線が長いことも一因である。かつてクンヤン・チッシュヤガンガプルナが同じように長い稜線から試みられて登られず、壁の弱点突いたショート・カットルートから登頂された例もある。ミニヤ・コンカ東面や西面にこのような視点に立ってショート・カットルートが完成されれば魅力は倍加することだろう。

☆ ☆ ☆ ☆

10年前、8,500mの高みでの縦走の夢にとり憑れ、カンチェンジュンガに向かった。その時隊長の私は37歳。リーダー層5名の平均年齢は34才。隊員15名の平均年齢は30才。(内20代は6名、30才3名、31才5名であった)

今回久しぶりに20代6名と登山する機会を得た。伊藤、森谷を除くと8名は若年層と云うことになるだろうか。若くしてヒマラヤの高峰へ向かえることは我々の世代から見れば羨望の限りである。勿論本人達も様々な障害を乗り越えて夢を実現したのであるが、又、山の世界にもそのような層を受け入れる皿が出来ていたとも云えるだろう。

10年の歳月で一つだけ気がついた事がある。同じ若年層のリーダークラスの間を比べてみると、現在の人間は高所経験や登攀技術については、10年前のリーダー層に比べると勝っていると思えるが、パワーに欠けるところがあるようだ。

何をもってパワーとするのか、わかりづらいかも知れないが、私にはそれは「生きる本能」であるように感じられるのである。豪快さから繊細さへ、陽から陰へ、重から軽へと表現すれば判りやすいかも知れない。

できることならば、今回の若年層メンバーには、山への憧憬を生活とのバランスの上で成り立たせるのではなく、山への憧憬に重きをおいて、明るく力強く生きてもらいたいと願っている。

ミニヤ・コンカ氷河上で考えたこと

(通訳) 陶 法 義

1991年10月30日。夜6時ごろから11時半ごろまで続いていた閉山祝いの歌声が静まったあと、山森欣一隊長と松館正義副隊長をはじめとする日本ヒマラヤ協会コンカ登山隊の十二人と私たち中国側の三人が、お互いに「おやすみなさい。いい夢を見ましょう。」と挨拶を交わしあってから、それぞれシュラフの中に潜り込んで、寝ようとしている。

連日の降雪で、テントの外は深さ20cmぐらいの積雪。寝る場所としてのテントの中の地面は、深さも測れないようなミニヤ・コンカの氷河の大氷塊の上である。幅^{※1}1キロメートルぐらい長さ3キロメートルほどの氷河全体も、雪片の舞っている濃いガスの中で、ぐっすりと眠っているようであるが、耳をすまして聞いてみると、ときどき、どこかの深いクレバスの中から落石の音が聞こえてくる。氷河の両側の険しいサイドモレーンで起っている土砂崩れの音も、ときどき伝わってくる。辺り一面は、静まり返っているようでもあり、又、予想もできない物凄い力で突然動き出してもおかしくないようでもある。本当に身の毛がよだつ感じ。

登山隊の皆さんが、シュラフに入ると、まだ何分も経たないうちにすぐ、三つのテントのどれからも、ぐっすりと眠り込んだ静かな鼾声が聞こえてくる。シュラフの下は寝心地よい平らで柔らかいベッドであろうか、いや、どちらに寝返りをして同じように凸凹した寝床である。しっかりと氷の中に挟まれた大小さまざまな石塊が、どうしても取り出すことができなかったし、周りには土も砂もほとんどなかったので、テントを張る場所の凹みを埋めて平らにすることができなかったのである。「四十七日の間よくも、こんな氷雪の上のベッドで頑張ったなあ、コンカ登山隊の皆さん…」と思うと、私は、感慨無量の気持ちに包まれてきた。

今日、膝まで潜る雪の中を、BCまで登ってきた私も、少し疲れを感じているのだが、なかなか眠りにつけない。「…登頂断念…アホーな隊長、バカな隊員…」と歌われた登山経験ゆたかな山森隊長の謙虚な内容の歌声が、まだ私の耳もとに残っている。四十七日間もの登山活動で、疲れきったような若いメンバーたちのヒゲヅラになった朗らかな笑顔もまだ私の目の前から去らない。実を言えば、全員無事にBCまで下山してきた皆さんの元気な姿を見て、連絡官の高敏さんも陳軍さんも私も、ほっとした。本当に、登山隊サービス員としての私たち三人も地元の山の人たちも同じような願いを持っている。コンカ登山隊が山に入ってから、私たちは、その登頂成功と無事帰還を心から祈っていた。危険な事故が起こるおそれのある場合、絶対無理せずに行動を取るよう願っていた。どんな苦しみも恐れず、困難を知りながらも前へと進もうとするこのような登山家たちは、まさに世の中の優秀な人間ではないか。どの国の人たちも、登山隊の精神を発揮して、一致団結し、助け合い、労り合って共に大自然の秘密を探索し開拓していけば、この世間はどうなにも良いものになるであろう。

中日友好関係の未来に目を向けて考えてみれば、その素晴らしさは、まさにこういうような精神に満ちた人間たちの努力によるものではないであろうか。悲しい過去は、いつまでも過去のことでおいて、みんな輝かしい未来のチョウジョウに向かって共に努力して迎っていくという精神を持ちさえすればどんなに高い山でも、どんなに深い海でも、征服できないものはないであろう。今日は、もう海を飛び渡る飛行機も船もあるけれども、遠くない将来のうちに海底シンカン線というような交通道具ができれば、どんなにいいことになるであろう。私は、とてもそれを期待している。そのために全力を尽したいと思う。

今度の登山は、悪天候と地震活動の関係で「登頂断念」となったが、全員無事に元気に帰られたのは、何よりも嬉しい事である。登山活動の宿命は、遭難死亡だと言われているが、私としては、こういう見方が大嫌いである。大自然のことであるから、雪崩などの現象が、いつ起こるかは、確かに誰にも予測できなく、人間の意志と力では完全に防げないものである。しかし、できるかぎり登山の目標とするその山の天候変化、地形の様子など、よく調べ、十分に分析したりして、事故発生を最低限度ないし完全無しにすることができないことはないと思う。これは、すべての山岳会と登山隊の隊長の責任と義務だと言ってもよいであろう。もし、単純に登頂を登山活動の目的とするものなら、これからの登山活動は、だんだん無意味になってしまうのではないかと、私は心配している。いったん登頂に成功しても、遭難死亡が伴った場合、その登山隊の隊長と幸いに生き残ったメンバーたちが、どういう気持ちになるか、帰えらぬ人となったメンバーの家族が、どういう気持ちになるか、その登山隊の組織者としての山岳会のリーダーたちが、また、どういう気持ちになるか、これぐらいのことを考えてみれば、登山中のすべての不幸を無くしなければならない、という決意が固まってくる。不幸が避けられるようになれば、登山活動も、社会から、もっと大きくサポートされるものになるであろう。

大昔から、人間のすべての活動は、大自然の中で行われるものであり、人間の意志と力の強さは、みんな大自然への挑戦で現われている。登山活動は、まさに、こういう挑戦の最も具体的な、最も象徴的な行動であろう。

登山活動は、人々に一番純粋な楽しさをもたらすし、人間の意志を最大限に鍛え、人間関係を特に親しいものにするなどという面で、最も有益な活動だと言っても過言ではないであろう。その楽しさと崇高な純粋さを守っていかなければならない。したがって、個人の見方を言わせていただければ、遭難死亡などの不幸が伴った登頂は、少なくとも100%の登頂成功とは言えない、というように言いたいのである。言い替えれば、それは、光彩のない登頂だと言うべきではないであろうか。(今

度、成都に帰ってきたら、山森隊長からこの秋に事故で六人も登山の友達を失われたという話を聞かせていただき、私も悲しく思い、もっと自分の考えを強調したい。)

したがって、今度のコンカ登山隊の登山活動は、失敗で終わったとは言えない。6,400 m以上の標高までも辿り着いたし、高所の天候変化、地形の様子などについても、もっとよくわかり、確かなデータも取られた。これは、きっと、この次のコンカ登山に大いに役立つであろう。それに、登山隊全員が無事に帰還したのは、何よりも喜ばしいことである。

山森隊長と松館副隊長が、^{※2}悪天候と地震活動などの要因に拠って英断を持って登頂断念のことに決められたのは、とても正しいと思う。おかげさまで、皆さんも帰り道で楽しい旅を進めることができたのである。

ミニヤ・コンカは、非常に激しい天候変化と険しい地形で、よく知られている。地元の山の人々から「神の山」と呼ばれている。そして、二年前に、こういう事もあった。

1989年12月のある日、ミニヤ・コンカの写真を取るために、胡黎明(当時45才)という東北の吉林省からのカメラマンがコンカ氷河の東の上方の^{チキンスアウバー}長草垣というところまでやって来た。ガイドとしてついたのは、今もやはり海螺溝第三営地の職員として働いている劉大友(今年48才)という人と四人のポーターであった。その日、夕方になって暗くなろうとしても胡さんは、まだ、宿泊地の第三営地に帰る気にはならなかった。写真を取るのにいい瞬間がやってこなかったからである。その安全を心配していた当時の第三営地の営長劉大軍から、帰還の催促の命令が二度も出されたが、胡さんは、やはり帰ろうとはしなかった。下から命令が来るたびに彼は、思わず涙を流してウンウンと泣き声をもらしたという。そんな年の人なのにと、ガイドの劉大友ら五人が不思議に思いながらも、止むを得ず、胡さんと一緒に、積雪が100 cmもあるその場で一夜ビバークした。夜半ごろ、カメラの三脚を置く地点を決めると、胡さんは、写

真を取るチャンスだけ待つことにした。快晴になった翌日の朝六時頃、カメラのレンズを通して見ると、驚いた。見えたのは、ミニヤ・コンカに寄り掛かって坐っている菩薩のような姿をした神様であった。その両側に、それぞれ一匹の虎が向い合っており、周りには鹿、牛などの野生の動物がいた。随行のガイドとポーターたちに見てもらっても同じ景色であった。カメラのレンズを通さずに肉眼で見ると、何も見えなかったという。その写真を撮ってから胡さんは海螺溝を後にして行った。まもなく、ガイドの劉大友に、胡さんから一枚の写真が送られてきた。正に、長草垭で撮ったその写真であった。レンズを通して見たのとそっくりであった。これを知った遼寧省の旅游局の局長 さんも、不思議に思って、どこかの展覧会に出そうともらっていったという。

上記の事が起こってから、ミニヤ・コンカは、もっとその神秘さを増した。本当の「神の山」だということに広く伝えられている。誰もがよく説明できなく、誰もがそれを否定できないようである。そして、「神の山の神様が恐ると、天気が悪

くなり、登山活動が不順になる。」ということを感じる人も少なくないという。本当の神様が存在するかどうかは、まずさておいて、このたび、登山隊が海螺溝に入ってから四十七日のうちには、晴天は、ほんの二、三日しかなかった。大本営では、ほとんど深いガスと霧雨の毎日であった。

幼稚な考え方も知れないが、こんな難しい山の天候変化の規律と地形の様子などをしっかりと把握するためには、まず、その周辺の、あまり高くない山々に登ってから、最後にコンカ登山をしたら、いいではないか、というようにお勧めしたいと思う。

私の念願としては、どの登山隊にせよ、どこの山に登ろうとしても、その登頂成功と全員帰還を、心からお祈りしたいと思う。

幾度失敗を重ねても、がっかりせず、倦まず弛まず、困難に向かって進んでいくという精神を持ちさえすれば、ミニヤ・コンカの神様もしまいに心を打たれて、登頂成功のチャンスを作ってくださいであろう。

私は、コンカ登頂成功の日を楽しみにしており、心からお祈り申し上げます。

※1 686 m

※2 断念の理由に悪天候は入っていない。



▲BC撤収のポーターには女性も



▲中国側はこの第三營地にいた

中国の旅

一人歩きの20,000キロ

居川 康祐

いつのころからだろう。中国を一人で旅してみたいと思い始めたのは、黄河文明以来、4,000年の歴史を育み、20世紀世界史に輝く毛沢東を生んだ国・中国。日本の約26倍にあたる960万km²の広大な国土。北に内モンゴルの大草原、南に濃緑生い茂る雲貴高原、西に8,000mを超えるヒマラヤと蟹気楼揺らぐタクラマカン砂漠を擁し、長江・黄河の二本の大河と6,000kmに渡り続く万里の長城が東西を結ぶ。この広大無辺の大地に地球人の四分の一を占める12億の人々が暮らす国・中国。ミニヤ・コンカ登山を終えた後、私は一人中国に残り約4カ月間この地を旅した。移動距離約2万キロメートル、訪ねた町は43都市。東西南北を急ぎ足で歩いた一人旅の旅行者が恒間見た中国の姿を報告する。

1. シルクロードの旅

旅の始まりは四川省の省都・成都。1991年11月9日。登山隊の日本語通訳を務めてくださった陶さんに見送られ、夜行列車で私は一人西へ向かった。最初の目的地は青海省の省都・西寧。町に着いてまず最初にしなければならないのがホテル探し。ところが、これがなかなか大変な仕事だ。中国では外国人が宿泊できるホテルとできないホテルが明確に決められている。外国人用のホテルは多くの場合、その町で最も設備の整ったホテルで料金も割高だ。限られた予算で長期旅行を続けなければならない私としては、いくつかある外国人用ホテルをまわり最も経済的な部屋を確保しなければならない。

第三次産業が高度に発達した国の国民である私の目から見ると中国のホテルの従業員は驚くほど横柄だ。ようやくホテルを探しあてても「房間没有(部屋はない)」「明天来(明日来い)」などと、ぶっきらぼうに断られたりする。もっとも北京など大都市の高級ホテルではまた話も違って来る。部屋は二人房(ツイン)が主流だが、ユースホステルのような二段ベッドが並ぶ多人房(ドミトリ

ー)という部屋もあり、こちらはたいへん経済的な料金だ。しかし多くの場合、ホテルのフロントは可能な限り料金の高い部屋をすすめる。「四つの現代化(農業・工業・国防・科学技術)」を進める中国は今、外貨獲得に必死だ。外国人と接するホテルのフロントも外貨獲得の窓口のひとつ。このため最も高い部屋に泊めたいフロントと最も安い部屋に泊まりたい私との間でガマン比べの交渉が行われるわけだ。

西寧ではチベット仏教寺院の塔爾寺(タール寺)が印象に残っている。40万m²あまりの丘陵地帯に20以上の寺院が立ち並び遠くチベットからの巡礼者が五体投地で祈る姿は宗教意識の薄い私にとっては感動的ですからある。

西寧からバスでゴルムドを経由して敦煌へ。莫高窟で名高いシルクロードのオアシスだ。莫高窟への路線バスがその日運休したため、私はトラック便乗させてもらい一人で出かけた。莫高窟を訪れた外国人は私一人。このため英語の話せる素敵な女性ガイドが専属で私を案内してくれ、唐代のシルクロードの繁栄を彷彿させる壁画、塑像など

の仏教芸術を堪能した。

敦煌からバスでハミを経由してトルファンへ。ここも古来からシルクロードのオアシスだ。知り合ったアメリカ人とフランス人の3人でタクシーをチャーターし古代高昌国の古城、そして貴族たちが眠るアスターナ古墓群を巡る。翌日、もうひとつの遺跡・交河古城へは私1人でロバ車に揺られ出かけた。このあたりでは馬車、ロバ車も重要な交通手段のひとつだ。

敦煌からバスでクチャを経由して中国領シルクロードの西の涯で・カシュガルにたどりつく。ここはもう中東の町の雰囲気だ。市内の中心にそびえるイスラム教のモスク・エイティガール寺院からは毎日、コーランを唱えるムスリムたちの声が響いてくる。ウイグル語が話されており中国語はほとんど通じない。中国の多様さを改めて実感する町だ。

カシュガルから飛行機で新疆ウイグル自治区の省都・ウルムチへもどる。ここからシルクロードの出発点である唐の都・西安まで約2,600kmを汽車でもどるつもりだ。

しかし、中国では汽車の切符を買うのにたいへんな労力が必要だ。外国人の場合、開放された観光都市には必ずある中国国際旅行社(C.I.T.S.)に行けば簡単に飛行機や汽車の切符を買える。だが、可能な限りその土地に生きる人々と同じスタイルで旅をするという主義の私は今回の旅でも必ず駅へ行き切符を自力で購入した。

まず、駅へ行くと最初の難関が待ち構える。中国人は何をするにも並んで待ち並んで買うというのが苦手だ。駅で切符を買うにしてもお金をふりかざしダンゴ状態になって押し合う。切符売り場の窓口には鉄骨子がはまっており、お金と切符の受け渡し用に直径20センチほどの小さな穴が開いている。そこへ、お金を握りしめた手が常時3本ぐらい入っているので、譲り合いの精神などという悠長なことを言っているのは百年たっても切符は買えない。

そして、この状態にあきれはてているのか、切符売りの職員も極めて横柄だ。それに効率的な仕事に慣れている私の目から見ると職員は恐いほど非能率的な作業を行っている。たとえば1枚の

▼カシュガルで会ったウイグル族の老人



切符を作成するのに15分以上かかることもたびたびある。そのうち「朋友(友達)」と称する人が割込んできたり、いきなり窓口が閉まり他の窓口に行かなければならなくなったり右往左往の連続だ。やっと窓口にとどりついて言葉が分からなくてまごまごしていると思いきり怒鳴られたりする。

また、中国には飛行機、汽車、船の一部に外国人料金という奇妙なシステムがある。ホテルや観光地の入場料も同様だ。交通機関の場合、中国人料金のおおむね2倍だが、有名観光地の入場料などでは10倍などという途方もない格差があったりする。

必死の思いで切符を手に入れた後もたいへんだ。窓口と同様、汽車に乗り込む時も入口に殺到してダンゴ状態となる。そのうち荷物の酒のビンが割れたり子供は泣き出すので、ほとんど戦争状態といってもよいくらいだ。始発駅で席がすべて指定で決まっても同じ行動となる。これらはすべて料金の安い硬座席の話で、高い軟座席や寝台車では少し事情は異なる。しかし、中国で最もうれしかったことは何かと問われれば文句なく私は「汽車の切符が買えた時」と答えるだろう。

ウルムチでは結局、延べ10時間余りを費したが駅では切符を購入できなかった。結局、市内の別の切符売り場を探し出し、ようやく切符を手にするのに丸2日間かかった。ウルムチからの帰途、万里の長城の西の涯で嘉峪関、甘粛省の省都・蘭州へ立ち寄り12月13日、西安へたどり着く。すでに旅立ちから1カ月以上が過ぎていた。

2. 長江船旅と桂林・香港の旅

西安で秦始皇帝兵馬俑坑博物館を見学した。約2,200年前に造られた等身大の「ハニワ」の軍団だ。6,000体にもものぼる兵馬俑の一体一体の表情が違う。いったいどれほどの人智とエネルギーが費されたことだろう。中国の底の深さに改めて圧倒される。

西安から四川省の重慶へ飛行機で飛んだ。60人ほど乗れる中国製プロペラ機・雲七型機だ。これまで重大事故を起こしたことがないという名機らしい。しかし、少しでも天気が悪いとすぐに欠航となるので事故は起こりようもないとする説もある。

重慶から湖北省の武漢まで長江を客船で下る。約1,300km。ところが動き出した船は間もなく霧のため長江の真ん中でストップ。結局43時間の臨時停泊の末、96時間かかり武漢に到着した。このため長江下りのハイライトである兩岸に数百メートルの絶壁が続く三峡は真夜中に通過してしまい景色はまったく見えなかった。

武漢から船で少しもどり岳陽へ。杜甫の「登岳陽楼」の詩で有名な町だ。この町では寒波による大雪に見舞われた。岳陽は古い家が入り組んだ町で古い中国の町はこんな感じだったのだろうと想像させる雰囲気を持っている。岳陽楼に登ると洞庭湖が一望だ。最上階の壁には毛沢東筆による「登岳陽楼」の詩が掲げてあった。

一般的に中国人はどこにでも平気でゴミを捨てる。そばにゴミ箱があったとしても、みかんの皮をむいてその場にポイッという光景をよく見かける。また、タンやツバをこれまた、いつでもどこでも吐き散らす。汽車やバスの中、果てはホテルの部屋や食堂の中でも吐く。だから中国の町はどこへ行ってもゴミの山、タン・ツバで汚れている。しかし、岳陽の町はなぜか比較的きれいだった。それもそのはず、市内のあちこちにゴミを捨てたり、タン・ツバを吐いたものには5~10元(125~250円)の罰金を課すとの人民政府のお触れが出ていた。

岳陽から汽車で桂林へ。山水画の風景が広がる町として有名だ。観光客が多く落ち着かないので

すぐに60kmほど南へ下った陽朔に移る。ここは桂林から灘江を船で下ると折り返し点になる町だ。

「桂林の風景は天下一、陽朔の風景は桂林一」と称されるほど美しい風景が広がる。ここを通過する日本人旅行者は多いが腰を落ちつける人はまれだ。しかし、欧米人には有名らしくホテルは満員だった。ここで少し休養してバスで梧州、船で華南の大都市である広東省の省都・広州市へたどりつく。

中国料理の中でも広東料理はあらゆるものを食べてしまうという点で有名だ。市内の市場に行くと肉、野菜、魚貝類に交じり、たぬき、鹿、猫、ハト、カメのほか得体の知れぬ動物がカゴに入れられゴマンと売られている。そして、とかげの干物や分けの分からぬ薬草など、私には初めて見るものばかりだ。

広大な中国だけに料理も地方によって異なるが、日本でなじみの深い青椒肉絲や麻婆豆腐などはどこの地方でもメニューの中に必ず入っている。当たり外れがないため私はどこへ行っても青椒肉絲ばかり食べていた。おそらく100回以上は食べたと思う。

広州はすぐ隣に経済特区の深圳市、そして香港があるだけに中国諸都市の中でもズバ抜けてモノが豊富だ。ないものはないと言ってもよい。中国の都市には小さいながらも必ず百貨商場(デパート)があり、たいていのがそろっている。シルクロードの奥地でも同じで、物流は極めてよく機能しているようだ。崩壊した旧・ソ連邦と大き



▲桂林一の美しさといわれる陽朔

く異なる点といえよう。

百貨商場では商品はすべてガラスの陳列ケースに入れられており手にとって見たい場合は店員に言って出してもらおう。しかしこれがまたホテル、鉄道と同様、極めて横柄。たいてい店員は同僚とのおしゃべりに夢中で客など目に入っていない。それをようやく振り向かせて「これを見せてくれ」と頼むと、はるか遠くから商品が投げられてくる。そして、お金を払うと今度は釣り銭が飛んでくるといった状態だ。中国ではホテルには泊めてもら

い、鉄道には乗せてもらい、商品は買わせてもらおうといった心持ちで臨まなければうまくいかない。日本にあって中国にないものといえば「サービス」という「商品」だろう。

広州から船で香港へ出国する。携帯電話を持ちキビキビと働く資本主義の権化のような香港人たちが中国と同じ民族とはとても信じられぬ。自動販売機で切符を買い、コンビニエンスストアで買いものをする生活。普段、何気なく利用しているものが、とてつもなく便利に思えた。

3. 華南・華中の海岸線の旅

香港でビザを取り直し1月15日、中国に再入国した。国境は幅5mほどの汚ない川。歩いて橋を渡るともう中国だ。香港側の岸には嚴重な鉄条網が張り巡らされているが中国側の岸には何も無い。まず、経済特区の深圳へ。外資を積極的に受け入れる経済特区には高層ビルが立ち並び確かに発展する町の息吹きを感じられる。しかし香港のエネルギーギッシュな姿を見た後ではどうも影が薄い。

深圳から厦門、泉州、温州、沈家門と海岸線をバスで北上する。中でも泉州は印象深い。ここも岳陽と同様、古い中国の町並みがよく残っていた。市内の道路は狭いため人力車しか交通手段がない。しかし、宋・元代の泉州は海のシルクロードの出発地として賑わう国際都市で、かのマルコポーロをして「第二のベネチア」とまで言わしめた町だ。また、市内の開元寺には魯迅が形容しがたいとまで言った美しい塔が天空にそびえている。

さらに泉州は華僑を多く送り出した町でもある。市内の外れには華僑新村と呼ばれる地区があり、田園調布にあるような駐車場、庭付きの豪邸が数十棟立ち並んでいた。

沈家門から中国四大仏教聖地のひとつに数えられる普陀山という小さな島にフェリーで渡る。最盛期には寺廟300以上、僧3,000人を数えたといわれる聖地も今は20ほどの小さな寺が点在する静かな、どこにでもありそうな島になっていた。

沈家門へもどり再びフェリーで上海へ渡る。人口1,250万人をほこる中国最大の大都市・上海。とにかく人が多い。中国の市内バスはどこの町で

も超満員だが、上海のバスはそれをもはるかにしのぐ満員度だ。バスに乗る方が疲れるので私はほとんど歩いて出かけた。上海では久しぶりにジャズを聞いた。老舗のホテル・和平飯店の北楼一階のバーで毎夜、専属の生バンドが演奏している。メンバーはすべて60歳以上のオールドバンドでお世辞にも上手とは言えないが楽しそうに演奏している姿は何かほっとさせるものがある。

上海から汽車で蘇州へ。ここも「天に極楽あれば地に蘇州・杭州あり」とうたわれた風光明媚な美しい町だ。宋代以来、官僚・地主らにより多くの庭園が造成された。中国四大名園のうち二つが蘇州の拙政園と留園ということが、この町の美しさを雄弁に物語っている。日だまりの中をのんびり庭園巡りをすると古えの中国の生活が目に浮かぶようだ。

さらに汽車で南京へ。この町は日本人の私にはとてもつらい町だ。1937年12月に南京を占領した



▲上海のメインストリート・南京路

旧・日本軍が行った非道な行為は市内南西部に建設された「侵華日軍南京大屠殺遭難同胞紀念館」に刻明に記録されていた。建てものにレリーフされた虐殺された人々の数を示す300,000という数字が重くのしかかる。中国が最も華やぐ春節（中国の新年）を私は南京で迎えたが、町に鳴り響く爆竹の音と裏腹に私の気は重くなるばかりだった。

唐代に日本に渡った僧・鑑真の寺がある揚州を南京から日帰り往復した後、再びバスで北へ向かう。連雲港を経て青島へ。ドイツ様式の建て

ものが並ぶ美しい海浜リゾートだ。しかし、今は冬。海辺には人影もなく砂を踏む私の足音と波の音だけが響くだけだ。山東半島を汽車で横断して煙台へ。春節ラッシュでホテルはどこも満員。超高級ホテルしか空き部屋がない。やむなく発船寸前のフェリーの切符をダフ屋が投げ売りしているのを買って飛び乗るというウルトラCを使い、夜の渤海を渡る。いよいよ、凍てつく北の大地が目前だ。

4. 凍てつく東北の旅

大連。遼東半島の突端に位置するこの町が北の旅のスタートだ。朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）との国境の町・丹東へバスで向かう。国境の鴨緑江には遊覧船が航行しており一般の日本人旅行者が行くことのできない北朝鮮という国を真近に見ることができる。川幅7～800mの鴨緑江を船はどんどん北朝鮮に向かう。最も接近するところでは岸まで20mぐらいまで近づく。一般に河川の国境は最深部となっているため北朝鮮領の鴨緑江を航行していることはまちがいない。自転車をこいでどこかへ向かう老人やら、ぞうきんを絞るおばさんやら北朝鮮ののどかな日常生活が私の目には興味深い。遊覧船が航行できる国境の鴨緑江に中国と北朝鮮の親密な関係が象徴されている。

丹東から汽車で瀋陽、長春、ハルビンと北上する。長春は旧・満州国の首都だった町。関東軍本部（現・中国共産党吉林省委員会）満州銀行本店（現・中国人民銀行長春分行）など当時のままの姿で残っている。そしてハルビンには日中戦争中、細菌戦研究のため多くの中国人に対し人体実験を行った731部隊の罪証陳列館が建てられていた。南京と共に東北の地は日本人が忘れてはならない重い歴史が刻まれている。

ハルビンではちょうど氷灯祭が行われていた。松花江の氷を切り出し造られたみごとな建築物や彫刻。水の中には緑や赤のランプが埋められており、夜の闇に鮮やかに浮き上がる。ハルビンの夜は厳しい。-20℃を下回り手袋・帽子なしではとても外に出られない。完全凍結した松花江は歩い

て渡れる。氷河と同様、時おりミシリと音をたてるのが少し不気味だが。

ハルビンからさらに北西へ汽車で行く。ハイラルを経由して2月21日、ロシア共和国との国境の町・満州里へ到着した。ここが今回の旅の最終目的地だ。すでに内蒙古自治区に入っている。郊外に歩いてゆくと薄い雪をまとった内モンゴルの大平原に飛び出し、のんびり羊を追う人の姿も見られる。この町には多くのロシア人が買い出しに来ていた。ロシアから毛皮製品、時計、のこぎりなどを持ち込み、中国で酒や食糧を買ってゆく。揺れるロシアの現状を垣間見たような気がする。

200キロもどったハイラルから飛行機で北京へ飛ぶ。今回は中国国際航空の小型ジェット旅客機だった。わずか2時間余りのフライトで眼下に万里の長城を過ぎると北京空港に到着だ。

北京は「千年の王城」。そして現代中国の顔だ。天安門広場、故宮博物館、天壇公園、万里の長城、



▲長春の旧・満州銀行本店

明の十三陵などの見所をゆっくりとまわった。そして北京大学の友人を訪ね中国の学生生活の一部も見ることができた。2週間にわたる「北京の休

日」を楽しんだ私は1992年3月11日、6カ月振りに日本に帰国した。

エ ピ ロ - グ

中国に団体旅行で行った場合、現地の人々と話をする機会は極めて少ない。登山隊として行った場合も同様だ。私の場合、一人旅だったので中国人と同じホテルの部屋に泊まったり、汽車の中で話をしたりするチャンスが数多くあった。彼らの行動や話からはテレビや新聞では報道されない生の中国の姿が浮かび上がる。

すれちがった人々。地方人民政府の幹部や職員、技術者、外科医、解放軍兵士、農民、学生――。みんな打ちとけてみれば親切で気のいい人たちがばかりだ。彼らは隣国の資本主義・経済大国ニッポンに対して興味と憧憬、尊敬とやっかみなど複雑な感情を持っているようだ。

外国の情報が少ない中国では隣国とはいえ日本の実情は本当にわずかしか理解されていない。日本が豊かだとは知っていても平均的な労働者の月収がUS 2,000ドルにも達することは地方人民政府の幹部ですら知らない。中国の一般労働者の月収はわずかUS 40ドル程度。50倍もの収入格差があることを私は実感できても日本という国を知らない彼らにとってはとても理解できぬことだろう。

中国は今、「中国特色的社会主義」という思想のもとに社会主義に資本主義のシステムを一部導入し改革を進めている。外資を積極的に受け入れる経済特区の設定、農村での責任生産制の導入など、私がイメージしていた社会主義国とはまったく異なる国造りが進んでいた。だが、こうした資本主義システムの導入で中国国民の間には「とにかく金」という風潮が広がっていることも強く実感した。こうした風潮は人心を速やかに荒廃させる。各地で最近続出する外国人旅行者を狙った詐欺や盗難、不当な料金請求なども、この延長線上にあるのだろう。12億の人々が乗り込む巨大な中国という船がこれからどこに向かってゆくのか隣国の国民である私にはとても気になるところだ。

今回の旅で学び知ったこと。それは異なる社会

体制と文化を持つ中国のほんの一部に過ぎない。しかし、国家レベルの交流のほかに私達のような民間人が行き来してお互いの国の制度や文化の違いを知り理解しあうこと。たとえば中国の百貨商場の店員はひどく横柄で、それが社会体制の違いから来ていること、などというのもそのひとつだ。そうした違いをそれぞれの国民が知る。それこそが国家間の真の友好関係を深めると私は信じている。このような点から今後、登山や旅行が日中間でもっと活発に行われることを私は願ってやまない。そして中国を旅した日本人の一人として私は今後、日中の相互理解のために微力ながら力を尽くしたいと考えている。

1992年3月18日

千葉市の自宅にて



▲北京の天安門広場にて

第II部

隊務報告



隊務報告

1. 事務局日誌

1989.10. 2 中国登山協会へミニヤ・コンカ1991年の登山許可申請書を提出。

1990. 3.28 中国登山協会へ許可督促。

4.16 中国登山協会から4月11日付で登山許可通知来る。

5.10 1989年シャラリ登山の通訳であった張俟氏に手紙を出し、ハイローコーの状況調査を依頼する。

7.11 登録料1,080ドルを東京銀行から送金。

7.14 議定書作成し中国登山協会へ送付。

7.16 四川省登山協会、江硯都氏からハイローコー氷河周辺の資料が中村保氏経由で送られて来た。

8. 6 張俟氏よりハイローコーのキャラバン状況やBCまでのトランスポートなどの様子がかかれた手紙を受取る。

8.10 ヒマラヤ226号誌上にて隊員募集開始。

9.17 募集要項を会員19名へ発送。

11.13 「ミニヤ・コンカ峰説明会のお知らせ」文書を18名に送付。

11.27 議定書付録を中国登山協会へ送付。

11.30 隊員決定通知書を中川裕、森山英穂、松田靖彦、林雅樹へ送付。

12. 8 HA Jルームに於て説明会を開催。協会側から山森、酒井が出席し、中川、河内正樹、水野俊哲、須藤圭一が出席。尚、森山英穂隊員から電話により隊員取消しの届出があった。

12.11 居川康祐へ決定通知書発送。

12.15 森谷雅春、千葉真嗣へ決定通知書発送。

12.19 広本俊也へ決定通知書発送。

12.31 河内正樹、高見清十へ決定通知書発送。

1991. 1. 7 伊藤清春へ決定通知書発送。中国登山協会から議定書&付録が届く。広本俊也隊員から取消し通知受領。

1.21 川上豪へ決定通知書発送。

1.26~27 第1回合宿をHA Jルームで実施。(山森、松館、須藤、伊藤、森谷、松田、中川、居川、河内、林、千葉、高見、川上)自己紹介、HA J登山の基本姿勢、隊の構成(現在決定していないが参加決定の場合は、松館副隊長、須藤登攀隊長)、隊の役割分担。今後のスケジュール、集会などについて決定された。

2. 6 四川省登山協会へBCへの輸送について申し入れ、文書を発送。

2.13 ミニヤ・コンカ通信No.1発行。

3. 2~ 3 第2回合宿(須藤を含む全13名)HA Jルームで各係の検討。3日は東京都山岳連盟主催「高所順応研究会」に出席し現地解散。

3.12 定例集会(山森、須藤、中川、居川、川上)食糧計画検討。合宿打合せ。尚、須藤から家庭の問題で参加不能になるかも知れないが、もう少し時間が欲しい。又、仮に不参加になっても出発までは隊に参加し任務分担をしたいとの申し入れあり。

3.14 ミニヤ・コンカ通信No.2発行。

3.16 須藤から正式に不参加の通知あり。

3.20 四川省登山協会からBCへの輸送について回答あり。

3.21~23 第3回合宿(ハケ岳)伊藤を除く11名が参加。但し、山森、松館は22日下山。

4. 4 ミニヤ・コンカ通信No.3発行。

4.25 T.H.Iへ航空券予約手配。

5. 3~ 5 第3回合宿(白山)林を除く12名。

5. 7 ミニヤ・コンカ通信No.4発行。

5.31 中国登山協会へ隊員名簿、予算書、日程表を送付。

6. 4 ミニヤ・コンカ通信No.5発行。

6.28~30 第5回合宿(HA Jルーム・梱包)

28日はテイクイン作業として、主に食糧の過剰包装を取り外し明細書を作成する作業。29～30日で梱包作業実施。1,228kg、50個。

7.4 別送品を通関業者へ引き渡し。

7.7 合同家族会が高田馬場シチズンボール会議室で開催された。その後、都合のつく隊員は山森宅で「イ族」の映画をビデオ鑑賞した。

7.8 合同壮行会が池袋「東方会館」で開かれ約260名が参加した。

7.8 中国登山協会へ梱包表とB/Lを送付。

7.26 中国登山協会へ費用残金25,062.60ドルを送金。森谷、居川、林の自由行動について許可申請。

8.26 中国登山協会からビザ用招待状届く。

8.28 中国登山協会から持参するトランシーバーの明細について照会あり回答。隊員へ最終打合せ事項を発送。

8.30 北京の日本大使館と外務省へ願い書等を送付。

8.28 中国大使館へビザ申請。

9.4 ビザ受領。

9.9 夜H A Jルームで最終打合せ。宿泊。

9.10 J A L 781便にて出発。

東京定例集会出席状況

	氏名	2/13	3/12	4/2	4/25	5/15	5/22	5/28	6/5	6/12	6/23	6/26
1	山森	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
2	中川	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	居川	×	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○
4	河内	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×
5	千葉	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	高見	×	×	×	○	×	×	○	○	×	○	×
7	川上	○	○	×	○	○	×	×	×	○	○	×
※	須藤	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	×

◎関東在住者による集会

2. 渉外と隊の構成

1988年1月。中国側の事情で棚上げ状態になっている「ナムチャ・バルワ」について見通しをたてるため稲田、新貝と私は北京を訪れた。その時の感触は中国一流のものであった。それでも想いを捨て切れない私は、翌年シャラリへ向かった。大きなE X Pを抱えては事に当れないからであった。しかし、シャラリから北京に来てみた感触はかんばしくなかった。

その時、当然のようにミニヤ・コンカが胸を横

切った。帰国後、今度はためらわずにミニヤ・コンカの申請に踏み切った。年が明けて山田昇の一周忌の席上でははっきりとナムチャ・バルワが遠のいたことを知った。

気持ちの整理がついた時、中国側へ許可の督促を行った。ほどなく北京から91年の許可通知を受け取った。基本的なタクティクスを頭に描き、今度はどんな仲間とめぐり逢えるのだろうか？と期待しつつ募集を開始したのは、'90年8月ヒマラヤ



▲5月の合宿の舞台は加賀白山



▲7月7日には盛大な壮行会が举行された

226号誌上であった。

フタをあけてみると、以外に若い層の応募が多かった。又、高所登山の経験の無い、或いは浅いメンバーが多かった。当初からシャラリの仲間である松館、ラブチェ・カンの仲間である須藤に参加を要請していたのであるが、この応募状況から見て、この2人の参加を確実にする必要があった。

HAJのEXPは、よほどのことがない限り参加者をセレクトする必要はない。EXPが特殊な事情で成立するケースも時たまあり、この場合はある程度片寄った選択をしなければならないが、公募の場合は、応募した本人が極端に長期密閉社会に適応できない者以外は参加を認める方針である。勿論、初めての高峰登山であることが問題になることはない。誰もが必ず「初めて」である時があるからである。

しかし、初めての者が経験の深い者と同等に能力を発揮できる保証がないことも又、知らなければならぬ。「参加する」ことと、「能力が充分発揮できる」こととは違うのである。

特に極地法を用いて頂上を陥そうとする場合においては、この役割分担に対する基本的な考え方を納得していなければ楽しくない。

隊を運営する私からすれば、経験者揃いの方が数段楽であり頂上も確実に計算できる。しかし、隊員が応募してくる状況が常に一定しているとは限らない。今回の様に若干層が多く応募してきた場合には、それなりのEXPを組むことが運営側の任務と考えた。

応募してきた隊員は、隊がどの様に構成されるか知らないで来る。公募隊の唯一の不安はこの辺にある。だが、人間いつかは出合わなければ同じ釜の飯も喰えない。問題は如何につき合って自分に負担のかからない関係になれるかであろう。

極地法は難しい。事前の準備もさることながら、現場において刻々と変化して行く戦力と戦場に素早く対応するには、普段の基礎状況の把握が欠かせない事なのである。この辺りを十分に理解していない岳人が多い。それでも高峰登山はでき頂上に成功することはできる。

今回縁あってこのEXPに集った若年層には、極地法を習い、その長所と短所を学んでもらうこ

とにした。そのためには、戦略と戦術を担当する運営側は気心の知れた者が望ましい。松館を副隊長に、須藤を登攀隊長に据えれば、このメンバーが思う存分力を出して、ヒマラヤン・クライミングの厳しさと楽しさを垣間見れるだろう。仮に結果が登頂成功とならなくとも、これからのクライミングの中にきっと今回の基本的なことが役立つに違いない。その中から第2の山田昇が生れるぞ。

残念ながら須藤は参加できなかった。しかし、自ら望んで出発までの準備活動に参加し、合宿から食糧計画の推進を果してくれた。参加した若い隊員にとっては驚ろきであったに違いない。

国内での物資調達に当っては、特に初陣である森谷の働きが大であった。1人名を挙げて敬意を表したい。

御協力いただいた各社には、礼を失しないように打ち合せを行ったつもりである。我々にできることは現場からの数少ない報告、帰国後の挨拶とつたない写真の提供であったが、これをもって御礼に代えさせていただいた。（記：山森 欣一）



▲コンカ上空に現われた雲

3. 登 攀

・計 画

ベースキャンプ以後の登攀に充てられる期間は、9月21日から10月30日までの40日間であった。この日数で5つのキャンプを出して標高差4,056mを登るのである。市川隊の記録を参考にすればキャンプを6つ出さなければならない。そうすると当然登攀日数を更に10日間ほど見込まなければならなかった。

北東稜を攻撃する上で最大の難関は、北東稜の科尔(5,900m)から上の長大な稜線である。ここから標高差は1,656mであるが、写真でみる限りは標高差に比べて実登攀距離は相当長いと判断した。

従って市川隊が北東稜の科尔下に設けたキャンプ(今回のHAJ隊のC2')はとぼして、科尔に第3キャンプを作り、北東稜上に2つのキャンプを出し、アタックを確実なものにしようと考えた。この段階では、仮に科尔下にキャンプが必要になった場合、或いは、予想以上に下部で時間をとられた時には、科尔上のキャンプを1つにすることも考えた。標高差とルート上の技術的な面からこれは可能とも思われたのである。但し、科尔上のルートの長大さだけは、いつも頭の中から離れなかったのである。

こうして、最大8名の登頂、アタックは最大3回とする登攀計画ができた。

もう一つ重要な事は、約10年前に北東稜に挑戦した北海道と市川両隊の登攀能力と、現在の我々のメンバーの登攀能力の比較があった。既に知られている様に、81年と82年の両隊は、当時の常識でもとてもまともな極地法を展開したとも思われなかったにもかかわらず、結果的には頂上直下に肉薄している現実があった。特に北海道隊のケースは12人ものメンバーが、正気では考えられないような登山を展開して頂上へ王手をかけたのである。

市川隊にいたっては、科尔上からほとんどビバークを続けて登り続けており、高所順応の面は全

く放棄したアタックを敢行している。

このような前例を検討し、現在の我々の持っている登攀能力と、高所登山に関するノウハウを発揮すれば、キャンプ配置が多少現場で違ったとしても40日間の期間で5つのハイキャンプを出せば登頂は可能であろうと判断したのであった。

若年層が多くを占め、高所登山経験はあっても、その頻度がずば抜けて高い者は少なかった。このため、極地法の習熟を徹底させるべく、ローテーションの作成に当っては、ゆったりとし、更に荷上げの負荷も比較的少いことを考えて予定を組んでみた。

その結果、4人3パーティ中、高所経験の無い者を主体としたCパーティは下部での荷上げを担当し、登攀能力が高く、高所経験を有する者をAとBの2つのパーティに配置し、適宜ルート工作を実施することを考えた。

・結 果

ルート偵察の結果、ほぼ市川隊ルートをとることとした。氷河からいきなり岩壁帯となるが、ここは市川隊が「イグアナ」と名づけた箇所であるが、幸いにも81年にスイス隊が拓いたルートに入ることができ、「イグアナ」と呼称はしたものの市川隊のように苦しまずに済んだ。ただ傾斜の強いユマーリングに慣れていない隊員にとっては、それなりに苦痛であった。

第1キャンプ、第2キャンプと市川隊キャンプ跡(呼称は違う)と多分同じ所であった。そして第2キャンプから北東稜の科尔を目指したのであったが、やはり雪原が長く、後半は科尔下にキャンプを設けざるを得なかった。そして、「エイメルンゼ」と市川隊によって名づけられた、北東稜の科尔へ抜ける凹状部分のルート工作に手間どったことは、事前に予想していなかった事態であった。確かに松田宏也氏の表現には、このルンゼの模様を「煙草のけむりもはい上がらぬ」と形容されていたが、それほどのことはあるまい(傾斜の感覚)と予想していた。

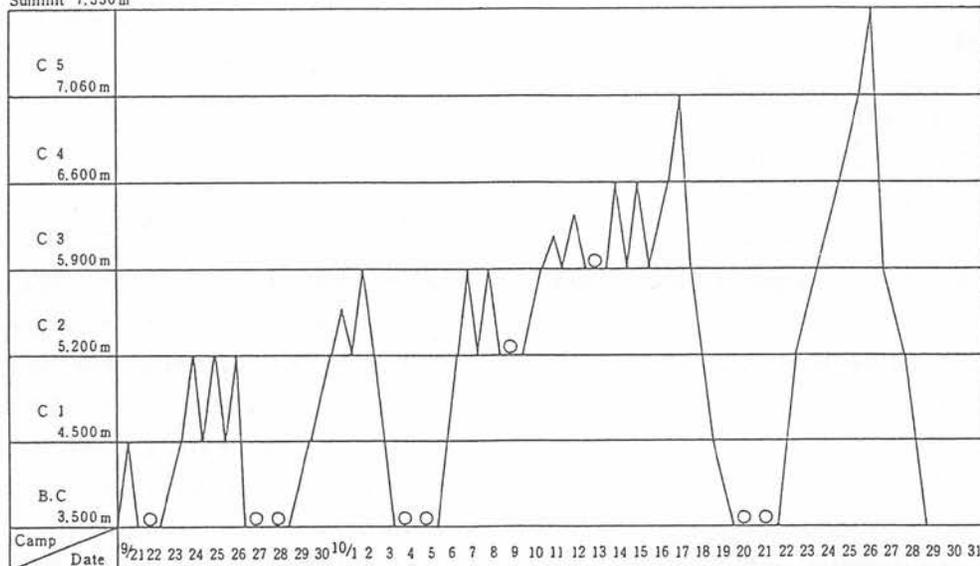
このルンゼの状態は予想していた以上に積雪の状態が不安定だったことが手間どった原因であった。

北東稜科尔上は、側壁をルートにとることによ

登山行動計画

- * 4人一組とし3チームを基本とする。不調者が出た場合は3人一組とする。
- * 技術的にはC2からC4が核心部となるが、状況を見てC2をABCとする。
- * 頂上アタックは、最大3回合計8名を予定する。
- * 頂上アタックは、ピバーク用具一式を携行し、オーバーシューズ着用とする。

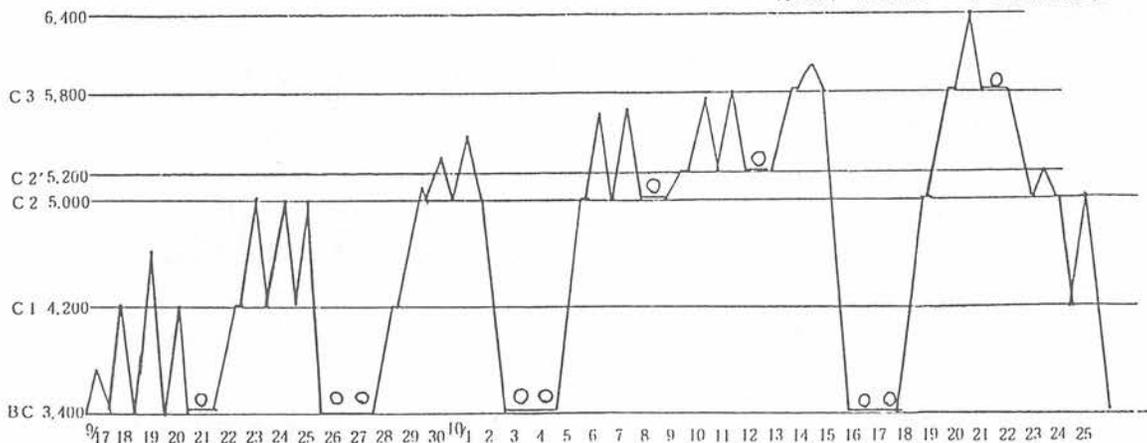
Summit 7.556m



登山活動報告

居川隊員の行動表

稼働率 75.6% (○印は休養)



ってスピードを上げることが出来たが、予想外の「風」によって行動の制約、ルートの変化があり、残念ながらそれに対応する総合力が残っていなかったことにより日数はあったものの登頂を断念したのである。

・反省点

10月5日に第1回目の計画変更を行い10月22日～23日をアタック日とした。10月8日にはC2'を作らざるを得なくなり第2回目の計画変更を行い10月26日～27日にアタック日をズラした。更に10月14日にはアタック日は26日～27日と変わらないもののアタッカーを2名に縮小する最終計画変更を行った。

現場において計画を変更することは、現実には数多く見られることである。我々の行動計画は、あくまでもベースキャンプを中心とした「山」を作った上でのものであり、スタンダードな極地法である。従って計画変更の際にも極力この方針を変えずに行い、登攀用具、食糧などの残数のチェックをも合わせた上で変更して行ったのであるが、最終変更時には登山期間が押し迫っていることもあって、アタック前のベースキャンプ休養を取り止め第3キャンプでの休養に切り換えたのであった。

高峰登山の死亡事故の中で、その原因が高度の影響を受けたためと思われるケースでは、そのほとんどにアタック前の「ベースキャンプ休養」がないことを訴え続けてきている私としては、これは相当に覚悟のいる決定であった。

キャンプ建設状況

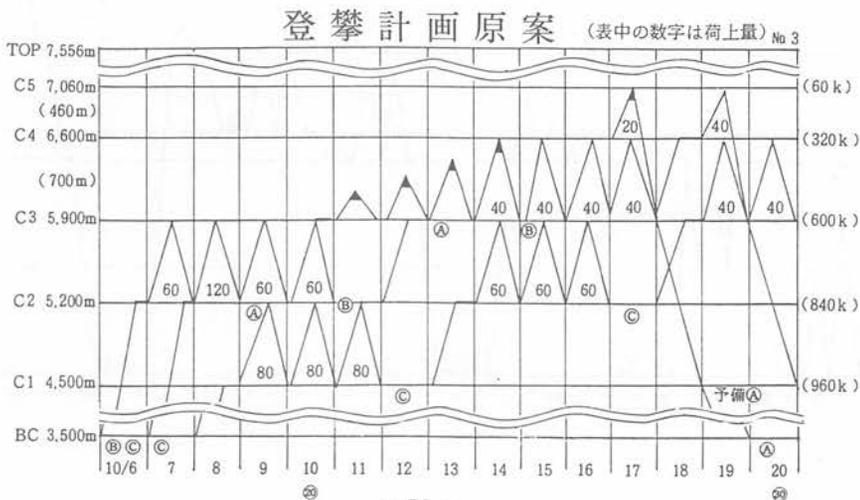
	計	画	実	績
BC	9/18	3,500m	9/16	3,400m
C1	23	4,500	22	4,200
C2	30	5,200	29	5,000
C2'	—	—	10/9	5,200
C3	10/10	5,900	13	5,800
C4	16	6,600	—	—
C5	25	7,060	—	—
登頂	26	7,556	—	—
到達	—	—	10/20	6,400

特に登山期限が迫っていると云うことは、とりもなおさず「追い込まれてしまった」状態を反映していることであり、その事はこれまでの登山展開が計画に沿って行われていないことを物語っている。ほとんどの場合それはまた、何らかの欠陥がチームの中に生じている証左でもある。

このような観点から、高峰登山においては「キチンとした山」を作れない時はアタックを諦めるべきであると主張し続けてきたのである。

このような事を熟知している私でさえも、現場においては、最前線とチームに対して妥協する場を見つけようとするのである。今回は頂上へ肉薄できなかったため、幸か不幸かこのような計画変更（アタック前のベースキャンプ休養なし）の弊害の結果を知ることが出来なかった訳であるが、次への自戒を込めて反省点として報告しておきたい。

(記：山森 欣一)



4. 装 備

ミニヤ・コンカを、12人のメンバーで秋に8名の登頂を目指す。という課題に対して、装備係として用意した答えの要旨を別に記す。我々の回答は、満足なものではなかった。

<幕営具>

上部キャンプは基本的に2名で1張と考えた。1パーティー4名で2張となる。C 2' の設置によりテントの総数が心配されたが、1パーティー3名で1張のテントとすれば、ファイナルまで足りると判断された。期間の後半、テントポールの破損、本体が裂けるなどトラブルが続いた。強風という事もあったが、テントそのものが消耗していたという事も大きかった。今後、現地デポ品の管理も重要な問題である。BCではマジックマウンテンのBCタープをメステントとして使用した。ハイビシートなどと組み合わせて工夫をして、快適であった。BCでは発電機により電灯を点した。ただ故障もあり、E P I ランタンと併用した。

後半、上部では風に悩まされたが、ブロック切り、幕場の整地などにスノーソーは有効であった。中国製のローソクは消費が早く、日本から持っていった方が良くもしいない。ハイビシートもなにかと有用で、もっと多く持って行くべきであったと反省している。

<炊事用具>

高所登山において、水分補給は重要な仕事である。その為に、コッヘル等は大きめの物を、又、水をためておく為のポリタンなどは多めにもっていた方がよい。今回どちらも不足気味であった。

今回の登山では、BCでも隊員が調理した。12名、中国側スタッフが上がりて来た時は15名分を一度に調理するというのは大仕事である。BCでの炊事用具はけちらず、大目に持って行くのが良いと思う。といって使うかどうかかわからないものを持って行け、というのではなく、鍋、フライパン、まな板、包丁など、大きなものが重宝する。中国製の洗面器(?)など、なんにでも使え、なかなか良い。

<登攀具>

今回の固定ロープの総量は3,500 m、70ピッチである。ルートの大半を雪と考えていたので、支点としてスノーバーを大量に持参した。結果として、6,400 mまでしか行けなかったのも、ロープ、ピトン類も余った。しかし、アタックまで進めば、どちらも不足したと考えられる。ルートは予想通り雪が主体であったが、積雪が少なく、不安定なものであった。そのかわり、岩に多くの支点を得ることができた。ロックハーケンはもっとあって良かった。コの字が最も有効である。アイスピトンは使用していないが、さらに上部に行けば有効になったと思う。ロープでは、イグアナの1P目とエイメイルンゼの17P目それと、二ノ沢の直上以外はPPで十分であったと思う。この3ヶ所はナイロンをダブルで使用した。消耗、落石による切断なども考えた方がよい。

C 1 ~ C 2 ~ C 2' の間は、広いガレ、雪原であり、標式ポール、赤布はもっとあった方が良かった。知人より頂いた蛍光色の赤布は、とても有効であった。竹は現地で手に入る。

<酸素>

BCにボンベ2本、上部各キャンプにミドリ安全のO₂バックを準備した。現地で、ファイナルへの配置は見送ったが、他の全てのキャンプに2ないし3時間分を荷上げた。遠くの医者より近くの酸素である。もちろん、その使用方法、荷上げ管理は徹底しなければならない。

<光熱器具>

上部キャンプをE P I、パワーチャージャーを12個用意。BCではホエーブスをガソリンで使用した。E P Iの使用量は、C 2までを1泊4人で3個、C 3以後を1泊1人1個と計算した。C 1、C 2で水が得られた為に、C 2'が増えたにもかかわらず、E P Iは余った。その分、BCでのガソリンが不足して、後半はE P Iを使用した。ガソリンコンロはどうしても手間がかかり、又、故障もあるのでBCにも始めからE P Iコンロを用意すべきであった。中国製のガソリンの質にも問題があるのか、BCでのガソリンの使用量は予想の倍近かった。ホエーブスも故障が多かった。ガソリンを運搬する容器も日本からしっかりしたもの

のを用意した方が良い。EPIコンロには、パワーチャージャーを装着して使ったが、結果は良好であった。ボンベ内のガスをキチンと使用出来る。今後とも必携であろう。

<その他>

今回のルートはとても長く、標高差があった。その為に装備の傷みがひどく、修理用具・裁縫用具など、キチンと用意するべきであった。あってもBCに置きっぱなしでは役に立たない。

現地購入の事だが、成都の街は考えていたより物資が豊富である。いろいろな物が手に入りそうである。ただ、何時でも絶対に手に入る保障があるかと言えば否であろうと思う。そうした事情は、1度や2度の経験では判断出来ないところであろうが、インドやパキスタンに比べると、中国はまだ不安が多い国だと感じた。高い都市滞在費を考えれば、日本から持って行った方が多い場合が多い様だ。もちろん、中国に詳しい隊員が居るなら別である。

<パワーチャージャー>

I. 資料

使用期間：1991年9月～10月

キャンプ配置：BC 3,400m (氷河上)
C 1 4,200m (支稜上)
C 2 5,000m (氷河上)
C 2' 5,200m (氷河上)
C 3 5,800m (雪壁上)

使用器具：EPIガスコンロ 18個(BP型)
同 ボンベ308個
同 PC 12個

II. 報告

ミニヤ・コンカ登山では、C5を最終キャンプ地と予定し最終的には、EPIコンロの配置をC3～C5各4個としてPCの使用を考えた。現地では荷揚げの順にC1からPCを装着して使用した。

使用した感想を単純に報告するならば、「PCを持参して良かった」、ということになる。PCの使用により、低温による火力の低下がなくなり、ボンベ内のガスを無駄なく最大限に使うことが出来た。

今回の登山では、上部キャンプのゴミは全て

回収した。その際、使用済みのボンベはBCでつぶしてゴミ処理能力のある成都まで持ち帰った。どのボンベもそのほとんどを使い切っていた。ただ、幾つか気がついたことがありますので以下に報告します。

1) 火力との関係

高所で、ボンベが冷えた状態で使用すると、なかなか最大の火力を得る事ができない。そこにPCを装着しても、炎が小さいのでPCがその機能を発揮出来ない。ある程度の火力がないとPCは機能出来ないのではないだろうか。

2) 装着ポイント

日本ヒマラヤ協会(HAJ)では、毎年複数の登山隊をヒマラヤに送り出している。そのため、毎回装備を日本に持ち帰らず、それぞれの国の都市に装備を保管している。登山隊の規模は、その都度違うので一定の装備については、足りなくなると不足分を補充している。従って、今回ミニヤ・コンカ隊が使用したEPIコンロも、全てBP型であったが、年式は様々であった。そのためか、PCをボンベに同じ様にセットしても、炎との距離が悪く、うまく機能しない事があった。

3) 型

これは、単に器具としては特異な型をしており、パッキングがしにくい。

* 1) & 2) については、使用する側がそのシステムを理解していれば、解決できる問題であるが、隊員の中にはPCの故障、あるいは、その性能への否定的見解へと結論を下す者もいた。

* 1) については、何等かの方法でボンベを暖める、あるいはボンベを冷さないという事で解決するし、2) は、PCの位置を少しずらす事によって事足りた。

以上、ミニヤ・コンカ登山でのPCについての報告です。PCの使用は、前回の登山の時も考えたのですが、その性能を疑問視する声も聞かれました。今回使用してみまして、現時点で、パワーチャージャーは、かつての「あった方が良い装備」から「なくてはならない装備」になったと考えます。

<個人装備>

コンカ登山において、個人装備として隊員に意志の統一をはかったのは以下の3点である。

オーバーシューズ

今登山の ATTACK は10月末の予定であり、ビバークも考えた。したがって、隊員全員に ATTACK 時のオーバーシューズの使用を義務づけた。もはやオーバーシューズも、国内で使用する装備ではないので、ほとんどの隊員が購入となった。ワンタッチ式のアイゼンが使用可能なものとして、ICI 石井スポーツの製品を係としては推薦した。靴の種類によっては、ワンタッチ式アイゼンの使用に問題があるものもあるので、早めの注文が必要である。又、オーバーシューズを着けていれば、靴に雪も付かず、テントシューズの替りにもなり、もっと積極的に使ってもよい装備であると思う。

ヘッドランプ

全隊員にベツルのヘッドランプと、リチウム電池を購入してもらった。アルカリ単三電池では、消費量が大変なものであるし、低温での性能の低下もはなはだしい。リチウムならばそれも防げると考えた。5本パックの100時間用のリチウム電池を購入し、実際、コンカ登山、47日間この電池パックのみで充分持った。これは他社のリチウム電池のヘッドランプより、経済的にも優れていると思われる。最近言われているヒマラヤのゴミ問題に 대응する為にも、山に持ち込む物資は少しでも減らした方が良く、荷上げも楽になる。多少の出費になっても、登山者の側もこおした問題に何等かの形で取り組んで行かねばならないと考えた次第である。故障もなかった。

テルモス

テルモスを個人装備として、各自用意してもらった。隊員各々、規格はまちまちであったが、0.7ℓ以上あった方が良かったと思う。

以上の3点以外、一応のリストを隊員に提示して、後は各自の判断に任せた。今回の登山期間中、それ程気温も下がらず、下部の標高も低かった事もあり、C2までは雨具で充分であった。ストックはこのルートには有効である。又、ガレ場が多く、靴、スパッツなどの傷みが激しかった。靴はC2までとそれ以上とで、使い分けている隊員も

いた。スパッツは2個あった方が良かった。

中国に入国したのが9月半袖で十分であったが、帰国の際、11月の北京はとて寒く、風が身にしてみた。その辺のところも準備をおこたらない方がよい。

■装備リスト

<C5>

品名	数量
アルパインライトテント 2人用	2
ペフマット	2
ツェルト	2
ローソク	2
PPロープ (8φ×50m)	8
スノーバー 60cm (テント用8)	16
O ₂ バックホルダー&マスク	1
同 キャンドル (30分用)	4
EPIコンロ	4
同 パワーチャージャー	4
同 ボンベ (1人1泊1個+予備2)	16
コンロ台 (ベニヤ台)	2
メタ (20本入り)	2
コッヘル (3人用)	2
ポリタン 1.5ℓ	2
トイレットペーパー	4

<総重量 41.93kg>

ファイナルキャンプには、4人が3回 ATTACK をかけられる用意をした。又、ATTACK はビバークも考えた。ルートは雪なので、メインロープは用意していない。

<C4>

品名	数量
エスパーサミッター 3人用	2
ペフマット	2
ツェルト	1
スノースコップ	1
スノーソー	1
ローソク	2
スノーバー 60cm (テント用8)	20
PPロープ (8φ×50m)	10
ロックハーケン	5
O ₂ バックホルダー&マスク	1

O ₂ パックキャンドル (30分用)	6
E P I コンロ	4
同 パワーチャージャー	4
同 ボンベ (1人×1泊×1個)	20
メタ	2
コンロ台 (ベニヤ板)	4
コッヘル (3人用)	2
ポリタン (1.5ℓ)	2
トイレットペーパー	4

<総重量 49.22kg>

C4は幕営適地が見出されるかどうか不安であった。少々重いが頑丈なテントを選んだ。又、整地用具も用意した。ルートは雪を予想した。

<C3>

品名	数量
エスパース4・5人用	4
ベフマット	8
ツェルト	1
スノースコープ	1
スノーソー	1
ローソク	8
スノーバー (テント用16)	31
PPロープ (8φ×50m)	8
ナイロンロープ (8φ×50m)	12
シュリング (6φ×2m)	40
アイスハーケン	15
ロックハーケン	5
ボルト	5
ジャンピングセット	1
O ₂ パックホルダー&マスク	1
同 キャンドル (30分用)	8
E P I コンロ	4
同 パワーチャージャー	4
同 ボンベ (1人×1泊×1コ)	105
メタ (20本入り)	1
コンロ台 (ベニヤ台)	4
ライター	4
コッヘル	4
ポリタン (2ℓ)	2
トイレットペーパー	25
ノート&ボールペン	1
修理具セット	1

<総重量 128.58kg>

C3は北東稜のCOLに置く事を予定し、ここへの物資の集結が登頂の必須条件と考えた。C4へのルートも、岩稜を予想してナイロンロープを主体とした。実際には岩稜をエスケープ出来たのでPPで充分であった。風が強い場所なので、スコップはもう1本あった方が良かった。

<C2>

品名	数量
マイクロドーム3人用	4
ベフマット	8
ツェルト	1
スノースコープ	1
ローソク	8
PPロープ (8φ×50m)	16
ナイロンロープ (8φ×50m)	4
シュリング (6φ×2m)	30
スノーバー 60cm	20
アイスハーケン	10
ロックハーケン	5
O ₂ パックホルダー&マスク	1
同 キャンドル	6
E P I コンロ	4
同 ボンベ (4人×1泊×3コ)	100
メタ (20本入り)	2
コンロ台	4
コッヘルセット	3
ポリタン 2ℓ	2
トイレットペーパー	28
ノート&ボールペン	1
修理具セット	1

<総重量 113.54kg>

エイメールンゼは雪のルートと予想した。間違いはなかったが、岩より支点を取る事が多かった。水が使えた。

<C1>

品名	数量
マイクロドーム3人用	2
ベフマット	4
ローソク	4
PPロープ (8φ×50m)	4
シュリング (6φ×2m)	10

スノーバー	5
O ₂ パックセット (15分用)	8
EPIコンロ	2
同 ボンベ (4人×1泊×3コ)	50
メタ (20本入り)	2
コッヘル	2
ポリタン (2ℓ)	1
トイレットペーパー	14

<総重量 49.28kg>

C1は土の上だった。水も得られたので燃料も予定を下回った。ロープも必要なかった。

<BC>

品名	数量
クロスターテント 8人用	3
BCタープ (マジックマウンテン)	2
ベフマット	20
ローソク	16
ハイビーシート	4
PPロープ (8φ×50m)	4
ナイロンロープ (8φ×50m)	4
シュリンゲ (6φ×2m)	10
ロックハーケン	5
ボルト	5
O ₂ ボンベセット	2
ホエーブス 625	6
同 パーツセット	1
ガソリン (炊事用40ℓ, 発電機20ℓ, ゴミ用20ℓ)	80ℓ
トイレットペーパー	25
夏天 6人用	1
発電機	1
圧力鍋	2
大鍋	1
フライパン	2
洗面器	6
ポリタン 10ℓ	1
カップ	15
おわん	15
ボール	14
しゃもじ	2
お玉	3
はし	15

包丁	2
缶切り	3
たわし	2
アルミホイール	3
サランラップ	3
タッパー	15
皿	13
マジックインキ	10
ガムテープ	5
カッター	2
PPバンド	1巻
同 ストッパー	多

<総重量 382.55kg>

<C2'>

C1、C2が予定の場所より低くなった為に、C3の手前にC2'を設けた。アタッカーを減らした事により、主に上部キャンプの装備をもちいた。

<その他>

トランシーバー	6台
アイスパイル	6本
竹ざお (赤布付)	50本
単Ⅲ電池	560本

竹は現地で調達。電池はあまった。

装備総重量 703.59kg

尚、現地デポの装備は、重量が不明だったので、それを多めに見積って計算した。実際はこの数字より重量は少なくなる。(記:中川 裕)



▲或る日のC2

5. 食糧

関東を中心に東北は秋田・青森、関西は大阪・京都までという広域メンバーで編成された隊である為、全員が同じ物を口に出来るかどうか、気になるところであるが、まず誰もが楽しく食べられる。比較的登山日数が長い事から、メニューの種類を多めにしパターン化する。食糧計算がしやすいように、主食4名/1日分(朝食・夕食)を1パック。行動食4名/1日分を1パックとしてレーション化する。休養日の昼食は行動食プラスし好品でまかなう。等を中心に考えながら準備を進めて行った。

主食や行動食の必要量は、隊長より出された行動計画の予定表を元に、BC入り(9/17)からBCを後(11/2)にするまでの47日間分を用意する事にした。そして、各隊員が手分けして調達に走り、各企業から程ほどの食糧を寄贈して頂く事が出来た。しかし、乾燥納豆(1.5kg)とF・Dカレーは国内で購入し、肉や生野菜、くだもの等は現地で購入した。(記:須藤 圭一)

※ 朝食A (サラダ定食 1,020g 4人1回分)

品名	単重量	数量	重量
アルファーマ	140g	4袋	560g
マッシュポテト	120	1	120
グリーンピース	90	1	90
シーチキン缶詰	90	1	90
漬物	120	1	120
味噌汁(即席)	10	4	40

※ 朝食B (ラーメン 910g)

ラーメン(即席)	100g	4袋	400g
モチ	50	8	400
ソーセージ	70	1	70
乾燥野菜	40	1	40

※ 朝食C (魚定食 940g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
魚缶詰	220	1	220

漬物	120	1	120
味噌汁(即席)	10	4	40

※ 朝食D (納豆定食 870g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
乾燥納豆	40	1	40
海藻サラダ	45	2	90
漬物	120	1	120
味つけ海苔	5	4	20
味噌汁(即席)	10	4	40

※ 夕食E (焼そば定食 1,100g)

焼そば(即席)	110g	2袋	220g
アルファーマ	140	4	560
マッシュポテト	120	1	120
グリーンピース	90	1	90
シーチキン(缶詰)	90	1	90
ワカメスープの素	5	4	20

※ 夕食F (ちらし寿司 1,062g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
ちらし寿司の素	42	1	42
漬物	120	1	120
マッシュポテト	120	1	120
グリーンピース	90	1	90
シーチキン(缶詰)	90	1	90
味噌汁(即席)	10	4	40

※ 夕食G (中華丼 1,410g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
中華丼の素	180	4	720
海藻サラダ	45	2	90
味噌汁(即席)	10	4	40

※ 夕食H (カレーライス 940g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
ジフイズカレー	150	1	150
海藻サラダ	45	2	90
漬物	120	1	120
ワカメスープの素	5	4	20

宿泊予定延人数 303人
 主食(朝夕)数 606食
 必要パック数 152パック(4人/1パック)
 ※宿泊人数は9月17日～11月2日で算出。

※ ハイキャンプ夕食F(五目ご飯 1,070g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
五目ご飯の素	130	1	130
魚 缶	220	1	220
漬物	120	1	120
味噌汁	10	4	40

※ ハイキャンプ朝食A(魚定食 960g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
魚 缶	220	1	220
味つけ海苔	5	4	20
漬物	120	1	120
味噌汁	10	4	40

※ ハイキャンプ夕食G(牛丼 1,320g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
牛丼の素	150	4	600
漬物	120	1	120
味噌汁	10	4	40

※ ハイキャンプ朝食B(ラーメン 910g)

ラーメン	100g	4袋	400g
乾燥野菜(ミックス)	40	1	40
もち	50	8	400
ソーセージ	70	1	70

※ ハイキャンプ夕食H(マーボーはるさめ 890g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
マーボーはるさめ	95	2	190
漬物	120	1	120
ワカメ・スープ	5	4	20

※ ハイキャンプ朝食C(ぞうすい 934g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
ぞうすいの素	8.5	4	34
シーチキン	90	1	90
海藻サラダ	45	2	90
漬物	120	1	120
味噌汁	10	4	40

宿泊予定人数	主食数	必要パック数	
C 4	20	40	10
C 3	102	204	51
C 2	114	228	57
C 1	68	136	34
			合計 152 パック

※ ハイキャンプ朝食D(納豆定食 870g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
乾燥納豆	40	1	40
海藻サラダ	45	2	90
味つけ海苔	5	4	20
漬物	120	1	120
味噌汁	10	4	40

※ アタックキャンプ朝食A(カラーメン 640g)

ラーメン	100g	4袋	400g
もち	50	4	200
乾燥野菜	40	1	40

※ アタックキャンプ夕食B(ぞうすい 814g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
ぞうすいの素	8.5	4	34
シーチキン	90	1	90
海藻サラダ	45	2	90
味噌汁	10	1	40

※ ハイキャンプ夕食E(カレーライス 940g)

アルファーマ	140g	4袋	560g
ジフィズ・カレー	150	1	150
漬物	120	1	120
ワカメ・スープ	5	4	20
海藻サラダ	45	2	90

宿泊予定人数	主食数	必要パック数	
12	24	6	合計 6 パック

※ 行動食A (860g)

カロリーメイト	80g	2袋	160g
チーズ	60	8	480
ハチミツ	30	4	120
あめ	100	1	100

※ 行動食B (700g)

ビスケット(A)	80g	2袋	160g
チョコレート	50	4	200
柿の種(小袋)	45	4	180
ドライフルーツ	160	1	160

※ 行動食C (760g)

ビスケット(B)	80g	2袋	160g
甘納豆	100	2	200
ゼリー	20	8	160
チョコレート	60	4	240

※ 行動食D (480g)

カロリーメイト	80g	2袋	160g
甘納豆	100	2	200
ハチミツ	30	4	120

※ 行動食E (480g)

ビスケット	40g	4袋	160g
チョコレート	50	4	200
ハチミツ	30	4	120

	宿泊予定人数	必要パック数	計	
C 5	12	3	} 8	合計 158 パック
C 4	20	5		
C 3	102	25	} 71	
C 2	114	29		
C 1	68	17		
BC	316	79	79	

ABC=BC、C1、C2、C3各キャンプのメニュー

DE=C4、C5各キャンプのメニュー

■現場からの食糧報告

「テイクインテイクアウトの実践」これは今回ミニヤ・コンカ隊に果せられた1つの試みであった。そして、その持ち込まないという主旨に従えば、登山活動上不可欠な装備や燃料を除くと、最もゴミになり、かつそれを防ぐことのできる可能性を持っているのは食糧ということになるだろう。

今回はそうした事を背景に予備食はなし、全ての食糧を計画通りに消化できる様にレーション化し、1回ずつにパックしておいた。これは口にすることは易しいがなかなかたいへんな作業である。おそらく国内山行ならば誰もが経験する作業を海外登山にもやろうという事である。

とにかくそうした作業の結果が現場でどうだったかという事を報告したいと思う。

今回、私達はBC食を含む全ての食糧をレーション化し、数種のメニューのローテーションという形でやる事にしていた。これは予備食なしとするためには計画を重視せねばならず、無駄なものは持ち込まない一つの手段と考えた。しかし、これは結果的に見て上部キャンプは良いとしてもBC食まで画一的というのは、少々つらいものがあると言ってよいだろう。BCは休養に下る場所であり、やはり上部キャンプでは食べられないものがほしいと思うのが人情というものだろう。また計画通りという事で遊びの部分が少なく、とくに3,400mの高さのBCでは食欲が落ちる事もなく、休養日などには不足を感じていた者もいたはずである。とにかくBC食に関しては課題があると思われる。多くの料理に利用ができかつ簡単で旨いもの、これは1つの理想だがまだまだ工夫の余地があると思う。

今回、あらかじめ予想された食事内容のワンパターン化を少しでも緩和するため成都にて野菜類を中心に約80kg程度の食糧の購入を行った。温暖で多湿の成都では野菜が豊富で、質も良くこれはBC食に変化を加える上で非常に役に立ったと思う。ただ日本から持参した香辛料が少なく味つけが単調にならざるを得ず、その点は反省すべきだろうと思う。とくにコショウが無く、日頃は気にはならないこんなもの1つ無いだけで随分不自由を感じたものだった。また少しばかりの贅沢を言

えば、せっかく生野菜があるのだから、生みそとだしが十分にあれば、BCでは旨いみそ汁ぐらい作れただろうと思うと残念である。

各々の食事内容に関しては人の好みというものあるから一概には言えないが、朝食はめん類が人気があった様だ。これは旨いとかまずいにかかわらず、短時間で作れるという利点がある。また夜間の脱水等で朝はのどが唱えているというものもあるかもしれないが、朝に関してはローテーションはほとんど維持できず、前半でめん類はほとんど食べつくされてしまった。こうした点から思うのは、朝食にはあまり種類は必要ないのではないかという事だ。極端に言えばめん類の種類を変える程度で良いのではないかとも思った。

食事の量に関しては、パーティーで1つのレーションという形のため、4人で4人分のパーティーと3人で4人分のパーティーが出来てしまい、4人で4人分のパーティーでは少し不足していた様だが、一般的な登山隊の量からすれば多い方かもしれない。ただ高度3,400mから6,000m前後で行動していたのだから、これはネパールで言えばほとんどBCの高さと言う事からも、食欲が落ちないのも当然と言えるだろう。

個人の好みが違う以上完璧な内容にするのは不可能である。ましてや多くの企業からの温かい寄贈に頼っているからには難しいのは直更である。

今回BCを撤収した際に残った食糧は1/2サイズのプラパール1つ程度。これは「テイクイン・テイクアウト」の主旨からいって十分に合格点と言えるものだろう。そしてこれは準備での計算の賜物と言って良いだろう。

私は個人的にはしっかり太らせる見込みがあるならばもっとゆとりのある量をもっていても良いと思っている。しかしこの結果が示すように私達は半プラパール1ヶしか無駄な食糧を持っていかずにすんだという事、これは経済面でも十分に還元される訳だから、食糧に関する計画性という事も大切にしていける事だろうと感じた。

そしてその計画の中にかにうまくゆとりを持たせるかが、食糧を担当する者の手腕という事になるのだろう。

現地購入品リスト

品名	単位	値段(円)	評価
ジャガイモ	1kg	0.35	良
玉ねぎ	1kg	0.50	良
キャベツ	1kg	10.50	良(大きいものが多い)
にんにく	1kg	0.10	良
卵	1kg	4.60	良(Mサイズくらい)
粉ミルク	500g	15.35	良(ネスル)
レーズン	1kg	4.00	良(枝がついている)
乾し肉(牛肉)	200g	2.75	良(麻味つきからい)
塩	500g	0.34	良
食用油	500ml	15.88	良
しょうゆ	500ml	2.65	良(少し濃い)
(内容器代)		(0.80)	
ローソク	1本	0.25	細い、2時間くらいしかもたない
箸	10膳	0.74	良
洗濯石鹼(粉末)	500g	2.00	
電池単2	2コ	0.97	
やかん	4ℓ位	18.42	十分使えるが弱い
りんご	1kg	2.60	良(小つぶ)
粉末オレンジジュース	500g	11.10	好評
フルーツビン詰め	1kg	2.05	
(黄桃・白桃)	}	}	
(パイナップル)	1kg	4.94	
(杏など)			

力車は10分くらいで約5円 1元⇒25円

卵は24kgで1ケースで箱代は別に10元とられた。

現地食糧はほとんどが良質で、好評であった。ただ、しょうゆは少し濃いので薄めて使用しなければならなかった。

日本で必要な生活用具はほとんどそろうと言ってもよいだろう。成都のデパートには相当な商品が並んでいる。野菜は温室栽培などはほとんど無い様で季節のものが主になるだろう。

私達の欲しかったもので無かったのは、日本風のコショウ、人参くらいのものだったと思う。成都での十分な時間がとれる隊ならばかなりをそろえる事ができるだろう。ただしインスタント・レトルト食品はほとんど無く、インスタントコーヒーがある程度だと考えればよい。卵24kgをどう

して無事に運ぶかが1つの問題だったが、予定していた馬での運搬ができず、ポーターが運ぶことになりほとんど無事にBCにたどり着いたのは幸いだった。

成都では十分な食糧買出しが可能だが、今回のアプローチの最終集落、磨西の町でも相当な種類のも物が手に入る。あまりまとまった量は無理だが、野菜などは相当に豊富のようだった。

今回、皆が出発前から期待していた山のような松茸はなく残念。帰路、康定にてスープで食べれたのが唯一の機会だった。この周辺には松茸山は

6. 梱包・輸送

中国登山において、隊荷を日本から発送してしまえば、中国国内での輸送は中国側がやってくれる。そこは他のヒマラヤ諸国より楽なところであろうか。HAJは成都に主要な装備をデポしてある。我々も日本から送った荷物の他に、このデポを使用した。その為に、成都2日間再梱包の時間を持った。隊荷は1部の例外をのぞいて、全てプラパールボックスに梱包し、輸送した。日本から送った物も含めて破損、紛失はなかった。

BCまでの輸送は、磨西までを車、そこから第3営地まで馬で2日、第3営地からBCはポーターによる2日間、もしくはそれ以上の日数でのピストンを予定していた。ところが、実際に磨西に着くと、馬ではなく、ポーターによってBCまで2日間で行けるということがわかった。なんと、日本を出てから実働4日目にしてBC建設が可能なのである。ハイローコー氷河に登山隊が入るのは10年ぶりの事であり、中国側も情報が不足していた。噂に聞いた観光開発も、我々の予想を上回るもので、磨西-ハイローコー氷河間の旅遊路はまるで上高地-濁沢間の様に整備されていた。

ハイローコー氷河のアイスフォールを見学する為に、ガイドに率いられてひっきりなしに観光客は登って来ていた。このガイドというのは磨西の人間である。又、アイスフォール見学には、ガイドの同行が義務付けられている。以前に死亡事故があった様で、それ以後の措置であるらしい。こ

少ないのだろうか？ ベースキャンプからの再々の松茸コールに大本営の中国スタッフも随分苦勞していただろうと思う。

今回のハイローコー氷河のBCは観光名勝の真中にあり、大本営のある第3営地から数時間という距離にある。そのおかげで、登山期間中度々、大本営から野菜や肉を上げてもらう事ができた。

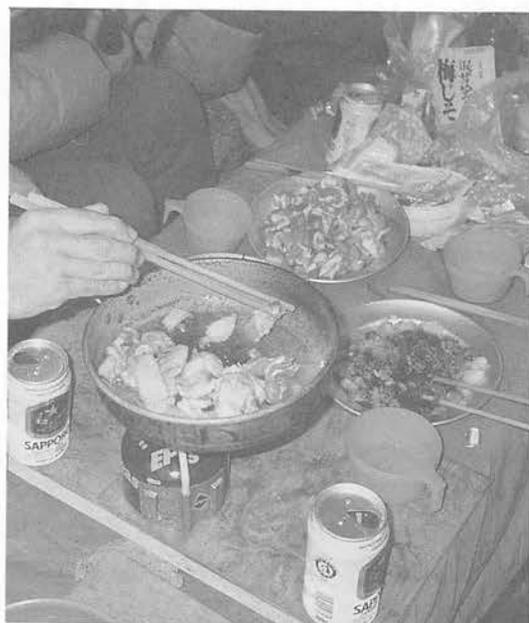
これは他の地域の山とは違い非常に便利でよかった。ミニヤ・コンカという山は実は観光という意味ではこれほどに町に近く親しまれている山なのである。

(記：林 雅樹)

の事はすなわち、我々のBCは、彼等の生活圏の内側にある。ということであった。磨西のポーターは、インドやネパールのポーターに比べれば、とても優秀であった。ガイドなどにより情報が多くもたらされているという事もあり、クレバスの開いた氷河をどんどん進んでいった。一応1人25kgという決まりらしいが、ダブルで担いでいる者もいた。

ミニヤ・コンカは、例外的に輸送が楽な山である。

(記：中川 裕)



▲ベースキャンプの焼肉パーティ

7. 医療

今回のミニヤ・コンカ隊は平均年齢 32.5 歳と最近にしては若い隊員が多く 12 名中 9 名の隊員が高所経験者で構成されており、相当にパワフルなメンバーが集まったと言ってよいだろう。また最近ヒマラヤの高峰登山にも中高年世代が多くなっているという現状からすれば恵まれていたと言っても良いだろう。しかしこれは反面、お互いのライバル意識などからオーバーワークになりやすかったり、概して自己管理がうまくいかなかったりする事も予想されたので、自己管理の意識を高めると共に、未経験者には高度障害の症状や重篤な高山病というものを知らせてもらうために都岳連主催の高所登山研究会に全員で参加した。とくに初めての人にとっては非常に良い勉強になったと思う。

実際の登山にあたっては、経験の多い者を優先的に先行させ、経験の少ない者、体調に不安のある者は下部での荷上げを中心に行動し、十分な順化を得るというタクティクスで行動し、終盤で 1 名が不調を訴えて BC へ下りた他は、軽いむくみや頭痛程度の軽症があった程度で、ほぼ問題なしであった。

これは 1 つに北東稜は非常に長いルートで BC も低く、一度に高度をかせぎにくいという地形も大きく影響しているものと思う。そういう意味で高所登山が初めての隊員にとっては順化に関しては楽な山だったかもしれない。

各隊員には過去の登山隊の経験により、健康管理のために体調チェック表を配布し自己管理に役立ててもらった。また風邪の予防、凍傷の予防という目的で、ビタミン E + C 剤と総合ビタミン剤を毎日、全員に服用してもらった。風邪の予防は高山病の予防上不可欠と考えたからである。皆さすがに体調には気をつけていたためか、配布したこれらの薬のほとんどが消化されていた様だ。

中国はネパールやパキスタンと比べると衛生環境は相当に良い。そのためアプローチで下痢に悩む隊員も無く、全行程で薬品はあまり使う場がなかった。

今回、医薬品は隊員の中に薬剤師、看護師がい

たので、その関係者より寄贈して頂き相当の量を集める事ができた。当初看護師がいるという事で、点滴セットと注射剤を持参してはどうかと考えていたが、緊急の場合での判断が難しいのと副作用を考慮すると危険というドクターの指示により内服剤を中心にし、万一の場合に備えて電解質液の点滴セットのみ持参した。結果として誰ひとりそれらの世話にならずに済んだので、無駄なようにも感じるが緊急用の酸素と同じで、ある程度は仕方ないだろう。薬品の量はその山の位置、つまり医療施設からどれくらい離れているかという事とその構成隊員の質によって決まってくるものだが、今回訪中が初めての者がほとんどで、また高所経験者が多いとは言ってもまだ経験が浅い者も多いという点を考慮して相当量の薬を持参した。結果として不調者も少なくほとんど使わずに済み、量的に過剰すぎた点は反省すべきだと思っている。現地の状況をもっと考慮したら量は相当に減らす事ができたはずだからである。

薬品や緊急用酸素というものの現場での配置というものは常に頭を悩ませられる点である。今回及び私の数少ない高所登山の経験から 1 つ言える事は、医薬品を各キャンプに配置するというやり方は量を過剰にする傾向にあるという事である。どんな病気、症状が生じてもある程度の対応ができる様という事で種類も多くなるし、宿泊日数なども考えると必然的に量も増えてしまう。実際、高所登山をやるような隊員の中に不健康な病人が含まれている事はまれで、多くの登山隊は医薬品をほとんど使わずに済むのが実情だろう。そう言う点から考えて、私は各パーティー単位で最低限の薬品を持ち、そのパーティーの上下行動に基づいて配置してもらい形が良いのではないかと思う。今回の登山中でも自分の体調に不安のある者は本能的に胃薬や頭痛薬を自己管理しており、その方がキャンプごとに配置されたものをその時さがして服用するよりも現実的だと思えた。一般的に高度障害による症状はその時点での最高所宿泊で出るのが普通であり、宿泊している位置よりも低い所で強い障害がでるのはまれであるという事を考えると、医薬品はそのパーティーのその時点での最も高いキャンプにあればよいという事になる。

もちろん怪我の場合などに必要な最低限の薬を常備するのは国内登山と同じである。またそのためには隊員各自がしっかりと自己管理できるという条件も必要だろう。

原則的に順化不充分的隊員は上部キャンプでの宿泊をさせないという位の管理は必要だろうし、また順化のペースは個人差が大きく、順化の具合を見てパーティー再編する位の事は当然為されなければならない。つまりその時最も体調のよい者、順化の進んでいる者が上部で行動する、体調の面での極地法とも言うべきスタイルでの行動が医療面のみから考えると安全な登山となるのではないだろうか。しかし実際は高所経験の多い者、体力・技術にすぐれた者ほど順化もスムーズな事が多く、一般的な極地法と別に大した差はないのが普通かもしれない。

今回、医薬品の配置は計画段階では各キャンプ

配置形で考え、量を算出して各キャンプごとにパッキングし配置するつもりでいた。

ところが、実際の登山では荷上げ上、本来先行すべき薬品はほとんど上がらず、C2にそのほとんど止まっており、C3にわずかな量を上げた程度でC1にもほとんど無しの状態であった。つまり体調の悪いものは上へ行かないし、行けないのだから各キャンプに薬品を配置するという事がいかに無駄が多いかを物語っていると思う。

順化の程度は、平地での安静時の体温と脈数、呼吸数などで知る事ができる。順化が充分でなかったり、前日の行動がオーバーワークだったりすると朝の脈数は上がり、体温は微妙に上昇する。その程度により不眠や頭痛も起こる。言葉では嘘はつけても体は嘘をつけないのである。朝安静時の脈数、体温とその前日の行動をグラフ化すれば、一目瞭然である。

医 薬 品 リ ス ト

HA J ミニヤ・コンカ隊

医 薬 品 名	BC	C1	C2	C3	C4	C5	合計	使 用 法
消炎鎮痛剤								
セデスG	240						240	1回1包食後
ブレシン	130	40	50	50	20	10	300	1回1錠食後
インドメタシン坐剤	15	10	10	10	10	15	60	内服不可の場合
抗生物質								
ケフラル	68	24	40	40	20	8	200	朝夕食後1回1包
ミノペン顆粒	40	8	20	20	8	4	100	朝夕食後1回1包
ミノペン錠	100	10	30	40	10	10	200	朝夕食後1回1錠
総合感冒剤								
PL顆粒	160						160	1回1包食後
ビタミン剤								1日1回1～2錠
ポボンS	900						900	1日1回1～2錠食後
ベリックス	600						600	1日1包食後
ベクス顆粒	1200						1200	
胃腸薬								
ビオミックス	192						192	1回1包食後
シグナル	30	15	30	30	15	6	30	1回1包食後
タケダ21	180						180	1回2錠食後
タナベU	25		10	10	10	5	50	食前または食後
コランチル	62	6	20	20	20	6	120	食前または食後

医 薬 品 名	BC	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	合計	使 用 法
鎮吐剤								
プリンペラン	50	10	20	20			100	1回1錠毎食後
鎮痙剤								
ブスコパン	110	10	30	30	10	10	200	1回2錠毎食後
催眠剤								
ハルシオン	28	10	14	14	8	4	78	就寝前1/2錠
抗ヒスタミン剤								
パイロンL-24	35	5	25	25	5	5	100	1日1回夕食後
下痢止め								
ロペミンカプセル	200						200	1回1カプセル適時
タンナルビン	100						100	1回1包適時
整腸剤								
ラクトーン	540							1回6錠適時
ビオフィェルミン	90							1回3錠適時
鎮咳薬								
アストミン	40	10	40	40	10	10	150	1回1錠毎食後
メジコンカプセル	30							1回1カプセル食後
エフェドリン錠	100						100	1回1/2～1錠食後
メジコンドロップ	108	18	54	63	18	9	270	1回1錠適時
利尿剤								
ラシックス	30	10	20	20	10	10	100	12時間ごとに1錠
去痰剤								
ビソルボン	30	10	20	20	10	10	100	1回1錠毎食後
虚血性心疾患治療剤								
サワドールL錠	100						100	1回1錠12時間毎、1日おき
ノイキノン	24	12	12	12	6	6	70	1回1錠毎食後
血管拡張剤								
ユベラN	18		24	24	18	12	96	1回1錠毎食後
ケントンN	200						200	1回1錠毎食後
痔治療薬								
ポステリザン	50						50	適時
眼科用医薬品								
スマリンゴールド	1	1		1	1		4	つかれ目
スマリンサルファ	1	1	1	1	1		5	結膜炎
リンデロン眼軟膏	1						1	結膜炎
アズレン点眼液	1			1	1		3	雪盲など
アイロタイシン眼軟膏	1	1		1			3	
皮膚病薬								
シオノギD軟膏	5	1	1	2	1		10	日焼けなど
リンデロンVG軟膏	2							化膿した皮膚炎
アイロタイシン軟膏	1			1			2	化膿止め

今回持参した医薬品で最も使用したのは胃腸薬である。登山中は主に消化剤がよく使われ、下山後成都では胃痛の薬が使われた。特に成都では登山後のつかれた胃袋にいきなり高級四川料理がドカドカ入るものだから、胃腸の負担が大きく、半数近くの隊員が胃痛などを訴え、総量の半分以上を消費した。四川料理は旨いが、辛いもの、油っ濃いものも多く、特に豚の料理が多い事から魚、牛肉に慣れた私達日本人には少々、しつこく感じられる。高級料理も毎日だと有難みが無くなってくる。そんな感じだった。

全行程を通して、ほとんど不調者もなく今回は医療担当としては非常に楽をさせてもらった。これは偏に、各自の自己管理とそれを充分に考慮したタクティクスの成果と言えるだろう。

頂上に立つというのも重要だが、病人、怪我人を出さないという事も重要な事だ。頂上はまた次の機会もあるのだから…。

※医薬品リストの他に主としてBC用として配置した薬品は下記のとおりである。

消毒用エタノール 500 ml、イソジン液 200 ml、(C1～C4に10mlづつ)、ギズクリーン 1本、インテバン液 1本、ラブローション 20ml 2本、ビンダスローション 8 ml×10本、防虫スプレー 2本、滅菌ガーゼ、紙バンソウコウ、包帯、ネット包帯、シーネ(大、中、小)、三角巾、脱脂綿、注射針、注射器(点滴セット)、手術用手袋、メス、ハサミ、ピンセット、クリップ、縫合針、体温計、聴診器。

※酸素については、BC用としてラクスファ・ボンベ 4本を配置。上部キャンプ用としては、O₂パックを採用し、ホルダーを各キャンプに1個配置し、キャンドルは各キャンプに4本～6本を配置した。これは、キャンドル1本で毎分3ℓの酸素が30分間発生するため、それぞれのキャンプ間で障害者を搬送するために必要な時間を想定して配置したものである。つまり各キャンプ間を2～3時間で下ろせることを前提にしたのである。幸いなことに酸素は一切使用することはなかった。

(記：林 雅樹)

8. 撮 影

9月18日

夕食のあと、A、B、C隊の編成発表がある。そのあと撮影という大任をおおせつかる。不安とおもしろそうだという気持ちが交錯する。

9月21日

イグアナルートの登攀を撮る。充電状況がよくないということだったが、5～6分の撮影でバッテリー切れ。今日の行動はC1往復なので、基部にカメラをデポして、荷上をする。ブレないように撮ろうと思うと、息をこらえるので、少ししんどい。

9月22日

本日はレストだが、昨日とれなかったイグアナの登攀を撮る為、A隊に先行して出発。霧の為途中で引き返す。

9月29日

個装をもってC1へ上がる。天気もよく上部からみたアイスフォールもバッチリ撮れる。電池残量を気にしつつ、こまめに撮りながら登る。この

沢手前で、C1荷上げのC隊とすれ違う。やけに速いなと思っていると、「BCに美人が来ている」と言い残しすっと下っていった。BCまであと1時間はかかるだろう、間に合うかな。それにしても、皆うれしそうな顔をして下っていった。C1に到着する頃には曇ってくるが、とりあえず今日の予定は消化できた。

9月30日

昨日同様よい天気だ。C2入りのB隊を撮影する為少し先行する。C1から尾根を登りきったところに腰をすえてカメラを構えていると、伊藤さんがトップで来た。息をはずませながらカメラの前を通過し、カメラが向かなくなると休んでいた。ここで電池交換の際、岩の間に電池を落してしまう、回収不可能。脱落防止をしていなかったことを反省する。

C2までのルートを撮影後、カメラはセーターをまきビニール袋に入れてテント内にデポする。電池は充電が必要な為、BCへ下ろす。

10月10日

天気よし。C3へのルートを撮影する。コルへの最終ピッチを工作する組と、ルート補修組に別かれる。今日は登攀ルートを横から撮れるので少し違った感じになるかと思う。このルート上ではカメラは落としたら最後、回収さえできないだろう。予備靴ひもでカメラに脱落防止をするが、ザックからの出し入れに気を使う。コルの3ピッチ手前で、最後尾にまわり、スカイラインに人が浮きでて、高度感がでるところを撮ろうと、待機する。

バックはヒマラヤンブルーの空。FiXロープに身をゆだね、アイゼンをカリカリいわせながら登る姿はきつと絵になるぞと思いつつ、カメラをかまえる。すると先にコルに達した3人が首だけだして下をのぞきこんでいる。下から見るとさし首が3つならんでいるように見える。一気に緊張感がゆるむ。顔ひっこめてくれて怒ってもここからじゃ聞こえないだろうと思いきらめる。その後自分もコルへ登り、ヤンズコー側を撮っているうちに、電池切れ。カメラをコルヘデポして下山する。

10月14日

9. 通信

パーティ相互間、及び各キャンプ間の連絡の確保は、直接登攀活動に影響し、登山の成否を左右する重大な要素である。この事を十二分に自覚した上で計画を作成した。

1. 電波通路の状態と対策

登山ルートを電波伝播の面からみた場合、BC~C2以外、特に地形上の制約はないと思ったが、BC、CBCに八木アンテナを設置することで対処することにした。(結果的にはCBCには設け

	CBC	BC	C-1	C-2	C-2'	C-3	
CBC	◎	◎	×	×	×	×	◎良
BC		◎	◎	○	○	○	○交信可
C-1			◎	○	×	◎	×交信不可
C-2				◎	◎	◎	交信せず
C-2'					◎	◎	
C-3						◎	

C3入り、風が強くまいる。こんな状況も撮っておかなければと思いつつも、電池がない。もっともあっても撮る気にならないだろう、今までカメラを回した時は、おだやかな時ばかりだったから……。

10月21日

再びC3へきて2日目、風がなく静か。コルまで少し登ってC2方向を撮る。これから上部の分も残しておかなければならないと思い、時間を気にする。しかしこの数時間後に登頂断念。カメラにとってはこの日の朝が最高到達点になってしまった。

反省

撮影は、山をふり返った時、貴重な資料、思い出となる。大任をまかされたことに感謝すると同時に、たいしたもの撮れていない、同じ絵がたくさんあるだろうなと思ひ、編集されるのが怖い気がする。撮影は限られた電池の使用配分から、どのような画面を撮るかという腹案、どの人、どの場所をどのくらい撮ったかなど、の管理ノートを専用で作っておけばよかったと深く反省している。(記：河内 正樹)

なかった。) 全般的にはBCと各パーティが、全く交信不能になることはなかったが、一部の場所で中継や場所を移動して交信する必要があった。(ア)キャンプ間交信状況

2. 無線機

交信にはアイコム製144MHz帯トランシーバーを使用した。(予備を含め6機)出力は電池使用で1Wだった。その他に別会社の2W無線機が3機あったが、なぜかアイコム製のものとは交信できなかった。

送信モードは2つあり、Hモードで使うことが多かった。カバーはウレタンを間にはさんでナイロンで自作した。

3. 電源

単Ⅲアルカリを使用した。計画では350本を見込んだが、実際にはそれを下まわった。

	使用本数	備 考
BC	36	予備トランシーバー含む。

A.B.C隊 112 交換目安はC-1以下では10日で
1回、それより上は7日で1回。

10月9日に最終的に見直した時の荷上げ本数

	C-2	C-2'	C-3	C-4	C-5
本数	40		30	12	12
備考			A、Bで 各3回分	2回分	2回分

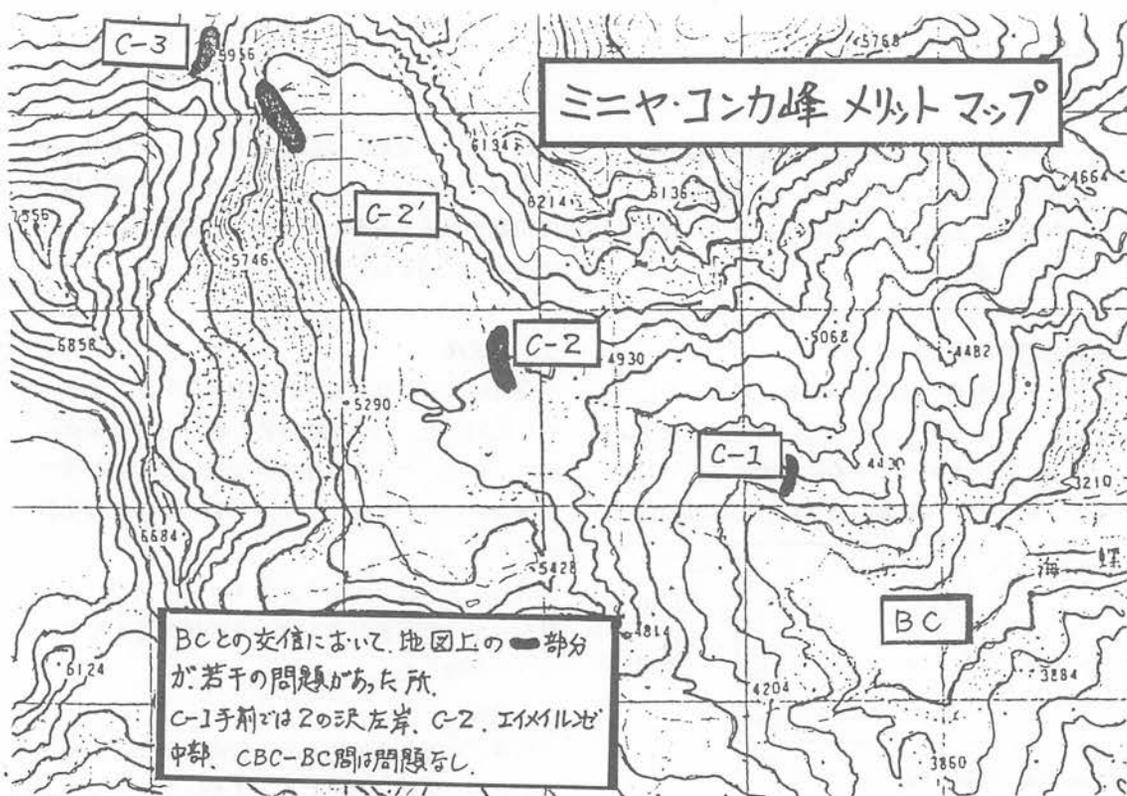
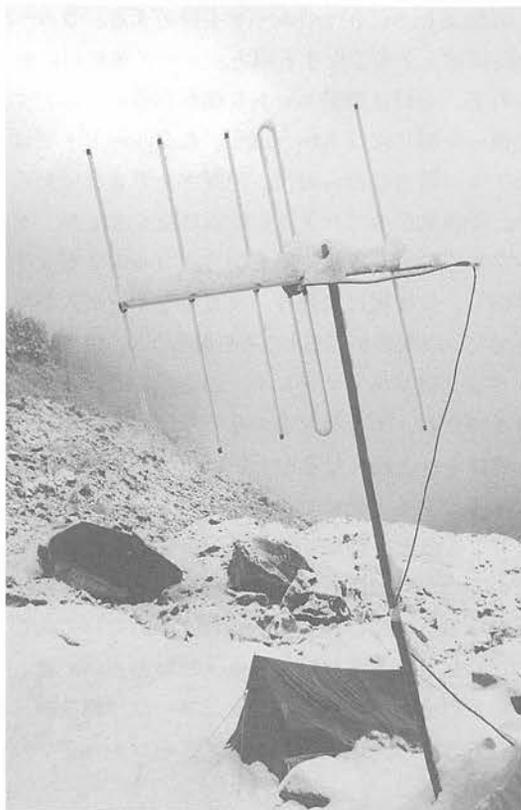
1日の交信時間は1h程度であった。

予備として充電式単Ⅲニッカド電池を20本持参し太陽電池と発電機で充電する方法を考えたが、出番がなかった。

4. その他

複雑に入り組んだ山地では、たとえ互に指向性の鋭いアンテナを向かいあわせたとしても、最大電界強度が得られるとは限らない。144MHz帯では波長が2m程度の為、理論的にはその範囲で移動してみると感度がいい場所が見つかるはずである。(ルート上の感度状況についてはメリットマップ参照。)(記：河内 正樹)

▼ベースキャンプの通信用アンテナ



10. 照明・発電

自家発電について、私はエンジンに関しての専門知識はほとんどありませんでした。車にのっていることぐらいなものですが、なんとかなるかと思ひきうけました。事前に自家発電はホンダのものが成都にデポしてあると聞いていました。型式は不明で4ストか2ストかもわからなかった為、2スト用エンジンオイルを用意して行きました。4ストのオイルにかんしては車からいくらでもぬけるので、2ストオイルのみにしました。そしてしばらく使っていない事も考えキャブクリーナーも用意して持って行きました。

成都について、自家発電は2台デポしてあり、両方ともエンジンをかけたところ動きました。1台は4ストもう1台は2ストでどちらをBCに持って行くかでまよいましたがいろいろみた所4ストの方はタンク内になんかサビがでていたためメインジェットにサビがつまると困るので2ストの自家発電をもって行く事にしました。

電気はコード、ソケットさしこみ、電球。電球は5コ、内1コは大型電球でこれはBCタープに使用する予定でもって行きました。1コは予備。BCに入り、自家発電はテントからすこしはなれた石のかげに入れ、プラパールで一応屋根をつけました。そして各テントに配線、1テントに電球(40W)1×3、BCタープには大型電球1、自家発電には、さし込みが1つしかなく、コンセントがテントから1、タープから1、合計2になってしまった為、時間でコンセントをさしかえる事にしました。消灯はだいたいPM21:30分、燃費にかんしては、タンク容量500ccで2時間30分(満タンにして)もちましたので19時丁度に満タンにしておけば21時30分には止めに行かなくてもかかってにとまりました。

BC入りして10日間ほどは快調にまわっていましたが、その後調子がわるくなりコンセントをさしてむと回転にばらつきがでて電気がついたり消えたりする様になってしまいました。このため、テントへの電気の供給はできなくなりBCタープのみにつけることにしましたが大型電球をつける

ことができないので40W球1つに切り換えました。(大型電球は200W)そしてエンジンのアイドリングを上げて多少ばらついてはなんとか電気をBCタープだけに供給できる様になりました。

原因は不明でコンセントをぬくと安定した回転をするのでエンジンの不調と言うよりは電気系の不調だったのでと思いました。

BCの天気は湿度が多く雨も多かったので、その辺がえいきょうしていたのかも知れません。CRCでもあれば事前に吹いておけばもうすこしはよかったですはなかったかと思いました。さらガソリンは現地で買いました。日本のガソリンの様に、きれいではなく、かなり砂の様な物がポリタンクの中にしずんでいました。やはり給油時に、フィルターをつかって給油すればよかったと思いました。

やはり私のように専門知識がないと調子が悪くなってもせいぜいアイドリングを上げる、キャブからの空気の流入量をみる、すこしごみなどはらうと、かんたんなことしかできませんでした。今回はなにもかもが初めてでいろいろとまどいも多くわからない事ばかりで、照明、自家発電の担当にはなったものの、みなさんに協力してもらってなんとか最終日まで電気をつけることができホッとしています。エンジンにくわしい河内さんにはいろいろとアドバイスをうけても助かりました。もし今度どこかで照明、自家発電の担当になったら、今回の失敗、けいけんを生じて、より明るいテント生活ができるようにしたいと思っています。(記:川上 豪)



▲出発の朝、緊張の一時

11. 環境

●テイクインの実際

はじめに

ミニャ・コンカ登山隊の目的の一つに「テイクイン・テイクアウトの徹底」を掲げたのは、旗上げしたばかりのHAT-J（日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト）の提唱する「山岳の自然を汚染しない運動」の担い手の一員として当然のことである。今回は、この運動をより具体的に岳人たちに浸透させるために、その労力や方法などについて調査するために、周到な準備を行った。ここでは、テイクインの大半を占める食糧について、我隊の方法を報告する。

1) 食糧計画の概要

食糧計画は、隊長から示された行動計画を基本として以下のように作業が進められた。

1-1 BC、ハイ・キャンプ、アタック・キャンプの主食、行動食の各メニューの決定

1-2 各キャンプの宿泊人員の決定

1-3 主食、行動食の各キャンプ配分の決定

1-4 必要食糧品名と数量の明細書の作成

この作業の結果は次のようにまとめられた。

- ・隊員数 12名
- ・登山日数 45日間（BC～BC）
- ・メニューの種類

	BC	上部	アタック	計
主食	8	8	2	18
行動食	3		2	5

- ・各キャンプ宿泊人員数
BC = 316 C1 = 68 C2 = 114
C3 = 102 C4 = 20 C5 = 12（予備含）
- ・必要食糧（酒類を除く）
61品目 418kg（包装を除いた正味重量）

2) 食糧の調達

食糧の大部分については、各メーカーに寄贈依頼を行った。寄贈を受諾した企業からは、様々な荷姿によって商品が送られてくる。

3) 食糧総数の把握

寄贈依頼の結果、幾つかの品目については予定していた物が集まらず、献立を一部修正せざるを得ない事も生じた。

4) テイクインの手法

現在の食糧品は、過剰なまでに包装されている。HAT-Jのパンフレットに紹介されているように、その品物にとって最低限必要な包装姿で、現地へ持ち込むことが、テイクインの最大目標である。

4-1 食糧テイクイン明細書の作成

持参する必要食糧品名と数量が既に決定されているので、表1を作成し、隊員を2人1チームとして数チームに分けて作業を開始する。

4-2 記入要領

- ④品名 必要食糧品の名称を記入（ラーメン）
同じラーメンでも荷姿が違う場合は別個記入。
- ⑤持参予定数量 食糧計画により算出された単重量（85g）と数量を記入
- ⑥外装 85g入りラーメンが30袋入った箱の荷姿で送られてくる。この場合316袋を持参するので通常であれば、輸送を考えて30袋が一箱に入った状態で現地へ送るが、この外箱（346g）を外す。316÷30=10箱と余り16袋。従ってこのラーメンの場合は、346g×11箱=3,806gを外したことになる。
- ⑦中袋 ラーメンの場合は85gを包んでいる薄い袋が中装に該当するのであるが、これを外すとラーメンを運搬できないので、これは外さない。ぞうすいの素は中袋として3袋をまとめて包装してあるので、この中袋（16g）を外す。92÷3=30袋と余り2袋。このぞうすいの素では、中袋だけで16g×30袋=480gを外したことになる。
- また、チョコレートの場合は、外装、中装を外した後にも、銀紙をくるんでいる紙があるのが普通であるが、これも現地では全く必要がないので外す。2.5g×222枚=550gを外したことになる。
- ⑧外した包装重量 外装と中装で外した数量とそ

の重量を掛け合わせて算出する。

5) テイクインに要する労力と効果

今回の作業は本梱包が始まる前日に実施した。10人で約3時間を要した。外した重量は53,545g 通常であれば現地へ運び込まれるゴミ約54kgが事前の作業により外された訳である。ちなみにこの経済的効果を今回のミニヤ・コンカ隊で計算してみると、

1. 不用となった運賃 (38,640円)

成田→北京 (別送品として空輸した)

$$54\text{kg} \times 475\text{円} = 25,650\text{円}$$

北京→成都 (貨車便として)

$$54\text{kg} \times 160\text{円} = 8,640\text{円}$$

大本营→BC (ポーター代)

$$2\text{人} \times 1\text{日} \times 2,175\text{円} = 4,350\text{円}$$

2. 不用となったゴミ焼却用ガソリン代 (?)

今回の梱包済み総隊荷 (食糧品以外の装備類を含めたもの) の重量は1,228kgであった。通常であれば、これに外した54kgが加算されて1,282kg

であったので、テイクイン作業の結果、別送品隊荷重量の約4.2%を軽減したことになる。

おわりに

テイクイン作業そのものは簡単であり、誰れもが実施できることである。しかし、作業の途中で何かバカバカしさを感じる人も多くでるだろう。その感情を制するのものは、これらの作業が現地 でいかに重要な役割を果たすかを、キチンと理解している人が必要だ。むしろそのようなことを理解している人が隊のリーダーとなるべきであろう。

また、このテイクイン作業を行うには、当分の間、我々が採用したような「明細書」を作成し、報告書等に記録として残しておくことが大切だと思う。やがて、多くの岳人にとって海外登山では必ずテイクイン作業があるということが定着すれば、この作業にさかれる時間もグーンと軽減され、シンプル登山に一步近づくことになるだろうと思う。

(記: 山森 欣一)

担当者氏名: 山森 / 松田 所要時間 (自10時10分~至11時45分: 1時間35分) 実施日: 1991. 6. 28

品名	持参予定数量		外装 (重量)		中装 (重量)		外した包装重量	重量・g
ラーメン	85 g	316袋	30袋入り/箱	346 g	無	無	346g×10箱 = 3460 g	3460 g
ぞうすいの素	8.5 g	92袋	60袋入り/箱	354 g	3袋入り/袋	16 g	354g×1+16g×31袋=850	850 g
海藻サラダ	46 g	236袋	12箱入り/箱	310 g	4袋入り/袋	10 g	310g×12+10g×59=4310	4310 g

●テイクアウトの実際

1) BC

(1) 可燃物

紙ビニールは中プラパールにビニール袋を入れておき、1日1回、1斗缶でコマめに焼いた。BCはかなり湿気があり一度濡れると仲々燃えなかった時もあったが、ガソリン、新聞紙、雑誌を用いて火力を強くすることによって問題解決。

(2) ガスカートリッジ、カン類

カンつぶし機をもっていった。魚缶などは問題ないが、ガス・カートリッジは容量が小さく

ならず、やはり平らな石でつぶす原始的な方法をとった。BC撤収時43kのカン類。

(3) ビン類

すべて回収した。

(4) 銀紙

チョコの銀紙以外の銀紙は可燃物と共に焼却 (燃やすことにより容量を小さくし、軽量化)、燃えカスの中からハシで取り出しプラパールにビニールを入れて集収。BC撤収10kの銀紙。

カン類、ビン、銀紙は成都まで持ち帰り、中国スタッフに処理を依頼した。

(5) 生ゴミ、燃えカス

生ゴミはビニール袋、燃えカスはプラパールを半分に切って集め、氷河左岸の上部の土中に埋めた。

(6) トイレ

BCテントから40m程はなれた氷河の下流に3ヶ所建築。石で足場を作り流れやすいようU字形にする。BC撤収時にある程度水で流し、足場の石をくずして処置した。

(7) BC付近

ハイローコー氷河は観光地であり、観光客がBCまで何度かくることがあった。そのたびにゴミを捨てていく。カン、タバコのスイガラ、ビニール等を何度か見つけてBCにて処理した。近い将来、ハイローコー氷河においてゴミ問題が浮上してくることはまちがいない。

(8) トイレットペーパー

トイレの脇にビニールを置きその上にプラパールをかぶせ雨、風をしのぐ。しかし、それでもトイレットペーパーが濡れて仲々燃えにくかった。1週間ためると、燃えつきるまで3時間かかったこともあったが全て焼却した。

2) 上部キャンプ

(1) C1

C1のゴミはすべてBCまで降ろしBCにて処理。C1のトイレは土を軽くほり、撤収時軽く土をかけた。市川隊のものと思われるカン、電池、ビニール等のゴミもBCまで降ろし処理。

(2) C2 & C3

可燃物はC2で中国隊が残したと思われる

中華ナベとガソリンで焼却。このガソリンはBCで使っていたものより燃えが良かった。燃えカスについてはクレバスに投棄。銀紙は可燃物といっしょに燃やしハシでできるかぎり回収しBCに持ち帰る。カン、ガスカートリッジは石でつぶし容量を小さくしてBCまで降ろした。

上部キャンプのトイレットペーパーは各人がジッパー付ビニール袋に入れてBCまで降ろし処理。

C2手前に市川隊のゴミを大量に発見したがこれは降ろせなかった。

3. 反省点及びまとめ

ほぼ計画通りにゴミ処理はできたと思うが、C3に若干の装備等を残置せざるをえなかったことと、C2で燃やした可燃物の燃えカスを投棄せずC1の土中に埋めればよかったと思う。あと残飯と汁を分けてろ過する袋を持っていけば楽であつたらう。BCにおけるトイレットペーパーについては湿気をよせつけない専用のハコを準備すればよかったと思う。プラパールの数も帰りのキャラバンに必要な数だけプラパールを使用してあとはダンボール箱にすればよかったのではなからうか。

今回、隊長の指導を受けつつヒマラヤにおける先鋭的なゴミ処理を実践できたことは、非常に勉強になった。目立たない地味な作業であるが余裕をもって登山していくことが必要な条件だと思う。今回の経験を生かし、これからのヒマラヤの山々を守っていくためにももっと効果的に完璧に近い形での処理法を勉強していきたい。

(記：高見清十)



▲市川隊C1跡のゴミ (10年前のもの)



▲C2撤収にあたりゴミを焼却する

12. 気象

ミニヤ・コンカ (7,556m) の登山期間中の気象は、アイスフォールを境にして (ルート中はイグアナ)、まったく異なった気象だった。C2では快晴であってもBCでは霧の中、C1から見たBC付近は常に雲海の中、C1より上部ではTシャツで行動しても暑いほどであった。C2から見た北東稜は快晴であっても常に雪煙が上がっており、山頂直下からは1日1本ぐらい、大きな、非常にスローな雪崩が雪原めがけて落ちくる。C2とC2'では同じ雪原でありながら、C2'では非常に風が強く何度か天幕のポールが折れるほどであった。エイメルンゼの登攀は風をまったく感ぜず、北東稜のコルに上がるとヤンズコー氷河から風が吹き上げ、風は、風速15m/sは常に吹き上げ天幕の設営、撤収にはかなりの時間を要した。アイスフォール下のBCでは上部の天候にまったく関係なく霧の中で、時折日が照すものですが雲がBC上部を覆う。

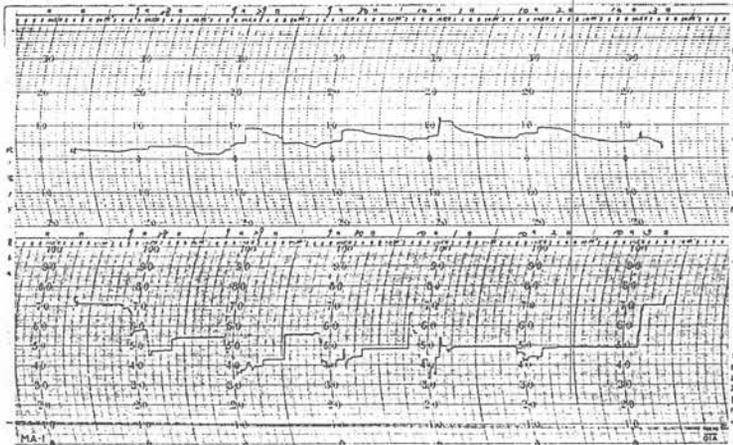
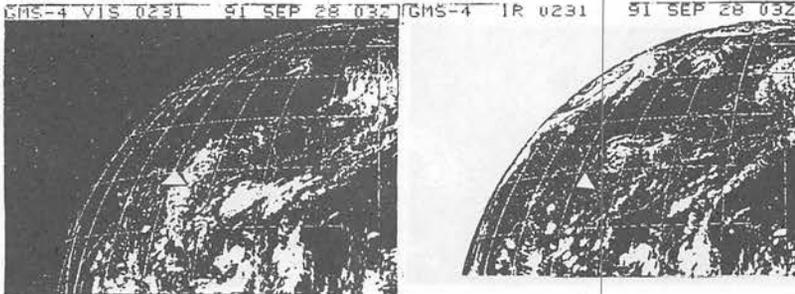
現地の気象観測としては、上部キャンプでは雪

温計で気温の測定、1日2回、8:00、20:00に天候、気温、風速(C3)を観測した。またBCでの観測としては、1日3回、8:00、14:00、20:00に天候、風向、風速を観測した。風向、風速はハンディタイプの風速計を使用した。持ち運びが容易でどこでも手軽に観測できるという利点があるが、最大風速が22m/sという欠点がある。また定時刻に観測したのではその前後で多少の風速の違いがでるため、精密な観測をするのであれば、自動風向風速を使用すべきだろう。また入山すると登攀に夢中になるため自記温湿度計による観測は有効的だが、自記温湿度計は下が平らでなければ意味がない。特に湿度に関しては大きな誤差が生ずる。したがって氷河の上のようなところでは、小型の水平器を持参した方がいいと思う。

登山期間中の1週間おきのヒマワリの画像 (日本時間12時) とBCでの温度、湿度を記す。ヒマワリの画像はVIS可視画像 (普通のカメラで撮影した画像)、IR赤外画像 (赤外線カメラで撮影した画像、温度が低いほど白く写るから高い所にある雲は白い)。

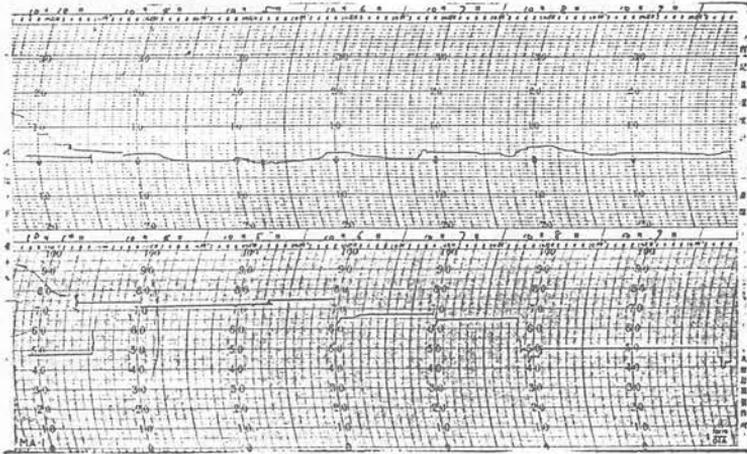
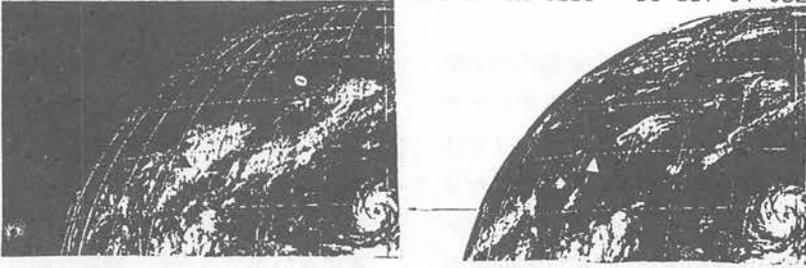
(記: 千葉真嗣)

9/28 ~ 10/3



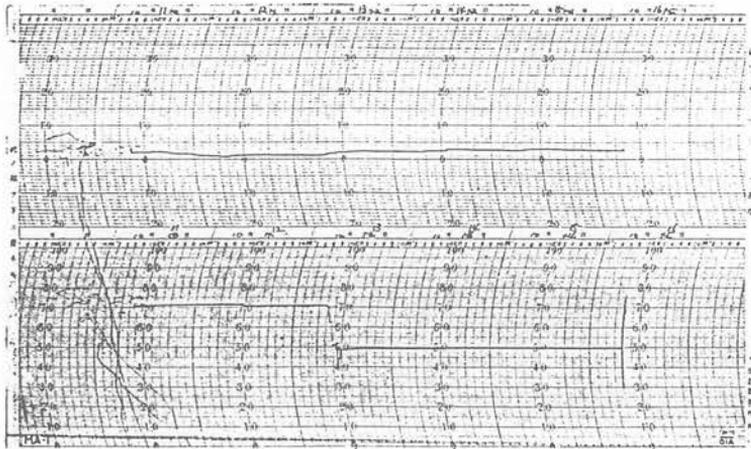
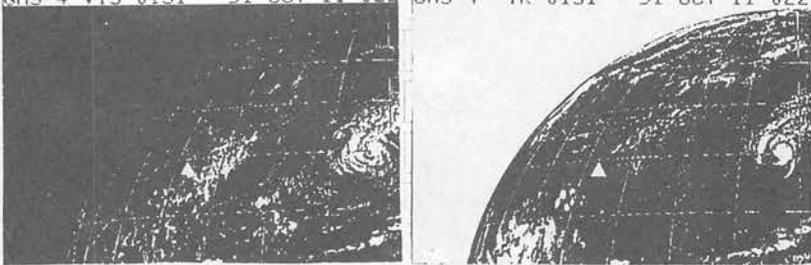
10/4 ~ 10/10

GMS-4 VIS 0231 91 OCT 04 03Z GMS-4 TR 0231 91 OCT 04 03Z



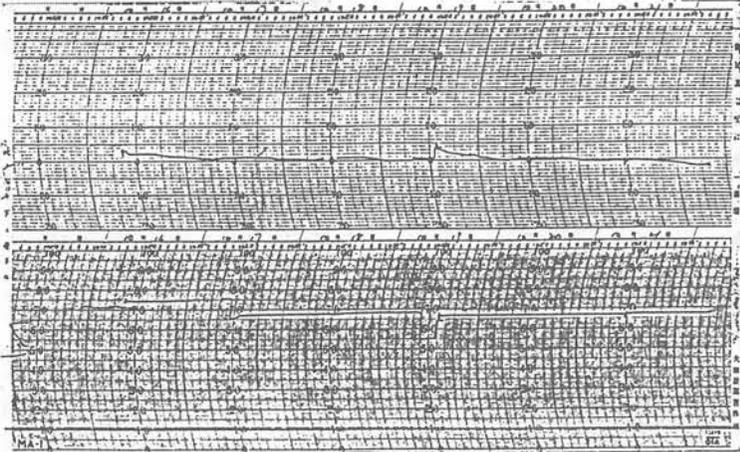
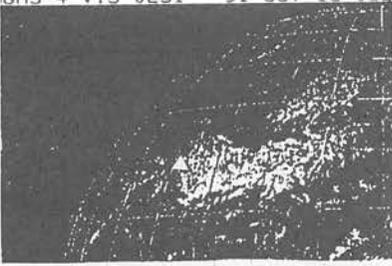
10/11 ~ 10/16

GMS-4 VIS 0131 91 OCT 11 02Z GMS-4 TR 0131 91 OCT 11 02Z



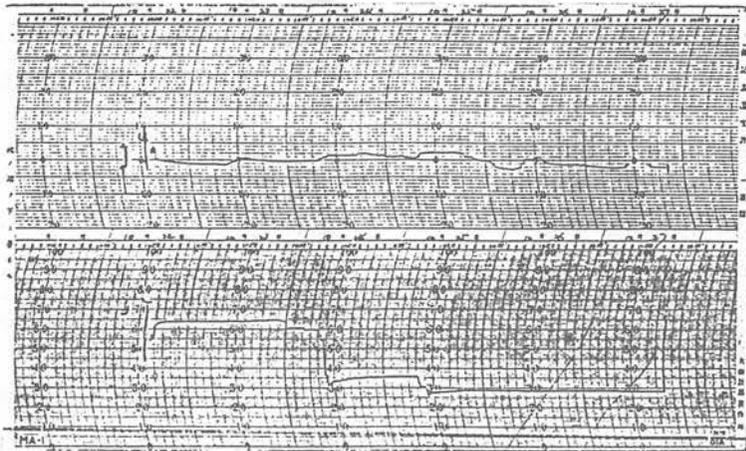
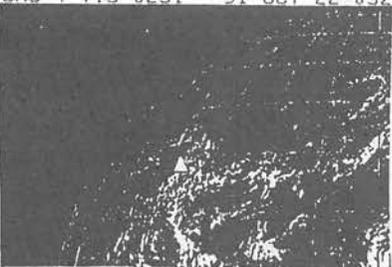
10/16 ~ 10/21

GMS-4 VIS 0231 91 OCT 16 03Z GMS-4 IR 0231 91 OCT 16 03Z



10/22 ~ 10/27

GMS-4 VIS 0231 91 OCT 22 03Z GMS-4 IR 0231 91 OCT 22 03Z



ミニヤ・コンカ天候概要（1991年）

（天候・風速・風向）

月日	場所	8 時			14 時			20 時			備 考
		天候	風速 (m/S)	風向	天候	風速 (m/S)	風向	天候	風速 (m/S)	風向	
9/17	BC	☉	1.5	W	☉	0	—	☉	1.9	WNW	氷河全面ガス
18	"	☉	2.9	NW	●	2.0	NW	●	0	—	13:00より翌朝まで雨
19	"	☉	0	—	●+	0	—	●	0	—	
20	"	☉	0	—	☉	0.5	SE	☉	0	—	太陽が出ないが暖かい
21	"	☉	0.5	W	⊕	0	—	●+	0	—	午前中山頂が見えた
22	"	●	3.3	ESE	☉	0	—	☉	1.0	W	
23	"	☉	0	—	☉	0.3	SE	●	0	—	22:00以降雪
24	"	●+	0	—	●	0	—	●	0	—	朝積雪 1 cm
25	"	☉	0	—	●	0	—	●	0	—	6:00まで雨
26	"	●+	0	—	●+	0	—	☉	2.0	NW	昨夜遅くから○
27	"	☉	0	—	☉	0	—	☉	0	—	時折薄陽差す
28	"	☉	1.0	WNW	⊕	0	—	☉	0	—	"
29	"	○	0	—	⊕	0	—	⊕	2.0	E	一日良い天気
30	"	○	0.5	N	☉	0	—	☉	3.0	W	磨西側の朝焼けがきれい
10/1	"	☉	4.5	WNW	☉	3.0	NNW	☉	3.0	NW	朝方雲が切れ山頂が見えた
2	"	⊕	2.5	NW	☉	1.0	E	☉	0	—	"
3	"	●+	0	—	●	0	—	●+	0	—	
4	"	☉	0	—	☉	0	—	☉	0	—	
5	"	☼-	0	—	☼-	2.0	E	☼-	0	—	1日☼- 時折雲が切れる
6	"	●+	2.5	NW	☉	2.0	E	●+	0	—	時折陽が出る
7	"	☉	0	—	☉	1.8	E	☉	0	—	9:30~10:30太陽が出る
8	"	☉	2.5	NW	●+	0	—	☉	0	—	日中は比較的暖かい
9	"	☉	0	—	☉	1.0	SE	☉	0	—	"
10	"	○	2.3	W	☉	0	—	●+	0	—	11:00よりガス
11	"	●+	0	—	●+	0	—	●+	0	—	10:00より1h雨
12	"	☉	0	—	☉	0	—	☉	0	—	9:30~11:00薄日差す
13	"	☉	0	—	☉	0	—	●+	0	—	午前中太陽が出る
14	"	☉	0	—	●+	1.8	SW	☉	0	—	アイスフォール上空晴れ
15	"	☉	2.0	NW	●+	0	—	☉	2.0	E	1日中○
16	"	☉	0	—	☉	0	—	☉	0	—	"
17	"	☉	0	—	☉	0	—	☉	0	—	"
18	"	☉	0	—	☉	0	—	●	0	—	朝方 ○
19	"	☼	0	—	☉	2.0	E	●	0	—	朝方積雪 4 cm
20	"	☉	0	—	☼-	0	—	●+	0	—	朝方 ○
21	"	☉	0	—	☉	0	—	☉	0	—	" 積雪 1 cm
22	"	☉	0	—	☼	1.0	E	☉	0	—	" " 1.5 cm

10/23	BC	⊗	0	—	⊙	0	—	⊙	0	—	朝方 ○ 積雪 3.0 cm
24	"	⊙	2.0	W	⊙	0	—	⊕	2.0	N	午前中は時折日が差す
25	"	⊕	0	—	● _≡	0.2	SE	⊗ _≡	0	—	
26	"	⊙	0	—	⊙	0.5		⊗	0	—	昨夜は雪 積雪11cm
27	"	⊗	0	—	⊗	0	—	⊗	0	—	" " 20cm
28	"	⊙	0	—	⊙	0	—	⊙	0	—	
29	"	⊕	0	—	⊙	1.2	SE	⊕	0	—	

(天候・気温)

月日	場所	8 時			14 時			20 時			備 考
		天候	気温	風向	天候	気温	風向	天候	気温	風向	
9/22	C 1							⊙	+3		
23	"	⊙	-2					⊙	+5		
24	"	⊗	0					⊗	0		積雪10cm
25	"	⊗	0					⊗	0		" 15cm
26	"	⊗	0					⊙	+1		" 20cm
27	"	⊗	0								" 変化なし
28	"							○	+2		
29	"	○	+4					○	+3		
30	"	○	+6					⊙	+7		
10/1	"	○	+9					⊕	+7	SE	
2	"	⊕	+2					⊕	+7		
3	"	⊕	+6		● _≡	+6		● _≡	+4		
4	"	●	0		●	+10					
7	"				⊙	+8		⊗	0		
8	"	⊙	+1		⊙	+7		● _≡	+3		積雪 3 cm
9	"	○	+2								
10/1	C 2	○	-4					⊕	-1		
2	"							○	-2		一日快晴
3	"	○	-4								
10/6	"							⊕	-3		
7	"	⊕	-2	NE				⊗	+4		
8	"	⊕	+8		⊗	+5		⊗	0		
9	"	○	-2		⊕	+3	W	⊕	+2		
10	"	○	-5	NW	⊙	+8		⊕	+2	SW	
11	"	○	+2		⊙	+3		⊙	-1		
12	"	○	+3	N	⊕	+9.5					
13	"	○	-5								
22	"							⊕	-5		
23	"	⊗	-8					⊗	-6		
24	"	⊗	-6					⊗	-5		
25	"	○	-2								

13. キャンプ生活

■ベースキャンプ（3,400m）

ハイローコー氷河上、3,400mのBCは、普通の遠征隊のBCよりは、1,000m位低い所に有る。氷河の上に有る為にテントの床が、初めは石を平にならして作ったが、日がたつにつれて「デコボコ」になり（テント撤収時は、周囲より50cmも高かった。）背中は、いつも「指圧の心」でした。それでも馴れると結構寝れるものです。また、大渡河と氷河と目の前の大アイスフォールの為に、全期間中快晴だったのは3日間（9/28～30）で、後はガスとキリ雨と雪の世界。その為に隊長は、日に当ることが出来ず、ヒゲも伸び、身体も洗えず「キリ雨の仙人」になってしまいました。そんな中でC隊は、9/30の快晴の日に、BCでの休養日に当りすごく幸運だった。その日は、BCの有る氷河の中を測ることになり、松館、森谷、高見の3人で、左岸端から50mのフィックスロープで、尺取虫の様に右岸まで1時間25分を要して測った結果は、 $50m \times 16回 + 36m = 650m + 36m = 686m$ でした。一見平に見える氷河も、クレバス有り、細道有り、一直線に測るのは、大変難しいことを知りました。テントに帰ると昨日遊びにきた、米国カルフォルニアの女性が、今日も遊びにきました。その後、氷河見物の観光客が11人も上ってきました。ここは観光地なので結構観光客が来て、我々のテントの周りや、HAJの旗を立てている所で、記念写真を取って行くため、BCを空けることが出来ず隊長は、その為にも「キリ雨の



▲雪に見舞われたベースキャンプ

▼雲の上の第一キャンプ（雲海の中がBC）



仙人」になってしまいました。休養日で、BCに下っても、キジ紙やC1からのゴミの焼却や残飯の処分、EPI等の空缶潰しなど仕事は沢山ありますが、やはりBCは、空気が濃く、鹿の親子が通り、小鳥が遊びに来たり、おまけに「ホモサピエンス」まで遊びにくる素適な所です。

BCでの楽しみの一つはやはり食事です。今回は隊長の配慮により、豚肉2回、ヤギ1回、山羊1回、チンゲン菜、白菜、キャベツ、ジャガイモ、大根等をタイミング良く仕上げてもらい、いつもうまい物が食べれて感謝、感謝でした。しかし20代の若者の多い我が隊は、この大量の肉、野菜等も「あっ」と言うまに消してしまう大胃袋マジック軍団でした。

■第1キャンプ（4,200m）

標高4,200mのお花畑の尾根に突き出た大岩の上に2張りのテントを張った所。ここは、エーデルワイスと、名も知らない小さな紫の花が咲き、太陽の光を一杯に受けるコンカ山の天上の楽園です。初め水場を見付けることが出来ず、二の沢まで汲みに行っていたが、幸いテント場のアイスフォール側の右下150m位の所に水場の有るのを見付けることが出来ます楽園になりました。このテント場だけが、唯一土の上なのでC2への荷上げで疲れて帰っても、ぐっすり寝ることが出来、又、朝夕には、周りの草付尾根には、鹿の親子が姿を見せ、小鳥も囁きまさしく楽園に相応しい所です。C1から下のBC側は、我々が上って来てからは、いつも雲に被われ「キリ雨の仙人」

が気の毒でなりませんでした。このテント場は、もうすこし長くいてもよい所でした。C1のゴミは、すべてBCに下げて処分した。

■第2キャンプ（5,000m）

ハイローコー氷河の、左岸寄りモレーンの標高5,000mの所。テント場より右手に水場が有る。ここは、コンカ山を見るには最高の位置。テントの正面にコンカ山の頂上が首がいたくなる様な見上げる位置にあり、そこから右下りに北東稜がC3の有るコルまで美しい稜線を見せている。コンカ山は4,000mから上は、いつも天気良く、我々C隊はC2での食事も、テントの外に石でテーブルを作ってコンカ山をおかずの一品として食べていた。またこのキジ場は、足元も安定し眺めも良くつい長居をしてしまうほどです。C2には、中国調査隊の残っていた「ガソリン」と「支那ナベ」が有り、これでゴミを燃し（C2'のゴミも下げてきて）燃滓をBCに下げた。しかし、5,000mでのEPI等の空缶潰しは、重労働です。C2も後半は、C2'からの風が強く、C2'、C3に全員が移っている間に、テント1張が飛ばされクレバスに落ち、1張りは引っ繰り返り返されてしまっていたが、幸い破損も損失もなく安心しました。

▼コル下のC2'（左奥エイメールンゼ）



■奥第2キャンプ（5,200m）

スノープラート上の標高5,200mのキャンプ地。C2までのキャンプ地と違い石のまじらない雪の上。

C隊がC2'へ入る2~3日前から、コルから抜けてくる強い風がC2'では吹き出しており、ブリザードの突風を受け、B隊の入ったテントは裂け、C隊の入ったテントはポールが折れてしまった。C隊としては、住み心地良い所ではなかった。

C2'から上部のゴミは、持ち帰ってC2又はBCでの処分となった。（記：松館 正義）



▲ベースキャンプでの閉山祝い



▲楽園C1は外で食事ができる

第Ⅲ部

資料の部



中国の山と登山

1. はじめに

日本の約26倍の国土を有し、旧ソ連、カナダに次いで世界で第三位の面積を誇り、11ヶ国と国境を接しているのが中華人民共和国（以下中国と略す）である。この中国には、多くの山脈が走っている。大興安嶺、泰嶺、南嶺、横断、ヒマラヤ、ガディセイ、カラコルム、パミール、崑崙、天山、アルタイなどであり、これらの山脈には9つの八千メートル峰を含めて、無数の高峰が聳え立ち、岳人にとっては魅力に溢れた国となっている。

南はビルマ、インド、ブータン、ネパール、パキスタンなどのヒマラヤ諸国と国境を接し、7千～8千メートル峰の多くは、これらの国々との国境地帯であるヒマラヤ山脈、カラコルム山脈にある。また、西はアフガニスタン、旧ソ連、北はモンゴルと国境を接し大興安嶺、パミール、崑崙、天山、アルタイなどの山脈がある。東は北朝鮮であり、その他の内陸にも多くの山脈があり、5千～7千メートル級の山々が数知れずある。

このような広大な領土を持つ中国には、高峰ばかりではなく、長江、黄河、黒竜江、珠江、海江、淮河、ヤル・ツェンポーなどの大河が流れ、また、代表的な青蔵、内モンゴ、黄土、雲貴の高原が広がり、ツァイダム、タクラマカン、ジュンガリなどの沙漠が横たわり、これらの要素が重なりあって未踏査地域を作りだしている。

中国の高峰は、共和国が成立して以来深いヴェールに包まれていた。その中であっても、中国の高峰に憧れる登山グループは、1960年代に入ると、あらゆる伝手を探って積極的に登山の希望を申し入れたが入れられなかった。

当時の中国は、国の体制を固めることが急務であり、形が出来上がると今度は、文化大革命の嵐が吹き荒れていたから、外国の登山隊を受け入れるどころではなかったのである。外国人が渴望していた中国登山が解禁されたのは、文化大革命が終り四人組が失脚し、四つの現代化政策が始動した1979年のことであった。

狭い日本の自然環境とは、かけはなれたスケールを持つ中国登山の特徴は、山へのアプローチ・マーチにあると云えよう。それは、ある時は半沙漠化した高原をジープで走り、大河を渡るために筏を使い、ラクダやヤクによるキャラバンがあり、時としてはうっそうたる森林の中の道無き道を、鉋と鋸で切り拓いて行くのである。

そのアプローチ・マーチには、数々のアドヴェンチャーが岳人達を待ち受けているのである。中国はまた、シルクロードや西遊記、三国志、ケサル大王、長征など伝説と歴史に満ち満ちており、この面からも山へ行き着くまでに充分岳人達の好奇心をみたしてくれるのである。

2. 中国隊の登山小史

中国における近代登山の幕明けは、1954年にムスターグ・アタを合同で登山したいという、ソビエトからの働きかけによりスタートした。

これを受けて、翌1955年に中国としては初めての登山隊員（許競ら4人）をグルジアの登山学校に派遣し訓練を受けた後、パミールのオクチャブル（十月峰・6,780 m）に登頂した。

1956年には、ソビエトから2人のコーチが派遣されて、太白山（3,767 m）に35人が登頂した。この中から24人がソビエトのコーカサスに派遣され、史占春ら12名がエルブルース（5,633 m）の登頂に成功した。そして、予定どおりソビエトとの合同ムスターグ・アタ（7,546 m）登山が実施され、7月31日に12名が登頂に成功したのであった。これは、中国人による初の7千メートル登頂の記録である。勢いに乗った中国側は、この内の数名がコングール・チュビエ（7,595 m）に向かい、陳榮昌ら2人が登頂したのである。

1957年は、中国人だけによる登山を実施した。山は四川のミニヤ・コンカ（7,556 m）であった。6月13日に史占春ら6人が登頂に成功したものの、下山中に3人が滑落死亡した。

1958年は、ソビエトとの合同チョモランマ登山の訓練のため、パミールに登山隊が派遣され17人がレーニン（7,134 m）に登頂した。この隊には登頂は出来なかったものの初めて女性も参加した。

1959年は、チョモランマ偵察のため物資をBCに集結し、ソビエト側の到着を待つばかりとなっていたが、チベット動乱が勃発したため中止となった。そこで、中国人だけで再度ムスターグ・アタに向かい、女性8人を含む32人が登頂したのである。冬には、ニェンチェンタンクウラにて合宿し、6,177 m峰に72人が登頂した。

1960年である。5月25日未明にチョモランマ北東稜から王富州、屈銀華、貢布の3人が登頂に成功したが、第二ステップを越える時、あまりの厳しさに靴を脱いで登攀した屈銀華の事が、「裸足で登攀」とか「夜中の登攀」として、報じられたためその信ぴょう性が疑われたのである。国家の威信をかけたこの登山は250人の大部隊であった。この年には、北京地質学院によって、アムネマチンⅡ（6,268 m）が初登頂された。

1961年には、コングール・チュビェに女性だけの登山隊を派遣し、パンドゥら2人が登頂したが、下山中に1人が雪崩のため死亡した。

1964年には、世界最後の8千メートル峰、シシャパンマ（8,012 m）が、許競ら10人によって初登頂された。1961年にソビエトに招待された史占春ら4人は、ソビエトの登山家達が、世界最後の8千メートル峰であるシシャパンマに登山していることを感じたが、ソビエトからはその後何等の提案もなかったということである。玉竜雪山（5,596 m）もこの年に初登頂されたことになっているが、その後の登山隊の活動からみて、これは連峰の一つだったようである。

これ以降は、文化大革命の嵐が全国的に吹き巻き、登山隊員もそれぞれの立場で過さざるを得なかった時期が続いた。

1975年、再開された登山活動の第一歩は、当時も疑問視されていたチョモランマの再登であった。5月27日に9人が登頂し、(内パンドゥがネパール側から登頂した田部井淳子に次いで、女性第二登となった) 頂上に測量用のポールを建てたのは有名である。

▼中国登山界をリードしてきた史占春主席



1977年、ソビエトとの国境にあるトムール(7,435 m)に7月25日11人、続いて30日にも17人が登頂した。この時期はソビエトとの関係は冷却しており、この登山も国境問題が絡んでいたと云われる。

これ以降は、1980年に中国の山が外国人へ開放されたのに伴い、登山経験のある登山隊員達は、外国隊の受け入れ、現地への同行(連絡官)など、サポート的な任務に付くようになったのは承知のとおりである。

1983年と84年には、中国登山界の総力を上げて、未踏の王者ナムチャ・バルワ(7,782 m)登山が実施されたが、両年ともナイプン(7,043 m)に登頂したに留まり、ナムチャ・バルワは未踏のまま残ることとなった。

1985年にはチベット自治区成立20周年を記念して、チベット自治区からチョー・オユーに登山隊が派遣され9人が登頂した。また、京都大学、同志社大学と合同によりナムナニ(7,694 m)の初登頂、アメリカ隊との合同でウルグ・ムスターグ(6,973 m)初登頂、HAJ女性隊と合同による八花氷山(5,850 m)の初登頂もあった。

1986年にチベット登山協会隊は、ニンチンカンサ(7,191 m)の初登頂に成功。また、HAJと合同でシュエバオ・ディン(5,588 m)の初登頂、長野県山協と合同でチャンツェ(7,553 m)登頂に成功している。

1987年にはHAJと合同でラブチェ・カン(7,367 m)の初登頂に成功した。

1988年は日本、ネパールと三国合同登山をチョモランマで実施し縦断に成功した。また、神戸大学と合同でチェルー(6,168 m)の初登頂にも成

功した。

1989年はアメリカと合同で南極のビンソンマシフの登頂を行った。

1990年アメリカ、旧ソ連との三国合同でチョモランマに登頂した。登頂者の中には女性のクイサン(チベット族)も含まれている。また、京都大学隊に参加してシシャパンマ中央峰(8,008 m)の登頂に成功した冬路は、漢族の女性として初めての8千メートル峰登頂者となった。更に長野県山岳協会と合同でザルンセル・カンリ(6,460 m)の初登頂に成功している。

1991年には、前年の12月から京都大学と合同で梅里雪山(6,740 m)に登山したチームが日本11人、中国6人が雪崩のため行方不明となった。また、JACと合同でナムチャ・バルワに挑んだが登頂に失敗した。

3. おわりに

中国は、多民族国家である。主たる「漢族」のほかには55の少数民族がいて、登山活動の場となる地域の殆どは、これら少数民族の住むところである。

このため多くの岳人は、登山計画が進むに連れて、訪れる先に生活している少数民族に関心を持

ち、かつ、これらの少数民族を知ることが、登山を成功させるために不可欠であることに思い至る。正にそのとおりである。

しかし、中国の場合、多民族国家の実態は、絶対多数を占める「漢族」が国家・政治の中心であることを理解の中心におかなければ、登山の成功はありえない。他の国のヒマラヤ登山と違って、中国登山は少数民族に対する深い関心と同時に、「漢族」の長い歴史や「中華思想」に代表される中国人の考え方、などについて一定の知識を身につけて実行することを勧めたい。

また、現在の中国は、世界でも独自の社会主義国家を目指している国である。好むと好まざるにかかわらず、中国流の解釈が全てを決定する。登山は戦争ではない。所詮相手国の許可があって成り立つものであり、契約万能主義をベースにして物を考えているとケンカが絶えない。間違っても主義主張が違うからといって、その相違を正そうとしないことだ。私達は、登山に行くが故に招待状が発行されたのであって、教育のための招待状ではないのだから。

呉々もこのことを肝に銘じて置くべきであろう。郷に入れば郷に従えである。

(文責：山森 欣一)



▲1986年9月H A Jが派遣した4つの登山隊はラサに集合した。ギャラ・ベリ(飛田和夫ら6名)、カルジャン(新郷信廣ら6名)、チョー・ウィ(八嶋寛ら10名)、ラブチェ・カン偵察隊(斎藤安平ら2名)

四川省高峰登山小史

登山年	登山内容
1928年	ジョセフ・F・ロックは、西康省ムリの北西にあるコンカリン山群を探査。
1929年	ジョセフ・F・ロックは、アメリカのナショナル・ジオグラフィック・ソサエティの遠征を率つれてミニヤ・コンカ山群を探査。
1930年	スイスの地質学者、アーノルド・ハイムは、8月から11月にかけてミニヤ・コンカ山群を探査・測量し、27万5千分の1の地図を作成。
1932年	ミニヤ・コンカ（7,556m） R・L・バードソル、A・B・エモンズ、ターリス・モーア、ジャック・ヤングの4人からなるアメリカの「西康遠征隊」は、ビュチュー谷側から北西稜を経て初登頂。 10月28日、登頂者はモーアとバードソル。
1956年	ミニヤ・コンカ（7,556m） 中国登山隊、偵察に入る。
1957年	ミニヤ・コンカ（7,556m）登頂 中華全国总工会隊（史占春隊長以下29名、内登山隊員は17名）は、6月13日に史占春隊長ら6名が登頂。然し、下山時に3名が転落死する。
1980年	ミニヤ・コンカ（7,556m） ・9月から10月にかけて2つのアメリカ隊が南西稜と北西稜から挑んだが、どちらも失敗した。南西稜隊（A・ハーワード隊長ら6名）は、6,250m迄で断念。北西稜隊（A・リード隊長ら6名）は、10月13日雪崩で1名死亡し2名が重傷となった為、6,000mで断念。 ・北海道岳連隊（京極紘一隊長ら6名）は、秋にハイローコーとイヤンツエーコーに入って偵察をした。
1981年	ミニヤ・コンカ（7,556m） プレ期に北海道岳連隊（川越昭夫隊長ら25名）が北東稜から挑んだが、5月10日のアタック時に8名が滑落死して断念。

登山年	登山内容
1981年	チョンチャン（6,886m） プレ期にスイス隊（R・ブーテリエ隊長ら10名）は、ハイローコーのB・Cから主峰（6,886m）と南峰（6,600m）に初登頂。 続いて載山（6,410m）と2つのピラミッド・ピーク（6,150m、6,020m）のロング・リッジ・ピーク（6,100m）にそれぞれ初登頂。他に5,480mから5,020mの5峰にも登頂。
1981年	チアズ（6,540m） プレ期にイギリス陸軍隊（H・デヒ隊長ら9名）は、北西稜から挑んだが、6,000mで断念。山群北西部偵察時にリウチ・コンカ（5,928m）に登頂（4月16日に2名）
1981年	スークーニャン（6,250m） ・同志社大学隊が4月から7月にかけて2隊を送り込んで登頂。 第一次隊（和田豊司隊長ら7名）は、ルート偵察後、南東稜にルートを決めて挑んだが5,620mで断念。引き続き7月から第二次隊（川田哲二隊長ら8名）が南東稜に挑み7月28日に2名登頂。29日、30日にも登頂する。（合計7名が登頂） ・ポスト期にはアメリカ隊（J・ドニニ隊長ら5名）が、北壁にルートを取って4名が登頂。
1982年	ミニヤ・コンカ（7,556m） ・プレ期に市川山岳会隊（齊藤英明隊長ら7名）が北東稜に挑んだが、頂上直下で断念。帰途1名遭難。 ・同じプレ期にスイス隊が初登ルートの北西稜に挑み、5月25日に登頂。頂上からの下降中に1名遭難。 ・また、カナダ隊（R・グリフィス隊長）も同じ北西稜を試みたが、悪天候のため稜線に達しただけで断念。 ・ポスト期にはアメリカ隊（J・マーフィ

登山年	登山内容
1982年	隊長ら7名が北西稜を目指し、10月3日に2名登頂。他に付近の5,800m級の数峰にも登頂。 チアズ(6,540m) ポスト期にアメリカ隊(F・ベッキー隊長ら6名)は、南稜から11月17日に初登頂。(3名登頂)西稜ルートも試みるも頂上直下で断念。
1983年	セレスティアル・ピーク(5,334m) 秋にアメリカ隊(エドワード・ヴェイル隊長ら6名)は、南西壁からの初登頂に成功した。
1983年	スークーニャン(6,250m) ・HAJ隊(角田不二隊長ら2名)は、秋に入山し北壁を試登した。
1984年	ミニヤ・コンカ(7,556m) 秋にドイツ隊(ゲハルト・シュマッツ隊長ら3名)は、北西稜から挑み10/6に全員登頂した。
1985年	ミニヤ・コンカ(7,556m) ・秋にチュン・キン・マン隊長ら3人の香港隊が北西稜を試登(5,700mまで)したが大雪崩が発生し九死に一生を得た。
1985年	セレスティアル・ピーク(5,334m) アメリカのキース・ブラウンが南東稜から単独登頂に成功した。
1986年	シュエバオ・ディン(5,588m) ・夏にHAJ(遠藤隊長ら10人)と四川省登山協会(鄭榮発ら6人)の合同隊が入山。8月5日4名が初登頂に成功した。翌日も9人が頂上に立った。
1986年	ゲニ(6,204m) ・秋にHAJの山森欣一が東面を偵察した。
1987年	ゲニ(6,204m) ・夏にHAJ隊(飛田和夫ら13人)が入山し、南東稜を登るも悪天候のため5,300m地点で断念した。
1988年	ゲニ(6,204m) ・春にHAJ隊(飛田和夫ら7人)が入山し、南稜から6月11日3名が初登頂に成功した。翌日も2度目の隊長を含む5人が

登山年	登山内容
	登頂した。
1988年	チェルー(6,168m) ・秋に神戸大学(北口博教隊長ら7人)と中国地質大学(朱発栄ら9人)の合同隊が入山し9月24日12人が初登頂に成功した。翌日に2人も登頂した。
1989年	シャラリ(6,032m) ・夏にHAJ隊(山森欣一隊長ら9人)が入山したが脆い岩のため5,500mで断念した。
1990年	ミニヤ・コンカ(7,556m) ・春に北海道山岳連盟隊(川越昭夫隊長ら5名)がヤンズーコー氷河に入り、北西稜を登ったが6,540mで断念した。
1990年	シュエバオ・ディン(5,588m) ・夏にさがみ家族山の会(山岸和男隊長ら名)が1986年HAJルートから登頂した。
1991年	ヤンゴンジャン(5,273m) ・夏に日本山岳会宮城支部隊(佐々木郁男隊長ら11名)が東面から挑み8月11日西郡光昭ら5名が初登頂に成功した。
1991年	シュエバオ・ディン(5,588m) ・夏にHAJ隊(酒井国光隊長ら13名)が入山し8月12日、13日に8名が登頂した。
1991年	シャオ・シュエバオ・ディン(5,540m) ・夏にさがみ家族山の会(山岸和男隊長ら12名)が入山し7月30日山岸隊長ら7人が初登頂に成功した。
1991年	スークーニャン(6,250m) ・夏に拓殖大学隊(井上功隊長ら8人)が西面に入り南東稜を目ざしたが5,630mで断念した。
1991年	ミニヤ・コンカ(7,556m) ・秋にHAJ隊(山森欣一隊長ら12名)が東面ハイローコー氷河から北東稜を登ったが6,400mで断念した。
1991年	ヤンモーロン(6,030m) ・秋に日本大学隊(佐藤彰隊長ら10名)が入山したが5,500mで断念した。

ミニャ・コンカの山谷風

宗 明 琨
(1985. 5)

山谷風は山の気候の主な特徴の一つであり、或いは山の地面風天候の変化の主要な特徴とも云われる。地面層の上を吹いてゆく風向きの変化に一定の運動法則があるとも云われ、日中は谷風が吹き夜間は山風が吹く。

ミニャ・コンカの場所は、横断山脈である大雪山の中心に位置し大渡河に面しており、標高は7,556 m あって横断山脈の中の最高峰である。

ミニャ・コンカ山脈は大体において南北に走っている。ミニャ・コンカの地形は急で険しく東面は山頂から大渡河までの標高差が6,400 m、西面の山頂までの標高差は4,500 m ある。このように巨大な高度差は必然的に気候と自然帯との垂直変化、気温、降水等の気候因子に著しい垂直変化を引き起こす。

ミニャ・コンカの地面風は明らかに山の気候の特徴を具えている。地面風の一日の風向変化は、山谷風を表しており、地面風の季節の風向変化は山谷風の転換時間と改変及び強弱を表している。

私達が、1982年6月15日ミニャ・コンカ西面のコンカ寺（標高3,770 m）に建てた気象観測センターの位置では、西、北、北西方向の風を谷風とし、筆者がコンカ寺の観測センターに277日間滞在し、その間に行った831回の観測記録から、次

表1 各風向頻率、平均風速表

風 向	各風向年頻率(%)	各風向年平均風速	備 考
西	7	1.9	
北	8	1.9	
北西	16	2.2	
北東	2	2.5	
南	31	1.8	
南西	7	1.7	
南東	12	1.9	
東	4	2.0	
C	13	0	静風

のような風向頻率(表1)及び一日の変化(表2)を得ることができた。

山谷風には明らかに規律的な一定の運動法則がある。夜風は山風(氷河風も含めて)が盛んに吹き、8時現在の山風頻率は58%。観測センターは氷河より割合遠いので氷河風(北東)はそれ程ではない。観測することのできた北東風の年頻率はただの2%であった。但し、風速はやはり割合大きく年平均風速は2.5 m/s。日中は谷風が盛んで14時現在の谷風年頻率は83%。20時現在の谷風頻率は52%である。

表2と筆者が67日間の観測記録と統計からみれば山谷風の転換時間にも大分規則的な一定の運動のきまりがあって、夏季の山風が谷風になる時間は割合早い。約8時20分前後に谷風が山風になり、23時以後には谷風の吹く時間が割合長い。

午前中の11時前後頃に谷風が山風になる時間はかえって割合早い。17時前後の頃山風が盛んに吹く時間は割合長い。表3のごとく1月の山風年頻率は8時で84%、20時で58%。観測したところによれば、山風が谷風になる時間は日の出の後1時間前後であり、これによって山谷風の物理成因(物理的な発生成立原因)を容易に知ることができる。即ち日の出以後、山の地面は太陽からの

表2 風向が一日に変化する頻率分布

時間 \ 風向	8時	14時	20時
山 風	58	8	32
谷 風	12	83	52
E	2	9	2
C(静風)	28	—	14

表3のごとく7月の谷風年頻率は8時で29%、20時で61%、冬季は山風が谷風になる時間は割合遅い。

表3 冬夏季山谷風の変化

時間	8時		14時		20時	
風向頻率	山風	谷風	山風	谷風	山風	谷風
月区分	山風	谷風	山風	谷風	山風	谷風
1	84	13	6	68	58	32
7	32	29	-	97	13	61

放射エネルギーを吸収して次第に暖かくなり、迅速に付近の地層と空気温度を高め周囲の同じ高さの自由大気の温度にも影響を及ぼすことになる。従って、低い層の大気中に反気旋式の局地環流が発生して地面の風は、山の上から川底に向かって吹いて山風となる。

表1と表2の中でE風を山谷風に入れたのはなく、E風の年頻率4%一日の変化分布は8時で2%、14時で9%、20時で2%。(即ち831回の観測中E風の合計は34回、8時に5回、14時に24回、20時に5回)日の出以後地面は次第に湿って空気の対流と湍流(急な流れ)は段々発展して、13時から15時にかけては強烈に発展して風向も変わり易い。(南、東、西、北西風が多く出現する)E風を代表とした急流の特徴は、午後に多く現れこれは実際の特徴にあてはまる。831回の観測中、34回のE風が現れ14時には24回現れ、この種の山地の対流と湍流(急流)運動は低層大気エネルギー交換の熱力となった。

観測資料の統計分析からは地面を吹く風の風速の変化のあることが明らかに見られる。夜間の地面の風速は割合小さく午後の風速は比較的大きい。(全ての年がこの通り)277日間の中8時の平均風速が、1.3 m/s、14時平均風速2.3 m/s、20時平均風速1.4 m/s。定時観測の最大風速が7.0 m/s。(1983年1月23日14時)

風向を東北東即ち湍流(急流)運動として冬期(11月~1月)8時の風速は、20時比べて風速が大きい。8時の平均風速が2.3 m/s、20時平均1.6 m/s。夏期(5月~7月)8時の風速は20時比べて小さい。8時平均0.9 m/s、20時平均1.5 m/s。

以上の資料で明らかにされたことは、冬期間は山風が比較的大きく谷風が割合弱い。それに反して、夏の季節に谷風が割合強く、そして山風が割合弱

い。表1から見られることは、山風の年頻率が3.3%、年平均風速2.1 m/s。谷風の年頻率50%、年平均風速1.8 m/s。谷風は山風の強さに及ばない。

筆者が1983年7月25日雲南省の梅里雪山明永氷河上の観測(24時間平均して山風が吹きまくる)によって得た体験と、以前の人が考察したチョモランマ峰の資料によって、氷河風は実際に存在することが証明されている。そしてこれらのことから、筆者はミニヤ・コンカには同様に氷河風は存在しており、雪線付近及び山谷氷河上に強烈に現れていると考えている。その他の場所にも山谷風が表現されている。その高度は標高5,000m~5,500mに達している。

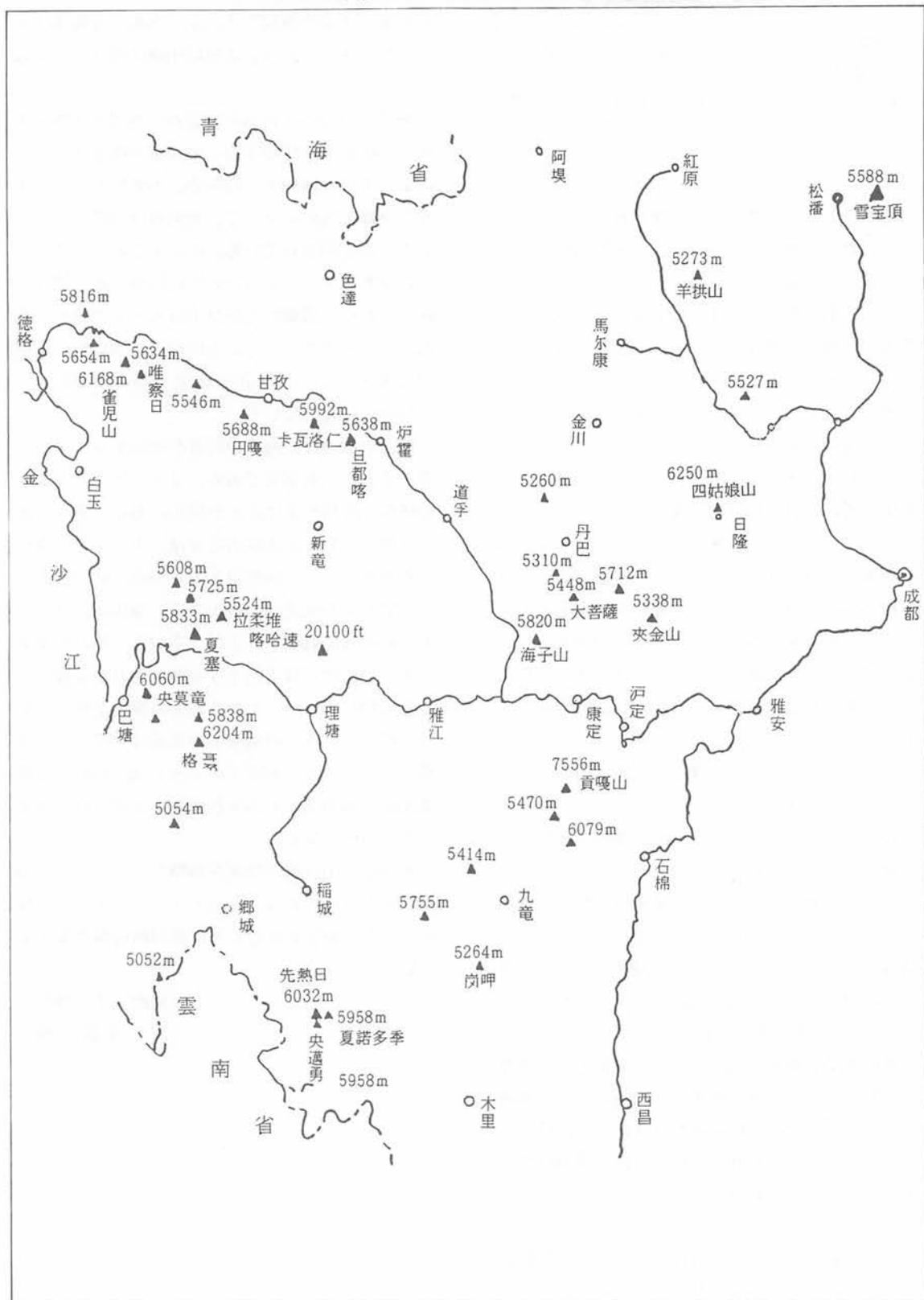
地面の風速は、海拔の高度が増加するにつれて増大することも事実である。ミニヤ・コンカ西面の林線は海拔約4,000mの場所にある。我々が測った標高3,700mの場所の風速は1.8 m/s、森林が障害物となって風を阻止する割合が比較的大きいので地面の風速は割合小さい。海拔4,000m以上の高所は、低灌木帯となっており、草むらや低い木等の植物が障害物となるが、それから被る阻滯率は割合小さい。だから地面の風速が増大すれば、標高5,000mの場所での風速は見積りでは年平均5~8 m/s、標高6,000mの高空帯では風速20m/s前後あって高度が増加するにつれて風速は更に大きくなる。

当該地の山谷風の特徴を理解してその一定の運動法則をのみこめば、登山・トレッキング及び牧畜の生産を進展させることに指導的役割を果せると思う。

(蘭州大学地理系)

(訳: 佐藤 博)

四川省内高峰位置图



ミニャ・コンカ参考文献

J. F. Rook: The Glories of the Minya Konka, NGM, Vol. 58, No. 4, 1930.

J. H. Edgar: Notes on the Mountains about Tatsienla, GJ, Vol. 82, Part 3, 1933, PP. 264-267

Arnold Heim: Minya Gongkar-Forschungsreisen ins Hochgebirge und Chinesisch Tibet, Bern, 1933. [小島公一郎抄訳「ミニャ・ゴンカァ」『探検』2号、1942年]

R. L. Burdsall and A. B. Emmons: Men against the Clouds, Harpers, 1935. P. 272

T. Moore: The Ascent of Minya Konka, AJ No. 247, 1933, PP. 290-304

—: The Minya Konka Climb, AAJ, Vol. 11, No. 1, 1933.

黒田孝雄「1932年のミニャ・ゴンカァ登攀概報」『日本山岳会会報』34号、1934年。

Shih Chan-Chun: The Second Ascent of Minya Konka, AJ, No. 297, 1958. [関谷太郎訳「ミニャ・ゴンカァ登頂」『岳人』130号、1959年]

史占春「ミニャ・ゴンカァ征服」『人民中国』

北京、1964年。

Eduard Imhof: Der Minya Konka, Geographica Helvetica (Bern), 2, 1947, S. 243-255, mit Karte, 1: 843, 000.

深田久弥「ミニャ・コンカ」『岳人』世界百名山(5)、275号。

望月達夫「ミニャ・ゴンカ山群」(『山岳』第35年2号、1941年)

小島公一郎「ミニャ・ゴンカァの山名について」(『探検』2号、1942年)

—以上は深田久弥著「ヒマラヤの高峰」掲出—

ミニャ・ゴンカァ登頂 —1957年6月の記録—
シー・チャンチュン著 関谷太郎訳 岳人 130号 1959, 2

「山中の王」貢嘎山登頂 中国登山隊 新華社特派員・周祖佑(述) 大曾根純編訳 山と溪谷 219号 1957, 9
(P. 114 に掲出したものを除く)

隊員の中国語発音

shān	sēn	xīng	yī	hé	nèi	zhèng	shù
山	森	欣	一	河	内	正	樹
sōng	guǎn	zhèng	yì	jū	chuān	kāng	yòu
松	館	正	義	居	川	康	祐
yī	téng	qīng	chūn	lín		yǎ	shù
伊	藤	清	春	林		雅	樹
sēn	gǔ	yǎ	chūn	qiān	yè	zhēn	sì
森	谷	雅	春	千	葉	真	嗣
sōng	tián	jìng	yàn	gāo	jiàn	qīng	shí
松	田	靖	彦	高	見	清	十
zhōng	chuān		yù	chuān	shàng		háo
中	川		裕	川	上		豪

四川省登山の和文参考資料一覧

(1979年開放以後のもの)

- 1) ミニヤ・コンカ (Minya Konka) 7,556 m
 - 1. 貢嘎山 (1981年ミニヤ・コンガ7,556 m登攀と遭難の記録) 北海道山岳連盟 1982年12月30日
 - 2. 貢嘎の東 (中国四川省大雪山脈貢嘎山7,556 m偵察の記録) 北海道山岳連盟 1981年3月1日
 - 3. 手記・さようなら、北壁に逝った友よ (阿部幹雄) 「山と溪谷531号」1981年8月号
 - 4. さようなら、ミニヤ・コンガの友 (阿部幹雄) 「山と溪谷531号」1981年8月号
 - 5. ゴンガ山・銀雪の王 (羅仕明) 「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
 - 6. ゴンガで遭難した松田隊員救出記 (曾慶南) 「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
 - 7. ドキュメント：ミニヤ・コンカ大生還へのミステリー (徳丸荘也) 「山と溪谷546 & 547号」1982年8 & 9月号
 - 8. インタビュー：「ここでは絶対にしねない」 (編集部) 「岳人423号」1982年9月号
 - 9. ミニヤ・コンガの奇跡 (救出、治療の戦い) 李高中「岳人423号」1982年9月号
 - 10. ミニヤ・コンカ奇跡の生還 (松田宏也) 山と溪谷社 1983年1月20日 900円
 - 11. 手記：ミニヤ・コンカからの生還 (松田宏也・構成徳丸荘也) 「山と溪谷552号」1983年1月号
 - 12. ミニヤ・コンガの生と死 (編集部) 「岩と雪90号」
 - 13. 山一青春 菅原信・中谷武両君に捧げる 市川山岳会ミニヤコンガ登山隊 1984年5月
 - 14. 1982年ミニヤコンガ遭難の記録 市川山岳会ミニヤコンガ登山隊 1984年5月
 - 15. 登山史を語る山道具 (松田宏也の装備品) 「山と溪谷615号」1986年12月号
 - 16. 貢 山 (ミニヤ・コンカ7,556 m) 貢嘎山 実行委員会 1990年6月
17. シャクナゲとパンダとミニヤ・コンカ—中国四川省の自然探求トレッキング (富山稔) 「山と溪谷668号」1991年3月号
18. ミニヤ・コンカを目指して—HAJ MINYA KOKA EXP 1991 — 「ヒマラヤ238号」1991年9月号
19. 西康の大地に聳える天壇の山 ミニヤ・コンカ峰登山記 「ヒマラヤ242号」1992年1月号
- 2) スークーニャン (Siguniang) 6,250 m
 - 1. 四姑娘山1981 同志社大学体育山岳部 1982年10月24日
 - 2. 壮士征姑娘羅姑娘愛壮士 鋭峰・四姑娘山の初登鋭 (川田哲二) 「岳人412号」1981年10月号
 - 3. 四姑娘山・やさしい乙女 (羅仕明) 「月刊 人民中国」1982年7月号
 - 4. 中国四川省・四姑娘山群のビッグ・ウォールを攀る (エリック・パールマン) 「岩と雪106号」
 - 5. 四姑娘山の旅 (角田不二) 「ヒマラヤ145号」1983年12月号
 - 6. 四姑娘山の自然 (山岸喬) 「ヒマラヤ150 & 151号」1984年5 & 6月号
 - 7. 四姑娘山の山旅「ヒマラヤ153号」1984年8月号
 - 8. スークーニャンの山旅 (小林英見) 「ヒマラヤ157 & 158号」1984年12 & 1985年1月号
 - 9. 大姑娘山麓トレッキング (伊佐九三郎) 「山と溪谷社630号」1988年1月号
 - 10. 遥かなり白き姑娘の微笑み 中国四川省未踏峰四姑娘山初登頂 (吹田佳晴) 京都通信社 1990年10月 3,000円
- 3) ゲニ (Geni) 6,204 m
 - 1. 格聂 (ゲニ) 偵察報告 (山森欣一) 「ヒマラ

- ヤ 183号」1987年2月号
2. 神の山、ゲニ登山計画「ヒマラヤ 189号」
1987年8月号
 3. 神の山、ゲニ峰 残してしまった課題（飛田和夫）「ヒマラヤ 192号」1987年11月号
 4. 神の山、ゲニ峰 日本ヒマラヤ協会 昭和62年12月1日
 5. 神の山、ゲニ峰—H A Jゲニ峰登山隊計画「ヒマラヤ 199号」1988年6月号
 6. 神の山、ゲニ峰初登頂「ヒマラヤ 202号」
1988年9月号
 7. 白く輝く神の山・ゲニ初登頂（飛田和夫）
「山と溪谷 638号」1988年9月号
 8. 未踏の秘峰 ゲニ初登頂（飛田和夫）「岳人
495号」1988年4月号
 9. 雨の山晴れの山 秘峰ゲニ初登頂（遠藤京子）
「岳人 495号」1988年9月号
 10. 神の山 格婁峰（1988年初登頂の記録）日本
ヒマラヤ協会 1989年6月12日
- 4) チェルーション (Chola Shan) 6,168 m
1. 中国の未踏峰チェルーションに日中学生合同で14
人が登頂（神戸大学・中国地質大学合同登山
隊）「岳人 500号」1989年2月号
 2. 日中合同登山隊のチェルーション山登頂とその意義
（平井一正）「山 522号」1988年12月号
 3. チェルーション初登頂（神戸大学・中国地質大学
〔武漢〕合同登山隊）「山岳第84号」日本山
岳会 1989年12月20日 3,500円
- 5) シャラリ (Xiarali) 6,032 m
1. 桃源境への旅 シャラリ登山計画「ヒマラヤ
210号」1989年5月号
 2. 桃源境への旅 もう一つのチベット シャラ
リ峰登山記「ヒマラヤ 216号」1989年11月号
 3. もう一つのチベットへ 桃源境への山旅
シャラリ峰登山の記録 日本ヒマラヤ協会
1990年3月
- 6) シュエバオ・ディン (Xuebao Ding)
5,588 m
1. 雪宝頂及びその姉妹峰について（鄭業発）
「ヒマラヤ 174号」1986年5月号
 2. 岷山の霊峰へ（日中四川雪宝頂合同登山計画）
「ヒマラヤ 177号」1986年8月号
 3. 天府の霊峰 雪宝頂「ヒマラヤ 180号」1986
年11月号
 4. 日中合同雪宝頂登山の印象（羅凡）「ヒマラ
ヤ 185号」1987年4月号
 5. 天府の霊峰 雪宝頂 日本ヒマラヤ協会
1987年8月5日
 6. 天府の霊峰 雪宝頂を目指して—1991年雪宝
頂登山隊計画「ヒマラヤ 237号」1991年8月
号
 7. 天府の霊峰 雪宝頂登頂—1991年夏の記録—
「ヒマラヤ 240号」1991年11月号
 8. 美しき白い峰・小雪宝頂 中国四川省・小雪
宝頂登山隊報告書 さがみ家族山の会
1991年10月12日
- 7) ミンシャン
1. 岷山の秋・1983 中国ナムチャ・バルワ登山
隊強化合宿の記（角田不二）「ヒマラヤ 148
号」1984年3月号
 2. 中国人の岩登り訓練—1983年—「HIMALA
YA 日本ヒマラヤ協会年報Ⅲ」昭和61年9月
15日

西康省とは

旧省名。今の四川省西部から西藏（チベット）自治区東部にかけての地域を管轄していた。1914年川辺特別区が設置され、1928年西康省と改められた。まず西康建省委員会が設けられ、1939年もと四川省所属の雅安県、西昌県が編入され正式に成立した。

1950年、金沙江以西が昌都地区と改められ、1955年西康省が撤廃され、金沙江以東の地区は四川省に編入、1956年、昌都地区は西藏自治区に編入された。

（現代中国地名辞典 1981年11月 学習研究社）

西康省の和文参考資料一覽

(主なもの)

番号	書(題) 名	著者名	出版社(出典書名)	発行年月
☆歴史				
0258	西康に於ける漢藏関係	中嶋 敏	史学雑誌 55-1	1944. 1
0268	西康問題について	西山 栄久	東亜経済研究 16-4	1932. 10
0277	西康の共産合流軍大挙新疆に移動か		善隣協会調査月報 50	1936. 7
0279	三巴の西康政情 — 西藏青年党の抬頭 —		" 59	1937. 4
0281	康藏に於ける喇 教徒の動向	橋本 光宝	" 76	1938. 9
0282	西康問題の発現と経緯	長谷川 了	" 76	"
0283	川康問題の意義		" 76	"
0284	支那辺疆に於ける西康の地位	中村 常三	" 76	"
☆地理				
0317	西康省事情		外務省調査部 111(調査132号)	1938. 3
0319	支那西康事情	楊仲華・著	村田孜郎訳 誠文堂新光社	1941.
0360	西康省に関する文献	上里美須丸	東亜研究所報 10	1941. 6
0371	中国康藏高原の地勢と資源	李 原・著	外務省アジア局第二課訳	1954. 7
0385	成都のチベット名について	榎 一雄	東洋学報 31-1	1947. 2
0431	入藏途次見聞雑記(1)	能海 寛	仏教 158、159	1900.1~2
0432	能海氏通信(打箭炉在留)		仏教 160	1900. 4
0462	西康異聞考(上)(下)	竹内 夏積	イスラム 2、4	1938.1~7
0469	巴塘附近にて エルンシス・シェーファー・著		調査部訳 蒙古 110	1941. 8
0489	チベット紀行		人民中国 2~4月	1956.2~4
0553	西康西藏踏査記	劉曼卿・著	松枝茂夫・岡崎俊夫訳・改造社	1939
0641	蔵蒙旅日記	寺本 婉雅	横地祥原編 芙蓉書房	1974
☆その他				
0657	四川・西康・広西省経済地理 エル・ボプロフスカヤ・著		東亜研究所訳 東亜研究所	1941
0658	西康省 — 経済地理的概観 —	"	中川訳 蒙古 107	1941. 5
0659	辺疆支那の経済事情—最近における西康の経		D.ハンウエル 蒙古 87	1939. 8
0661	西康省の租税制度	小林幾次郎	蒙古 98	1940. 7
0745	チベット、四川、寧夏、黒龍江新党委内情		問題と研究 1-3	1971. 12
2666	西康の歌舞芝居について	任乃強・著	長尾欣二郎訳 蒙古 116	1942. 2
2679	ケサル王物語 — カチェ章について —	金子 英一	仏教論叢 19	1975. 10
2831	西康に生ける化石・野牛 エルンスト・シェーフ	エル・著	江森盛弥訳 蒙古 85	1939. 6
2843	金沙江の竹娘説話	君島 久子	文学 41-3	1973. 3
2891	Phonemics of the Muli Language	長野 泰彦	学会々報 21	1975. 3
2901	十六世紀における西康省チベット語天全方言	西田 龍雄	京都大学文学部研究紀要 7	1963. 3
2902	西蕃館訳語の研究		(華夷訳語研究叢書 I) 松香堂	1970

H A J 7,000m峰登山の足跡

(1975年～1991年)

H A Jの7,000m峰への挑戦は、1975年夏のインド、ヌン峰から始まった。それ以来、今回のミニヤ・コンカを含めて18座23回登山したのである。結果は、初登頂8座。登頂5座8回。試登5座6回。合同で初登頂に成功したものの日本側は登頂できなかった1座である。内訳は下記のとおり。

- ①ヌン(7,135m)インド、カシミール・ヒマラヤ
1975年7月～9月 西郡光昭隊長以下日本側7名
インド側1名。北西稜約7,000mまで。
- ②コムニズム(7,495m)旧ソビエト、パミール
1977年7月～8月 増田秀穂隊長以下3名。8月
10日内田嘉弘、高橋純一が登頂に成功。
- ③バツラII(7,730m)パキスタン、バツラ
1978年4月～7月 西郡光昭隊長以下10名。7月
6日南西壁から石川裕司、伊東満、大久保真の3
名が初登頂に成功。
- ④ヌン(7,135m)インド、カシミール・ヒマラヤ
1978年7月～8月 沖允人隊長以下9名 8月22
日西稜から東英樹、高橋太郎、ニマが登頂に成
功。次いで飯村富彦、寺本政幸、ナワンも第二
次登頂に成功した。
- ④トリスルI(7,120m)インド、ガルワール
1978年8月～10月 稲田定重隊長以下19名。9月
28日未踏の南稜から角田不二、飛田和夫、八嶋寛、
中岡久、高原修、西田茂夫の6名が初登攀に成功。
- ⑤ランタン・リ(7,205m)ネパール、ランタン
1981年8月～10月 植松秀之隊長以下日本側7名、
ネパール側3名の合同隊、10月10日山田昇、若尾
巻広、那須宗一、アン・リンジの4名が南西稜か
らの初登頂に成功。11日には飯沢実、中岡久の2
名が第二次登頂に成功した。
- ⑥クン(7,077m)インド、カシミール・ヒマラヤ
1982年7月～8月 山森欣一隊長以下17名。8月
9日南面C2直下の岩壁から発生した岩雪崩のため
勝山教孝隊員が死亡登山中止。6,250mまで。
- ①ヌン(7,135m)インド、カシミール・ヒマラヤ
1983年7月～8月 飛田和夫隊長以下6名 8月
16日西稜から角田不二、細貝登、熊田雅史の3名
が登頂に成功した。
- ⑦ジチュ・ダケ(7,012m)ブータン、西部
1984年4月～5月 八木原罔明隊長以下9名。5
月20日未踏の東稜から南峰(約7,000m)に八木原
罔明、出口當、須藤圭一、原守哉、新舛憲三の5
名が初登攀に成功した。
- ⑧マモストン・カンリ(7,526m)インド、東部カ
ラコルム。1984年7月～9月尾形好雄隊長以下日
本側5名、インド側8名の合同隊。9月13日東稜
から山田昇、吉田憲司、チョーハン、ダス、ラジ
ブの5名が初登頂に成功。次いで15日にも尾形好
雄、新郷信廣、岩崎洋、マハビール、ラッタンの
5名、16日には、サンドウ、プロフィットの2名
も登頂に成功した。
- ⑨サセール・カンリII(7,518m)インド、東部カ
ラコルム。1985年7月～9月 沖允人隊長以下日
本側5名インド側13名の合同隊。北西稜から9月
7日ワンドウ、ドルジュ、チョルドン、スマンラ
の4名が西峰の初登頂に成功した。8月30日アン
チョックがC3から下降中転落死亡した。日本側
の登頂は成らなかった。
- ⑩ガンケル・プンスム(7,541m)ブータン
1985年8月～10月 大内倫文隊長以下10名。中央
稜約6,800mまで。
- ⑪クラウン(7,295m)中国領カラコルム
1985年8月～10月 館野秀夫隊長以下10名。東壁
約6,300mまで。
- ⑫チョー・ウィ(7,354m)中国、ネパール国境
1986年9月～11月 八嶋寛隊長以下10名。10月12
日遠藤幸寿、志小田美弘、松木克雄、江村克志の
4名が北西稜より初登頂。次いで14日八嶋寛、小
野寺光義、佐藤修、石川啓志、山田敏雄、大久保

主計の6名も登頂に成功した。

⑬カルジャン(7,216m) 中国、クーラ・カンリ山群
1986年9月～11月 新郷信廣隊長以下6名。10月14日新郷信廣、友田健治、岩崎洋の3名が北西稜より初登頂。16日にも宮崎勉、保坂昭憲が登頂に成功した。

⑭ギャラ・ペリ(7,294m) 中国、グレートバンド
1986年9月～11月 飛田和夫隊長以下6名。10月31日尾形好雄、橋本康弘、今村裕隆の3名が南稜より初登頂に成功。

①ヌン(7,135m) インド、カシミール・ヒマラヤ
1987年7月～9月 木下祥子隊長以下5名。8月27日小泉恵子、貝塚珠樹、カルマの3名が西稜より登頂に成功。

⑮ラブチュ・カン(7,367m) 中国
1987年9月～11月 山森欣一隊長以下日本側9名。10月26日ワンジャ、ジャラ、ダチョ、ラジ(女)、

出口當、古川英勝、須藤圭一、田辺治の8名が西稜から初登頂に成功。次いで翌27日ラバ、プルー、アカプー、トン・ロ(女)、小川貞夫、橋本康弘、高橋俊也の7名も登頂した。

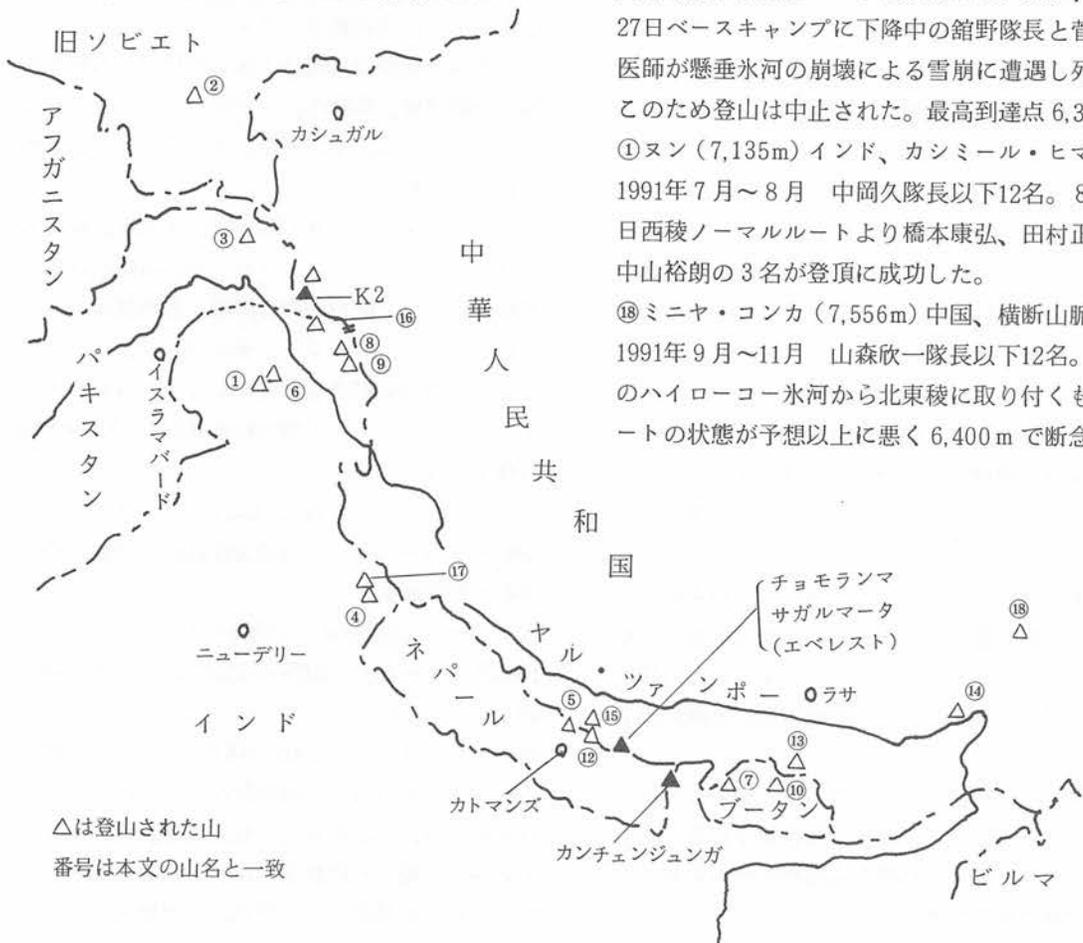
⑯リモI(7,385m) インド、東部カラコルム
1988年6月～8月 尾形好雄隊長以下日本側7名、インド側10名の合同隊。7月28日尾形好雄、吉田秀樹、サマンラ、ラッタ・シン、カネイヤ・ラルの5名が南壁から初登頂に成功。次いで29日渡辺斉、新郷信廣、二俣勇司、シェルプ、ヌタヌ、の5名が登頂。30日に高橋純一も登頂した。

⑰サトバント(7,075m) インド、ガンゴトリ山群
1990年7月～8月 保坂昭憲隊長以下10名。8月10日保坂昭憲、関根幸次、天城敬彦、桶川和気夫、後藤文明の5名が登頂成功。次いで翌11日遠藤京子、平川宏子、滝田収、中川裕の4名も登頂した。

⑩クラウン(7,295m) 中国領カラコルム
1990年8月～10月 館野秀夫隊長以下7名。前回同様順調に東壁にルートを経由していたが、9月27日ベースキャンプに下降中の館野隊長と菅沼勲医師が懸垂氷河の崩壊による雪崩に遭遇し死亡。このため登山は中止された。最高到達点6,320m。
①ヌン(7,135m) インド、カシミール・ヒマラヤ
1991年7月～8月 中岡久隊長以下12名。8月14日西稜ノーマルルートより橋本康弘、田村正勝、中山裕朗の3名が登頂に成功した。

⑱ミニヤ・コンカ(7,556m) 中国、横断山脈
1991年9月～11月 山森欣一隊長以下12名。東面のハイローコー氷河から北東稜に取り付くも、ルートの状態が予想以上に悪く6,400mで断念した。

H A J 7,000m峰の足跡概念図



外国人訪中登山管理法

(中華人民共和国体育運動委員会令第16号)

1991年7月31日国務院認可の『外国人訪中登山管理法』を、ここに公布、施行する。

1991年8月29日

主任：伯紹祖

第一章 総 則

第1条 外国人の中国領内登山の管理強化と国際的登山交流の組織的推進、中国登山事業の発展促進を目的として、本管理法を制定する。

第2条 外国人が下記の中国領内対外開放山岳へ登攀する場合並びに同山岳区内において研究調査、測量活動を伴う登山をおこなう場合に、本管理法が適用される。

(1)チベット自治区の海拔5千メートル以上の山岳

(2)その他の省、自治区の海拔3千5百メートル以上の山岳

第3条 中国領内において登山活動をおこなう外国人は、中国の法律を遵守しなければならない。また、外国人の正当なる権益は、中国の法律によって保護される。

第4条 外国人の中国領内登山に対する管理は、一元的指導、責任分担を原則とする。

第5条 対外開放山岳は、中華人民共和国国家体育運動委員会（以下、国家体育委と略称）及び公安部より、公布される。

第二章 訪中登山手続

第6条 訪中登山をおこなう外国人は、自らの登山隊を組織することができる。また、外国隊と中国隊の合同登山隊を組織することもできる。

第7条 訪中登山をおこなう外国人は、国家体育委に対して文書で申請するものとする。

外国人により組織される登山隊が訪中登山をお

こなう場合、外国隊自らが申請書類を提出する。または、中国の省、自治区登山協会に委託して代理申請をすることもできる。

外国隊と中国隊の合同登山隊の場合、中国隊が申請書類を提出する。

第8条 国家体育委は、外国隊或いは中国・外国合同隊の登山申請を受理した後、60日以内にその許否決定をおこなう。併せて、外国隊或いは中国・外国合同隊、代理申請の省・自治区登山協会及び登山活動のおこなわれる省・自治区体育委に対し、文書でこれを通知する。

第9条 国家体育委の登山許可通知を受けた外国隊は、通知書に記載される登録料を納付し、併せて、通知書の指定する機関との間で、協定書に調印する。

外国隊と登山協定書に調印した機関（以下、中国側調印機関と略称）は、協定書副本を速やかに国家体育委に送付し、行政登記をおこなうものとする。

第10条 国家体育委に送付され、行政登記を済ませた協定書については、任意の内容変更があってはならない。記載内容の変更は、協定書調印双方の協議、確認を必要とし、また、登攀の季節、ルート、山岳の変更については、改めて国家体育委の審査、許可を得なければならない。

第11条 外国隊は、中国領内登山経費の予算全額を、入国1カ月前に中国側調印機関宛て為替送金しなければならない。併せて、国家体育委の通知書に拠り、中国在外公館において査証取得手続をおこなう。

第三章 登山活動

第12条 外国隊は、登山開始の前に、同隊に随行する中国公民の保険手続をおこなう。また、国家体育委の求めに従い、山岳地区の自然環境を保護するための各種措置を実行する。

第13条 外国人は、登山に際して以下の規定を遵守しなければならない。

- (1) 登攀は、国家体育委の許可した山岳、ルートに従っておこなう。別の山岳に登攀したり、許可ルートを外れたりしてはならない。また、登攀する山岳、ルートを外国隊間で相互に取り替えてはならない。
- (2) 外国隊は、本来の隊員以外に人員を加えてはならない。
- (3) 外国隊が、その所属国国旗を掲示する場合、中国国家体育委の同意を得るとともに、当該国旗と同規格の中国国旗をも掲示する。
- (4) 使用する山岳名称及び高度は、中国政府関係部門公布のものを標準とする。
- (5) 登山ルート及びキャンプ地の環境衛生保持に努め、みだりに記念品、その他の物品を置いてきてはならない。
- (6) 登山活動の結果並びに登山活動中の偶発事故については、速やかに国家体育委及び中国側調印機関に届け出る。

第14条 登山活動を終了した外国人は、登山隊としての総括報告書を作成する。

当該登山活動総括報告書及び登山期間中に撮影・録音した音声・映像資料は、国家体育委並びに登山活動のおこなわれた省、自治区の体育委に対し、無償提供されるものとする。

第15条 中国領内の山岳登頂に成功した外国人に対しては、国家体育委によって確認の後、登頂証明書が交付される。

第16条 中国領内において登山をおこなう外国人については期間中、中国側連絡員が随行する。同連絡員は中国側調印機関が指定し、以下の職務を遂行する。

- (1) 外国人が中国の関連法規を遵守するよう協力、監督する。
- (2) 外国人が登山活動中に遭遇する諸問題の解決に協力する。
- (3) 中国側調印機関に対し、状況報告をおこなう。

(4) 外国人と中国側連絡員間の紛争を仲裁する。

第17条 外国人の登山活動が中国公民のサービス提供を必要とする場合は、中国側連絡員がこれを取り扱う。

中国公民の外国人に対するサービス提供は、報酬を受けられることができる。サービス報酬の項目及び標準額は、国家体育委より公布される。

第18条 外国隊は、随行する中国公民に対し医療、救急措置のほか、宿営、炊飯に必要な用具を提供しなければならない。

外国隊は、中国側連絡員の同意なく、任意に随行の中国公民を解雇したり、または手当の支給を停止してはならない。

中国・外国合同隊が随行の中国公民に提供する医療、救急措置、宿営・炊飯用具等については、合同隊を組織する双方により協議されるものとする。

第四章 研究調査、測量を付帯する登山

第19条 研究調査、測量を伴う登山については、登山申請と同時に、国家体育委に対して研究調査、測量の実施計画を届け出、国家体育委を通じて、国家科学技術委員会または国家測量局の審査及び許可を受けなければならない。

外国人登山者は、研究調査、測量計画の許可なく、通過地区の生物、岩石、鉱物、氷雪、水質、土質に対する体系的観察、標本、サンプル、化石の採集並びに測量活動をおこなってはならない。

第20条 研究調査を伴う登山活動をおこなった外国隊或いは中国・外国合同隊は、中国側調印機関を通じ、国家科学技術委員会に対して下記のサンプル及び資料を提出しなければならない。

- (1) 採集した標本、サンプル、化石の明細表
 - (2) 発見した新種動植物或いは稀種動植物の種群
 - (3) 採集した新種動植物の正基準標本、稀種動植物の種群標本
 - (4) 標本、サンプル、化石の屋内分析結果
 - (5) 研究調査を伴う登山によって得られた音声、映像資料の複製版
- 測量を伴う登山活動をおこなった外国隊或いは

中国・外国合同隊は、中国側調印機関を通じ、国家測量局へ測量成果の副本または複製版を提出しなければならない。

第五章 登山物資の持ち込みと持ち出し

第21条 外国人の登山において、携行必要な物資の持ち込みは、『特別輸入許可物品』と『一時輸入物品』とに分けて申請し、税関の審査、許可を受けた後、納税、担保手続をおこなう。

第22条 登山物資のうち、適当量と認められる専用食品、救急薬品、防寒衣料、燃料等消耗物品は、特別免税品として持ち込むことができる。但し、適当量を超過するものについては、課税されるものとする。

国家関係部門の許可する通信、撮影、録画、測量機材と専用輸送車両については、一時免税品として持ち込むことができ、登山活動終了後は、再び持ち出さなければならない。

特別の理由により再持ち出しが困難な場合、国家体育委を通じ国家関係法規に従って処理手続を取らなければならない。

第23条 外国隊、或いは中国・外国合同隊が、登山に際し採集した標本、サンプル、化石及び作製した音声、映像資料は、関係部門の検査許可を受けた後、携行して持ち出すことができる。

第六章 罰 則

第24条 訪中登山の外国人が、本管理法第12条、第13条、第18条、第19条、第20条の各規定に違反するか、或いは国家体育委の許可なく、恣意的登山をおこなった場合、国家体育委または省、自治区体育委は、情状の軽重によって、それぞれ警告、五千元以上五万元以下の罰金、登山活動停止の処分をすることができる。

本管理法第19条並びに第20条の規定違反に対しては、さらに国家体育委または省、自治区体育委は、採集した標本、サンプル、化石及び資料没収の単一罰或いは併合罰を科すことができる。

第25条 行政処分決定に不服の当事者は、中国関係法規の定めに従い、まず行政処分再審査を請求す

ることができる。さらに、同再審査決定に不服の当事者は、中国関係法規の定めに従い、行政訴訟を提起することができる。

当事者が、規定期限内に不服再審査の請求、行政訴訟の提起をおこなわず、且つ期限を過ぎてなお決定処分に従わない場合、処分決定行政機関は、人民法院に対し強制執行を申請することができる。

第七章 付 則

第26条 台湾、香港、マカオ同胞の帰省登山については、本管理法規定を参照、適用する。

第27条 本管理法は、国家体育運動委員会によって解釈される。

第28条 本管理法は、公布の日より即日施行される。

(訳：于莉玲)

— P 127 から続く —

六、撮 影 料

8 5 0 0 m以上の山	6,7 6 0 ドル
8 0 0 0 m以上の山	5,4 1 0 ドル
7 5 0 0 m以上の山	4,6 0 0 ドル
7 0 0 0 m級の山	4,0 6 0 ドル
6 0 0 0 m級の山	2,7 0 0 ドル
5 0 0 0 m級の山	1,9 0 0 ドル
5 0 0 0 m以下の山	1,3 5 0 ドル

外国登山隊に対する 登山費用徴収規定

第一条 自費で中国の山を登る外国登山隊を対象に、「外国人訪中登山管理法」第17条の規定に基づき本規定を定める。

第二条 外国登山隊は、本規定に従って各費用を支払わなければならない。また、各費用の金額はUSドル建てになっている。

第三条 外国登山隊は、次の費用を支払わなければならない。

(一) 登録料、預託金および予算費用

1. 外国登山隊は、中国側の関係部門と議定書を結ぶと同時に、中国登山協会に登録料を納付する。
2. 外国登山隊は、定められた期限内に預託金を納付する。納入された預託金は予算費用の一部に充てる。
3. 外国登山隊が、自己都合によって遠征を取り消した場合、既に納入した登録料と、預託金のうち50%～100%は返戻されない。
4. 外国登山隊は、中国に入学する一ヶ月前までに予算費用の全額を納入しなければならない。

(二) 都市部のサービス費用

1. 外国登山隊（登山隊に随行する中国側要員も含む）は、山への沿線における市内でのサービス費用を請負い式で請求される。
2. そのサービス費用には、以下の費用は含まれていない。
 - 登山隊と一緒に入・出国することが出来ない登山隊員についての出迎えおよび見送りの費用
 - 25kgを超える手荷物および貨物の運送にかかる費用
 - 2ドルを超える観光地の入場料
 - 遠い郊外への観光ツアーにかかる交通費
 - 小さな手荷物の保管料
 - タクシー代金
 - クリーニング料金
 - 医療費
 - 電話料金
 - 飲み物代
3. 外国登山隊は、自己都合によって、日程および人数を変更した場合、それによって生じた損失について負担しなければならない。

(三) 中国側の連絡官および他の要員の費用

1. 報酬金
 - 登山活動に参加する日から終わる日まで、人ごとに日数で計算する。
2. 山での食事費用
 - 中国側の要員の山での食事は、人ごとに実際に食事した日数で計算する。
3. 登山装備の費用（キャンプおよび専門用具を除く）
 - 一回の登山ごとに計算する。
4. 生命保険および医療保険費

(四) 山への交通費および運送費

1. 車の賃借料は、車型、走行距離および停車日数に従って計算する。また、空車の帰路費用は別に徴収する。
2. ベースキャンプの当番車は、走行距離のほかに、停車日数に応じて停車費用を徴収する。
3. 登山用の専用道路については、道路補修費を徴収する。

4. ラクダ、ヤクおよび馬の雇用料金は、実際の使用日数および滞在日数に応じて計算する。雇用期間内に動物が死亡した場合は、その地方の規則に従って補償する。

(五) ベースキャンプでのゴミの処理費用

(六) 山への沿線および登山途中で撮影、または広告にあたる記念物を設置する場合は撮影料および広告費用を支払わなければならない。

(七) 管理費

登山活動にかかる総額の五パーセントを徴収する。

本規定の各項目の費用の金額については、中国登山協会によって毎年公布される。

(第四条) 外国登山隊が、中国へ持ち込む物品・装備については、輸入税を支払わなければならない。

(第五条) 外国登山隊に対するサービス項目（例えば航空券、汽車の切符、郵便、通信、ガソリン、食品、装備）などについては、中国の規定に基づきサービス料金を徴収する。

(第六条) 本規定の解釈権は、中国登山協会に属する。

(第七条) 本規定は、公表された日から発行する。

中国登山協会

一九九二年一月一日

(訳出：張湘偉)

徴収費用の金額

(1992年度)

一 登録料および預託金

(単位：USドル)

山の種類	登録料	預託金		
		入国の1年前までに	入国の半年前までに	入国の1月前までに
チョモランマ	5000	5000	5500	予算全額の全残額
チョー・オユー	3000	2160	2700	〃
シシャパンマ	3000	2160	2700	〃
その他の八千米峰	1760	2160	2700	〃
7000m級の峰	1080	-	2160	〃
6000m級の峰	700	-	2160	〃

(注1) 団体の人数（第三国で雇用した高所ポーターを含む）が20人を超えた場合の登録料については、超過人数1人につき八千米峰は200ドル、七千米峰は100ドルを別に徴収する。

(注2) 6000m未満の山（岩登りを含む）の登録料は、1人につき30ドルとする。

(注3) 初めて解禁された山、あるいは未踏峰に登山する場合は、特別登録料を徴収する。

8000m以上の山 27,000～41,000ドル

7000m級の山 13,500～27,000ドル

6000m級の山 8,100～13,500ドル

6000m未満の山 2,700～8,100ドル

(注4) 2ヶ国以上の外国人（第三国で雇用した高所ポーターも含む）が参加する登山隊の登録料は、参加する一ヶ国につき別に10%を徴収する。

(注5) 新しいルートに登山する場合の登録料は、通常ルートの200%とする。

(注6) ある特殊な山を解禁する場合は、中国登山協会は別の規定に基づき特別な料金を徴収する。

二、都市部のサービス費用

(単位：USドル/人日)

地区	人数	1人	2～5人	6～9人	10人以上
北京		104.9	63.2	43.2	36.0
新、青、四、甘、雲各省の都市		102.4	59.5	40.3	33.5
県級以下の賓館		40.0	30.0	30.0	30.0

(注1) 以上のサービス費用には、ホテル代は含まれていない。ホテルは選択可能であるが、その料金は実勢価格を徴収する。

(注2) 同じ場所、同じ時間に隊員数が15名を超える場合は、1人を無料とする。

●チベット地区の都市サービス費用

(単位：USドル)

地区	人数	1人	2～5人	6～9人	10人以上
拉薩飯店(ラサホテル)		216.22	131.62	103.24	91.89
西藏賓館(チベットホテル)		184.05	116.76	91.62	80.27
喜馬拉雅飯店(ヒマラヤホテル)		173.24	106.76	80.81	69.46
日光賓館		173.24	106.76	80.81	69.46
日喀則飯店(シガツェホテル)		81.08	62.16	62.16	54.05
江孜飯店(ギャンツェホテル)		81.08	62.16	62.16	54.05
樟木飯店(ザンムーホテル)		94.59	72.97	72.97	67.57
曲郷飯店		94.59	72.97	72.97	67.57
協格爾珠峰賓館(シガール)		81.08	62.16	62.16	54.05
沢当飯店(ヤートン)		81.08	62.16	62.16	54.05
県級招待所		40.54	32.43	32.43	32.00

(注) チベットの都市サービス費用には、食事代、部屋代、市内交通費が含まれている。ただし、空港からラサ市内までの交通費は含まない。

三、連絡官および中国側要員の費用

(単位：USドル)

職 務	連絡官			副連絡官			通 訳			高所ポーター			BC要員			低所ポーター		
	西	新	その	西	新	その	西	新	その	西	新	その	西	新	その	西	新	その
地区	蔵	疆	他	蔵	疆	他	蔵	疆	他	蔵	疆	他	蔵	疆	他	蔵	疆	他
報酬金(人・日)	18.0	15.0	15.0	15.0	13.0	13.0	15.0	13.0	13.0	13.5	12.0	12.0	13.5	9.6	9.6	19.0	15.0	15.0
山中食()	13.5	13.5	10.0	13.5	13.5	10.0	13.5	13.5	10.0	13.5	13.5	10.0	13.5	13.5	10.0	-	-	-
装備費(人・回)	270	200	200	270	200	200	270	200	200	405	300	300	270	200	200	-	-	-
保険料()	80	80	80	80	80	80	80	80	80	200	150	150	80	80	80	-	-	-

(注) 新疆地区は外国人の山中食を請負えるがその費用は15ドル(人・日)とする。外国側は、中国要員に燃料、炊事用具、テントを提供しなくてよい。

四、輸送費

(一) 車の使用料

(単位：USドル/車・km)

	チベット	その他	駐車料金	当番車の駐車料金
ジープ ファストクラス	0.85	0.60	70	40
〃 サードクラス	0.60	0.48	50	25
ミニバス ファストクラス	1.80	1.20	100	—
〃 セカンドクラス	1.20	0.86	60	—
大型バス ファストクラス	1.90	1.51	100	—
〃 セカンドクラス	1.50	1.20	70	—
トラック	1.30	0.90	60	40
軽トラック	1.00	0.70	50	30

(注1) 当番車の駐車料金については上の表を参照のこと。

(注2) チベット地区の空車の料金については、ファストクラスジープ、BC当番車については使用料と同料金として計算する。大型バス、ミニバスについては使用料の80%で計算、その他の車については50%として計算する。

(注3) その他の地区の空車の料金については、使用料の50%として計算する。

(二) 道路補修費

(単位：USドル/車・回)

種 類	大 型 車	小 型 車
シガルからチョモランマへの専用道路	162	108
マザーからイリクへの専用道路	135	81
チベットの他の山への道路補修費および草地損失費	81	41

(三) 荷役動物の雇用料金

動物の種類	新疆・青海・四川等	K2地区
ラクダ	23	27
ヤク・ウマ	18	—

(注1) 停留費用は上記レートの50%とする。但し、動物の往復費用は徴収しない。また工人も別に料金を徴収しない。

(注2) チベット地区

- (1) ヤクは一日一頭につき11ドル、停留期間は半額を徴収する。
- (2) ヤク工は三頭ごとに一人雇用すること。
- (3) ヤク工の保険料、装備費は1人につき120ドルとする。報酬金・食事代は1人1日15ドルとする。
- (4) 往路と帰路あわせて4日間分の費用を支給すること。

五、山地の環境保護費

1人毎回15ドルとする。

登山隊が、国家自然保護区を通るとき、関係部門の規定に基づき、別途費用を徴収する。

御協力者芳名簿

アルファー食品(株) 味の素(株) 秋田県経済連合会 荒川商店 一文字屋(株) 稲葉英夫 (株)大田計器製作所 (株)ICI石井スポーツ 岩館センベイ店 亀田製菓(株) (株)極洋 近喰司 サンヨー食品(株) 桜食品 佐藤博 佐藤食品工業(株) 佐原正行 新進食料工業(株) 十条キンバリー(株) (株)白子 新郷信廣 (株)ソニー・エナジー・ラック ダマル(株) タミノ井酢(株) 武輪水産 テムポ化学 登喜和冷凍食品(株) 東レ(株) (株)永谷園本舗大阪支店 ニッカウキスキー(株) 日本ジフイ食品(株) 日本紅茶(株) 日東プラスチック ハウス食品工業(株) 八戸缶詰 八戸物産 ヒガシマル食品(株) 日立マクセル(株) フジッコ(株) 福井酒造店 藤森工業(株) 宝幸水産 堀江商店(株) (有)マジックマウンテン 丸美屋 万田(株) ミヤコスポート(株) (株)三国コーヒーサービス 三島食品(株) 宮重酒店 森山安次 ユニバーサルトレーディング(株) 理研ビタミン(株) (株)ロッテ 六甲バター(株) 渡辺彦兵衛商店 渡辺斉 (順不同、敬称は省略させていただきました。)

ンドヒマラヤ会議」の準備があった。合い間を見て「中国登山の手引」改訂版をも編集しなければならない。

さて、ミニヤ・コンカの報告書は……。皇冠峰には私自身が行くことになった。1992年秋は息子の高校進学の大変な年である。煩悩の塊りを自認する私も人の子である。

報告書の発刊は、出発前から決っており、隊員もそれぞれ自覚して執筆してくれた。何より祝賀会を6月第1週に八甲田山の松館御殿で春スキーを楽しみながら×××をも併わせて鑑賞しようと云うことが自然の成り行きで決まっているため、待たなしの状況なのである。

報告書の発行は手慣れたものであるが、今回の場合はさらに凝って内容を充実させたいとの欲望があった。洪水のように溢れる出版物の一端を担うのであるから少しは考えてはいたのである。

隊内では「この報告書の前に報告書なし、この報告書の後に報告書なし」が合言葉であった。それが実現できなかったことは明白である。

とにも角にも、ミニヤ・コンカ隊の私と中川はクラウン峰へ、森谷と川上(須藤)はヌン峰へ向かうことになった。本報告書で成し得なかった事は次回の報告書で実現したいものである。

(記・山森 欣一)

編集後記

霧のミニヤ・コンカから帰国すると、直ちに翌年の登山隊の組織に入らなければならなかった。

1. 中国、新青峰
2. " 雪宝頂
3. " 皇冠峰
4. インド、サマーキャンプ ヌン峰
5. " 日印合同女性隊

そして、恒例の年初に行わなければならない「イ

発行日 1992年5月

発行所 日本ヒマラヤ協会(HAJ)
(The Himalayan Association of Japan)

〒169 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号 ☎03-3367-8521

FAX 03-3367-4509

振替 東京0-48954「日本ヒマラヤ協会」

編集人 山森 欣一

